



TITLE:

現代中國の歴史性 - 「儒法闘争に
學べ」 - 運動にみえる呂后、武則
天讃美の論理とその挫折 -

AUTHOR(S):

竹内, 實

CITATION:

竹内, 實. 現代中國の歴史性 - 「儒法闘争に學べ」 - 運動にみえる呂后
、武則天讃美の論理とその挫折 -. 東方學報 1978, 50: 313-458

ISSUE DATE:

1978-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/66549>

RIGHT:

現代中國の歴史性

——「儒法闘争に學べ」運動にみえる呂后、武則天讚美の論理とその挫折——

竹 内 實

はじめに——女皇の夢

第一章 「毛澤東時代」の設定

一 「毛澤東時代」について

二 「毛澤東時代」の時期区分について

第二章 「文革派」對「脫文革派」の抗争・女皇の夢の論理

一 「文革派」對「脫文革派」の抗争

a この期における左右へのゆれ

b 「批林批孔」を方向づけた二論文

c 「文革派」・「脫文革派」

d 梁效と羅思鼎——「文革派」の執筆者集團

二 女皇の夢の論理

a 「文革派」の實力行使

b 呂后、武則天讚美の諸論文

1 江青の呂后、武則天賞讃

2 羅思鼎論文について

3 梁效論文について

4 勞働者理論小組論文について

5 梁效論文について

6 翟青論文について

第三章 「文革派」の挫折・女皇批判の展開

一 歴史の懲罰と周勃讚美

二 周勃讚美の諸論文

1 徐遜論文について

2 李・隋論文について

3 『呂后そのひと』の序文について

むすび——現代中國の歴史性

年表 一 中國文化界の動向 略年表（一九四九～一九七七）
年表 二 中國文化界の動向年表（一九七一・一二七七・六〇）

はじめに——女皇の夢

毛澤東夫人の江青が武則天や呂后をもって自任していたことは、こんにちではすでによく知られている。彼女は、「わたしを

武則天だというひとがおります。また、呂后だというひとがおります。わたしとしては、光榮のいたりにたえません」と語ったという⁽¹⁾。そして、それにつづけて、「呂后は帽子をかぶらなかつた皇帝です。實際上、政權は彼女の手中にありました」とものべた。政治的、思想的なレッテルを貼るとき、いまの中國では、「帽子」をかぶせる、という表現をもちい、レッテルを解除されたとき、「帽子」をぬぐ、という。江青は、そうした日常的な俗語をもじって、呂后は正式に皇帝に即位したわけではないが、とのべたわけである。江青がするように呂后を評價したことは、司馬遷が『史記』を書くにあたつて、高祖のあとをついだ恵帝（孝惠帝）を本紀にいれず、「高祖本紀」につづけて「呂后本紀」をたてたことにてらしても誤りとはいえない。江青が、このことばをのべたのは、一九七六年二月～三月のあいだに、二回にわたつて彼女じしんが召集、開催した、若干の省・市責任者の會議の席上においてであつた。その三月に開催された會議では、聲をあげまして、「呂后を誹謗することは、わたしを誹謗することです。目的は主席を誹謗することにあるのです」と語つたという⁽²⁾。毛澤東が病い重くなつてから、また死去してから、「わたしを呂后だ、武則天だ、と罵るひとがいる。わたしこそ、呂后なのだわ。わたしこそ武則天なのだわ」と叫んだ⁽⁸⁾。

さらに、「だれであれ、この江青^{わたし}が女皇になるのに反對する人間は、婦人解放に反對し、共產主義に反對する人間です」とのべ、毛澤東の死去のころには、また「黨中央、政治局は『大男子主義』だ」とか、「生産力の發展にともないまして、將來國家を管理するのはやつぱり女の同志であります」、したがつて、「男は位を譲り、女が管理するようになります」、「共產主義になつても女皇は生まれます。つまり、女皇が存在する共產主義をやるのです」とも語つたという。

彼女は、呂后について、「偉大な封建政治家です」とものべたが、歴史上の后妃についても、たとえば、漢の武帝の後、衛子夫は「宣傳しなければいけません」とか、武則天は、はじめ彼女が仕えた太宗よりもすぐれていたとして、「人心を獲得しましたね。李世民よりも階級的基礎が厚かつたのです」といい、隋、煬帝の後で煬帝を諫めた蕭后について、「たいしたものです」などといったといわれる。北京郊外の頤和園で一般市民の出入をさしとめて遊んだとき、慈禧太后、すなわち西太后の

鳳冠をもつてこさせ、これを戴いてはしゃいだ。⁽⁴⁾

これらの后妃、女皇のなかで、江青は、正式に即位した武則天を標榜し、このため、唐代の貴婦人の服裝を研究させ、これを中國の婦人の一種の制服、「國服」として普及させようと考えたり、唐代の女官がよく馬にのつたところから、自分も乗馬に興味があるかのごとくみせようとした。⁽⁵⁾

そのいっぽう、漢の高祖の後、呂后（呂雉）にも關心をよせたことは、すでにふれた彼女の發言からもわかるが、呂后が山東省（單縣）出身であることが、自然と同じ山東省（諸城縣）出身の自分を連想させる効果をも計算にいれていたであろう。呂后熱にかかっていた江青は、陝西省咸陽附近から、呂后のものと推定される、篆文で「皇后之璽」と刻まれた白玉の印が出土したことを新聞で知ると、興奮狂喜して、専門の學者に鑒定させ、報告書をその晩のうちにとどけさせたこともあった。⁽⁶⁾

毛澤東が死去すると、江青にあてて、慰問の手紙を出そうといううごきがあったが、これは江青がかねて、武則天が、六萬人の請願によって、やむなく即位したことを賞讃していたからである。「手紙には、毛主席の功績は少なく記し、主として江青のわれわれにたいする配慮を書け」という指示がなされた。⁽⁷⁾

江青は女皇、女帝の夢のなかにあった、といえよう。

中國史上、正式に即位した先例としては武則天を念頭におき、第二の女皇、女帝となる夢を夢み、その夢をひたすらおいづけたことを、これらの自畫自賛の發言や自己顯示的な行動は物語っている。夢を描くことはだれにも許されているのだから、江青は毛澤東夫人としての地位に目覺め、毛澤東の死後、空白になるであろう權力の座に坐ろうとし、中國の歴史のなかから、きらびやかではれがましい女皇、女帝、あるいは皇后、妃をひっぱりだして、自分の前途の裝飾としたものであろう。チエホフの「可愛い女」のように、自分にあたえられた人生に自分のなま身をみあわせるようにして、女皇の夢を描いたのであろう。それはあまりにも大きすぎたから、かえってたいあいもない夢でしかなかったとおもわれる。

しかしながら、夢そのものはたいあいもないものでしかなかったとしても、この「可愛い女」が手にしていた現實の條件は、

政治的な、あまりにも政治的なものであった。その夢を指して、個人が夢みる夢だというには、彼女をとりまく、さまざまな現實的なひっかかりが存在した。江青もまた、自己の手中にある條件と、自己をとりまく現實的なひっかかりを承知していた、その夢を夢の世界に屬するものとしてではなく、現實の世界に屬するものとして考えていた、とおもわれる。

これらの、いわば自畫自賛の發言にさきだつて、彼女は自らの發言、畫策のもとに、呂后、武則天を贊美する論文を執筆、發表させている。それは、自己顯示であり、反對者にたいする恫喝であつたろう。また、世論の醸成を意圖したものであつたろう。そしてそれが、實際上、ひとつの國家において、餘地を残すことなくすすめられた社會運動の一環でもあつたことは、否定できない。

彼女は夢を夢みていたのだとしても、夢の世界にあつて夢みていたのではない。少なくとも、現實世界において夢みていたのである。そして、その夢は、現實世界において夢みられたものにふさわしく、現實世界において結末をむかえたのである。

彼女が、自らを武則天や呂后になぞらえたこと、そして公式の會議の席で、あたかも自然にまきおこつた世論として、武則天や呂后になぞらえられているかのように、自ら語つたこと、さらに、じつはそれより一年前まえ、自ら畫策してそのような世論をつくるために呂后、武則天讚美の論文を發表させていること、などなどは、二十世紀七〇年代に堂々と存在する一國家に發生した現象としては、まことに奇妙であり、グロテスクでさえあるが、しかし、中國の長い歴史をふりかえると、その長い歴史の尖端に位置する現代に、そのような事件、現象が發生したとしても、それほど意外ではないようにおもわれる。また、二十世紀の國家には、奇妙なこと、グロテスクなことは一切發生しないということもありえないのである。じじつ、それは現實に發生したのであつた。

しかしながら、この夢はまた、政治的、現實的なものであつただけでなく、歴史的なものであつた。個人の夢といおうにも、個人の次元を超えて、あたかもひとつの舞臺劇のごとく歴史が再演されたのである。江青が、そうありたいと願望を抱いた歴史上の人物が、歴史上たどつたとおりの経緯を、江青は、ふたたび演じた。はたして江青は、そこまでは考え及ぶことなしに、

歴史上の人物に、みずからなぞらえたのであろうか。

再演されたのは、呂后である。

呂后（呂雉）は、天下を統一し、漢王朝を創立した高祖（劉邦）の妻であった。そして劉邦の死後、形式だけの皇帝をたて、十六年間にわたって權力を掌握した。たしかに、中國革命に勝利し、人民中國を樹立した最高權力者の妻が、自らなぞらえるふさわしい、歴史上の人物であつて、『史記』呂太后本紀も、「呂后、ひととなり剛毅にして、高祖を佐けて天下を定め、誅するところの大臣は、多く呂后の力による」といつている。呂后が夫の死後、寵愛をうけた戚夫人の手足を斷ち、眼をえぐり、耳をやきただらせ、啞になる藥を飲ませてこれを廁におき、「人彘」と名づけたことを、江青がどのように考えたかはわからないが、文革（プロレタリア文化大革命）のさい、毛澤東をたすけて活躍し、劉少奇、王光美夫妻をはじめ、多くの古參の高級黨員を追放した自分には、その末尾の、「誅するところの大臣は、多く呂后の力による」は、まことに適切な讃辭である、と考えたのではないか。

だが、その呂后は、死後にわたつてまでの完璧な成功者ではなかった。呂后が危惧を抱きつつ死ぬと、丞相陳平、太尉周勃、朱虛侯劉章らによつて、呂氏一族は誅滅される（情報をもたらしした平陽侯曹窋の功績も無規できない）。それは劉邦の、臨終にさいしての、自分の死後、劉氏の天下を安んじる者は必ず周勃だ、という豫言が實現したのにほかならない。江青の描いた呂后の夢には、このところが缺落していたのである。

漢の高祖は、淮南王黥布とたたかたさい、流れ矢にあたつた。おそらく破傷風にでもかかったのであろう、行軍の途中、危篤状態におちいった。呂后が名醫と噂のたかい醫者をつれてきたところ、高祖は罵つて、おいこえした。『史記』高祖本紀のこのあたりは、わが元祿のころの『通俗漢楚軍談』によると、いくらか潤色されているが、つぎのようであつた。

《汝ら、なにゆえに山野の匹夫を重んじて朕がまえに引き來れる。朕、布衣より起り、三尺の劍を提げて了に天下を有つ。是みな天命なり。朕が命は天にあり。いま、朕が死すべきとき至りなば、たとい扁鵲がとき神醫なりとも、安んぞ

治することを得ん。」とて、了に脈をも窺しめたまわず、黄金五十金を與えて櫟陽に歸したまう。これより飲食しだいに減じ、御病日に沿うて重りしかば、呂后深くこれを患い、朝夕左右を離れず。少し御快き隙を伺うて、「萬一、陛下萬歳のち蕭何もし死せば誰をか宰相とすべき」と問いたまうに、帝いわく、「曹參もとより相國の才あり」。呂后、またその次を問いたまえば、帝答えていわく、「王陵を用うべし。しかれども王陵は少し不足なれば、陳平をもつて輔くべし。陳平は智餘りあれども、政を一人に屬し難し。また、周勃はひととなり重厚なれども文少し。しかれども、劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり。宜しく太尉に任ずべし」。呂后、またその次を問いたまえば、「その次は而もまた知るところにあらず」とて答えたまわす。(10) (引用にあたって加筆した部分がある。注参照)

劉邦の周勃にたいする期待はうらぎられなかった。

周勃は、呂后が生きているあいだこそ隱忍自重していたが、呂后が死去するや、ただちに呂氏の諸族を男女老少を問わず殺し、劉邦の子代王をむかえて天子とした。孝文皇帝である。

この呂后對周勃の天下爭奪を再現したかのごとく、毛澤東が後事を託したといわれる華國鋒が、一九七七年十月、江青を逮捕した。かつて呂后讚美の論文が發表されたのとはてのひらをかえすようにして（もしくは、犯人捜しの推理小説の解決篇が書かれるようにして）、いまや、周勃讚美の論文が出現し、題名を劉邦のことば、「劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり」からとつたものさえあるのである。その論文を読むとき、ひとつの腦裏には、歴史上の周勃とかさなつて、華國鋒のおもかげうかんでくるにちがいない。

周勃讚美の論文はいう。

《劉邦は生前に指摘した。「劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり」と。なぜ、「必らずや勃なり」といったかといえ、それは周勃が劉邦にしたがつて南征北戰すること數十年、長期の試鍊をへて、劉邦の事業にたいする忠誠をあらわし、また、實踐的經驗を比較的多くそなえていることによるのである。かれは厚重淳樸、よくひとと團結し、こと國家の運命

にかんする重大問題においては、原則を堅持することができ、愚かではなかった。鬭争においては深謀遠慮、機智果斷、膽略があった。事實が證明するように、周勃は劉邦の期待にそむくことなく、劉王朝が重大な危険に直面したせとぎわにさいして、「突起して傾危を定め」、呂后および「諸呂」の篡權奪位の陰謀をうちやぶり、法家路線を實施する漢文帝をえらび立て、劉氏王朝をすくった。これによつてもわかるように、劉邦が王朝の運命を周勃に委托したのは、遠くまでの見透しがあつてのことである。¹¹」

周勃が華國鋒であるとすれば、劉邦、および劉邦の生前の周勃にたいする信頼は、毛澤東、および毛澤東が華國鋒に書きあたえた「きみがやってくれるなら、わたしは安心だ」、に對應し、周勃のひととなりとしてのべられていることや、その原則性なるものは、いまの中國における、華國鋒そのひとについての認識に對應するであろう。法家路線が毛澤東路線の暗喩であること、これまたいうまでもない。

本稿は、泡沫と消えた江青の夢を、それが、公式の場、すなわち、『人民日報』や『光明日報』や『紅旗』や『學習と批判』などにあらわれた側面において整理することを試みたものである。すなわち、まず（一）ここ數年、一九七一年から七六年にかけてみられた文化界の動向（それは政治とからむ）の概略をあとづけ、（二）ついでそのなかで展開された「批林批孔」運動、「評法批儒」運動を概観し、（三）そのなかで出現した、呂后、武則天賞讃の論理をとりあげたものである。そして、さらに、（四）その現實の背後にあるものを、考えたものである。〈現代中國〉が〈現代中國〉としてとりだすことが可能であるところに示されているように、それ以前の歴史と斷絶する（もしくは、斷絶しようとしながら、しかし）反面、それ以前の歴史を繼承、反覆するかにみえ、そして、事實として繼承、反覆している、そのような歴史性、すなわち、抽象化して〈歴史のなかの現代〉とも、逆轉させて〈現代のなかの歴史〉とも呼ぶこともできる、この、〈現代中國の歴史性〉を考えたものである。

第一章 「毛澤東時代」の設定

一 「毛澤東時代」について

一九七六年は、劃期的な年であった。新中國、すなわち一九四九年に成立した、ひとつの體制とその政治的文化的狀況が、ひとつの時代をここで區切ったのである。いわゆる新民主主義革命は一九四九年に勝利を告げたが、しかし、中國革命はいまだ完成していないと考えるなら、そのような中國革命の長い過程のなかから、ここで、この一年だけをとりだすことは、かえってことがらを見誤るものになるかもしれないという危惧を抱かないわけではないが、それにしてもこの年は、周恩來、朱德、毛澤東があいついで死去しているのである。この三人が、この年に死去したということにおいて、この年は特別な年となったが、さらにその死去がもたらした狀況によって、いっそう特別な年になった。そこで、この年は時代を區切る年だ、すなわち、この年をもってひとつの時代が終ったのだ、とわたしはみとめるのである。

一九七六年に、もし時代が區切られ、ひとつの時代が終ったのだ、とするなら、新中國成立からこの年までの二十七年間、四分の一世紀をいくらか超過したこの時期を、どのようにか名づけ、特徴づけることができればならない。

私見では、この時代を「毛澤東時代」と名づけることができるとおもう。

もとよりそれは一九七六年に毛澤東が死去したことを念頭においている。しかしそれのみをとりあげようとするものではない。また、かれが従事した革命運動や國家建設の事業の成果、かれが文章や行動で示したその思想の影響力、中國の民衆をひきつけて中國の統一へと求心的にむかわせるその權威性、といったものが、一九七六年で終った、といおうとするものでもない。まして、かれと拮抗し、かれとからみあうそれぞれの人物の獨自性を無視しようとするものでもない。しかし、なま身の存在と

しての毛澤東が死去したということの意味は、かれの死後、満一カ月にたつせずして發生した、いわゆる「四人組」、王洪文、張春橋、江青、姚文元らの逮捕にみとめることができる、とわたしはおもう。「四人組」のひとり江青は、ここていまさういうまでもなく、毛澤東未亡人である。彼女の思想的政治的位置づけはしばらくおき、毛澤東の生前には起りえなかった江青逮捕が起きたというところに、なま身の存在としての毛澤東の死去のもたらした變動をみとめることができるとおもわれるのである。すなわち、毛澤東が死去した日から、江青が變質して逮捕すべき人物となったとは考えられないから、そうである以上、毛澤東が死去する以前から江青は逮捕するに値する存在にはかならなかったが、毛澤東が生きているというそのことによって、江青は逮捕されずにいた、と考えざるをえないのである。逮捕するに値する存在とは、犯罪者であるにかならず、この事情は、逮捕された「四人組」のほかの三人にも共通であつて、中國の公式の判斷によれば、「張春橋は國民黨特務分子、江青は叛徒、姚文元は階級的異分子、王洪文は新しく生まれたブルジョア分子である」⁽¹²⁾というから、やはりここにも、毛澤東の死去を區切りとして、かれらの逮捕、監禁がはじめて可能になった狀況が生じたことは、みとめなければならない。

それでは、「毛澤東時代」という區切りが成立するなら、この時代の特徴をどのようなものとして考えることができるだろうか。

それはほかでもない、すでにのべたことの逆の方向からのくりかえしになるが、なま身の毛澤東が存在したことが「毛澤東時代」を特徴づけるのである。そして、なま身の毛澤東が存在したことは、ほかのいかなる政治的側面にもましてとりわけ全中國をまきこむ社會運動を發動するうえに決定的な事實であつた。文革、すなわちプロレタリア文化大革命は、魅力あふれる主演俳優と臺本にひきつけられ、觀客もまた俳優としてふるまうにいたつたほどの大活劇であつたが、なま身の毛澤東が存在しなかつたとすれば、とうていあれほどの大衆動員はできなかったであろう。文革にいたるまで執拗にくりかえされた、文藝批判、思想批判の社會運動もまた、毛澤東の政治力があつて可能であつたことである。すなわち、毛澤東は、大衆をふるいたせる感染力、呪縛力をもっていたばかりでなく、そのような場にまで長期的に大衆をみちびいていく組織力、教育力をもつ

ていた。演劇でいえば、かれは観客をひきつけ、舞臺で拍手を浴びる主演俳優として、あくまでもなま身の毛澤東でなければならなかったが、しかしいっぽう、舞臺にあらわれず俳優をおしえる演出者、日程や演目や出演者をきめ観客の最大の動員をねらう制作者としての役割をうけもっていた、ということである。すなわち、新中國になってくりかえされた文藝批判、思想批判の社會運動は、文革からふりかえってみると、かれにとっては文革という最高の舞臺の幕をあけるための、演出者・制作者としての、辛抱づよい傍役俳優や観客にたいする教育や訓練にほかならなかった（かれは演出者・制作者としてのみでなく主演俳優としてもふるまってきたとはいえ）。そして、一貫して使われた臺本が「毛澤東思想」というわけであった。その臺本はかれの死後も、書物のかたちを失わずに残っており、その臺本をいちおう引用する能力をもつ演出者・制作者はいるが、毛澤東ほどに演技のできる主演俳優がさしあたってはみあたらない、というのが、「毛澤東時代」のつぎの時代のはじまりにたたされた人間が感じている状況であろう。すなわち、つぎの時代からふりかえった「毛澤東時代」とは、そのような缺落のない時代にほかならないのである。

ここで、俳優とか、臺本とか、舞臺といった比喩をすてて、権力のありかたの側面から「毛澤東時代」を眺めるなら、そこには、なま身^みの毛澤東にふさわしい、皇帝型権力という権力の枠組みがみとめられる。この皇帝型権力という枠組みは、毛澤東が自己の掌握した権力にふさわしくいわば手づくりでつくった権力の枠組みだ、といえるが、しかしいっぽう中國の歴史、あるいは歴史的中國がすでに準備していた枠組でもあった。この皇帝型権力にたいし、「毛澤東時代」には、これも歴史的中國が準備した権力の枠組みとして、宰相型権力があったことが、これまたみとめられる。皇帝型権力は、自己の無謬性を誇るためにも、また民衆を統治する政治の實務のうえでも、宰相型権力の輔弼を必要とするが、宰相型権力もまた皇帝型権力の光被がなければ安定しない。そこで、皇帝型権力と宰相型権力はたがい^{たがひ}に補完しあうことによって、完璧な権力體制となることができるが、この兩者のあいだには協力関係ばかりでなく對立関係が生じることもあり、ときとして宰相型権力が皇帝型権力を凌ぐ^{しの}局面がみられることもあるが、窮極的に絶對的な優位を占めるのは皇帝型権力である。それは宰相型権力を無力にする

ことも可能である。もとより、権力闘争は、権力の枠組みと権力の枠組みとがあい争うというものではなく、個人が抗争するのであるが、しかし、中國の歴史、もしくは歴史的中國が、傳統的にそれぞれの権力の枠組みに付與している順位性、權威性、呪縛性が、個人の能力を超えて作用している側面はあるはずである。そして、この「毛澤東時代」は、皇帝型権力の枠組みにふさわしい、性格、威嚴、資質、文風をもった人間、すなわち毛澤東が存在した時代だ、ということである。宰相型権力についても同様のことがいえよう。¹³

このような権力構造をまえにしては、政黨としての中國共產黨もまた、抽象的・一般的に政治組織として存在することはありえない。中國共產黨が一九二一年に成立していろいろの経過を、すべて毛澤東と有機的に關連づけることは、事實の経過としてもゆきすぎになるが、少なくとも毛澤東は抽象的・一般的政治組織として前提にされる黨内民主主義なるものの庇護のもとに、黨の最高の地位である主席、すなわち中國共產黨中央委員會主席に就任したのではなかった。そして、就任したあと、抽象的、一般的政治組織として中國共產黨を指導し、運営したのでもなかった。黨主席、毛澤東と中國共產黨の關係は、〈君臨する存在〉對〈率いられるものの集團〉という構造であつたとおもわれるのである。それは民衆を統治する政治機構としては、歴史的中國における官僚制度を現代において代替するものにほかならなかつた。¹⁴

ところで、ふたたび主演俳優の比喩にたちもどるなら、以上のべてきたような「毛澤東時代」にたいする特徴づけにたいし、あるいは疑問が生じるかもしれない。すなわち、もし、「毛澤東時代」のつぎの時代においても、やはり主演俳優が登場したなら、「毛澤東時代」を主演俳優が存在した時代と規定することは、意味のないことになるう、という疑問が、である。

だが、もともとわたしの上述の規定は、いま、すなわち、「毛澤東時代」が終つたばかりのところから、約二十七年間をふりかえつておこなつたものである。もし、これからの二十年間、あるいは三十年間、べつ主演俳優が登場、活躍するなら、その時代が終つたとき、その時代にたいして「毛澤東Ⅱ時代」と名づけ、「毛澤東時代」をあらためて「毛澤東Ⅰ時代」と名づけ、この二つの「時代」をあわせて考察すればよいであらう。(だが、もし、「毛澤東Ⅱ時代」が形成されるなら、わたしが、

上述のように規定した「毛澤東時代」にたいする特徴づけはやはり有効であるはずである。そしてもし、「毛澤東Ⅱ時代」が形成されないなら、これまた上述の特徴づけが有効であることは、いうまでもないことである。）

二 「毛澤東時代」の時期区分について

しかし、以上の特徴づけがみとめられるにしても、この「毛澤東時代」は、そのような特徴づけによる単色しかみとめられない、というのではない。

文化界の状況をもとに、約二十七年間のその時代を眺めると、この時代にいくつかの時期を設定することができるようにおもふ。

すなわち、それは、つぎのような時期となるのである。⁽⁹⁾

- I 毛澤東路線の設定（一九四九年～五五年）
- II “百花齊放、百家争鳴”の展開・ひきしめ（一九五六年～五九年）
- III 二つの路線のせめぎあい（一九六〇年～六四年）
- IV 文化大革命（一九六五年～七〇年）
- V <文革派>對<脱文革派>の抗争（一九七一年～七六年）

以上、區分された時期のなかには、一本調子にひとつの方向へうごいているようにみえるものと、左右へのゆれをふくむものがある。前者に屬するのは、「I 毛澤東路線の設定」期、「IV 文化大革命」期であり、後者に屬するのは、「II “百花争鳴”の展開・ひきしめ」期、「III 二つの路線のせめぎあい」期、「V <文革派>對<脱文革派>の抗争」期である。後者について、「左右へのゆれ」といったが、正確にいうと、まず右へゆれ、それから左へゆれている。毛澤東は、「一張一弛」とか、「放と收」とかいうが、まず、「弛」もしくは「放」がきて、それにたいしてつぎに、「張」もしくは「收」がき

ているのである。もとより、以上左右のゆれが、すべて毛澤東が最初から意圖してそのように、政治的状況を操作したものだということとはできない。しかし、毛澤東に、一種そのような政治哲學的な發想があることも否定できない。⁽¹⁵⁾

毛澤東の發想からして、左右へのゆれが、かならずしも、全面的に否定すべき状況ではないとしても、以上の五つの時期のなかでは、「Ⅳ」期がもっとも「毛澤東時代」の理想のすがたのようにみえる。それは、「毛澤東時代」のなかでもっとも毛澤東的な時期であった。「Ⅰ」期に開始されたものがほんらい生々發展すべきであったのに、「Ⅱ」期、「Ⅲ」期において妨害をうけ、妨害者と對立、抗争したあと、「Ⅳ」期にいたってようやく勝利を占めた、とあとづけられよう。

毛澤東の革命觀については、さまざまな角度から解釋することができるが、かれが、「湖南農民運動觀察報告」でのべている「革命は、客をよんで宴會をひらくことではない。文章をつくることではない。繪をかいたり刺繡ししゅうをしたりすることではない。そんなふうな風流で、そんなふうにおおらかにかまえた、文質彬彬で、そんなふうに溫、良、恭、儉、讓ではありえない。革命は暴動である。ひとつの階級がひとつの階級の權力をくつがえす激烈な行動である。」⁽¹⁷⁾という箇所にもっともよくあらわれているのは、革命とは大衆動員による暴動だ、という革命觀である。しかも、それは一回かぎりの革命ではない。

毛澤東は、革命はくりかえしおこなわなければならない、と考えていた。かれは、文革をひかえて江青にあててつぎのように書きおくっている。「われわれの現在の任務は、全黨、全國において部分的に（全部ではありえない）右派を打倒することであつて、さらに七、八年すぎたら、もう一回、妖怪變化を一掃する運動をやります。それから何回かやります」⁽¹⁸⁾。

そして、革命は、既成のマルクス主義に束縛されるものでない、と考えていた。「マルクス主義の道理は、千條も萬條もありますが、根本をたずねるなら、つまるところは一言、*“造反有理”*に盡きるのであります」⁽¹⁹⁾。

すなわち、革命とは暴力であり、反覆されるものであり、「造反」という原衝動に發するものだ、というのである。このような革命觀がもっとも毛澤東的な革命觀であるとするなら、「Ⅳ」期に示された、紅衛兵の氾濫、そして紅衛兵による實力行使はこのような革命觀の保持者にとって、まったく喜ばしいものであつたにちがいない。

もちろん、新中國成立以後、具體的な意味での革命などあるはずはないから、文革は、いわばもつとも實戦に近い模擬戦という程度において、革命運動であつたにすぎず、紅衛兵も、その自發性はみとめられるとしても、管理されていたのである。しかし、革命の後継者を養成しようとする毛澤東の意圖はかならずしも的はずれではなく、部分的には、模擬戦の限界を超えた實戦が演じられた。そこにおいて、「革命は、客をよんで宴會をひらくことではない」という革命觀の正しさは立證され、この「IV」期の昂揚をむかえる準備期として、それまでの各期があつた、ということができるのである。

しかしながら、このような、「IV」期を「毛澤東時代」のもつとも理想的な時期としてみるみかたは、毛澤東による、「文化大革命の内譯は七三だ。七分の成果、三分の誤りだ。」という評價と抵觸するのである。この、「七分の成果、三分の誤り」が、具體的になにを指しているかはあきらかでないが、中國の公式の説明では、「七分の成果は毛主席の指導のもとにかちとられたものであり、三分の誤りは林彪、陳伯達、および張春橋、江青、姚文元、王洪文がひっかきまわし、破壊したことによつてもたらされたものである。」⁽²⁰⁾となつてゐる。この説明によつてもなお、「三分の誤り」の内容はあきらかではないが、この箇所につづいて、文革において、もつとも革命的、先進的とおもわれた部分が、じつはその正反對の人間によつて占められていたと指摘しているあたりは、「三分の誤り」にふくまれる文革の否定的要素を数えているのにほかならない。すなわち、ここでは、つぎのように指摘されている。

《「四人組」は、「先進分子の側に立つ」、「造反派に依據する」と自稱した。かれらのいわゆる「先進分子」と「造反派」は、いかなる人間か。かれらは、新舊の反革命分子、うちこわし・かっぱらい分子、汚職・窃盜分子、身賣りして身をよせたいわゆる老幹部、魂を賣りわたした恥しらずな文人、ひそひそと耳うちし、不正な訴えをおこなう投機分子、牛鬼蛇神、ごろつき・チンピラ、社會のくず、を多數かき集めた。かれらは、これらの人間をとりたてて封じ、「反潮流」の「先進分子」、「あたまには角をはやし、からだには刺をはやし」⁽²¹⁾ている「造反派」であるとした。これらの人間にたいし、黨員でないものには突撃入黨、官職のないものには突撃拔擢をおこなつた。かれらは、一般におやまの大将となつ

て、なかまをかきあつめたのでも、派閥をつくつたのでもなく、反革命の黒い組くみを設立したのである。かれらにはかれらの組中央ぐちゅうがあり、大旦那がい、軍師がい、司令官がい、宣傳部長がい、世論をつくる道具があり、祕密情報連絡網があり、基地があり、特務連絡所があつた。かれらの黒い手は、中央の若干の部門と若干の省・市機關につつまれていたうえ、かれらは「第二の武裝」までやつたのである。⁽²⁾

以上の評價は、文革について、毛澤東が七と三の割合いで成果と誤りをみとめた、そのことばを引用したあとにのべられている。したがって、文革のつながりとしては、「四人組」の罪惡をのべるにしても、それがどのように文革の否定面と結びついているのか、あきらかにされてよいはずであるが、すでにみられるように、もっぱら「四人組」が結集した人材がいかなる性質のものであつたかが暴露され、糾弾されているにすぎない。ここで描きだされているのは、犯罪組織まがいの祕密地下組織をつくつて暗躍する「四人組」のすがたであつて、文革そのものにたいする評價はのべられていないから、われわれ（あるいは、わたし）が、このような記述を読んで、ここに文革のさい喧傳けんでんされた、「魂にふれる革命」の片鱗けんもうかがえないのにおどろいたとしても、また、文革が、このような指導者や指導部によつて指導された革命（革命とよぶことができるとして）であつたとすれば、はたしてそこにどのような人類の未來がさし示されているのか、疑問をいだいたとしても、それは不當な反應だということにはならないであろう。

文革について、それがどのようなものであつたか、まだ定説はない。中國の内外に、少なからぬ定説がある（あつた）が、それらはときに矛盾し、ときに、現實のある局面については眼をそむけている。わたしは、文革を考えるばあい、〈現實におこなわれた文革〉と、積極的に推進したひとびとが、〈頭のなかに描いていた文革〉とを、まず區別すべきであろうとおもう。積極的に推進したひとびとといっても、少數の文革小組の構成員とその指揮下にあつた多數の人間はちがい、多數の人間のなかでも職場や學校の範圍では指導部に屬した人間とそうでなかった人間はちがう。しかしいちおう、頭のなかに描いていた文革、すなわち文革の理想は、舊いものを打倒し、新しいものを樹立するところにあつた、とみとめられる。そして、舊いもの

とは、ブルジョア思想、およびそのあらわれ、であり、新しいものとは、毛澤東思想にほかならないが、しかし、そのブルジョア思想、毛澤東思想なるものも、頭のなかに描かれていたものである。そして、この文革の理想は、ただ頭のなかに描かれていたのではなく、現實に發動されたことによって、いわゆる文革となったが、その現實過程も、わたしは重層的なものとして考えるべきであるとおもう。重層的なものといっても、建築物が何階にもわかれているように現實が明確に區切られていて、ひとつの行動が、どのレベルかにのみ屬するということではないが、しかし以上のような理想を實現するものとして、文革は重層的であつた。すなわち、(一) 思想レベル (二) 制度レベル (三) 權力レベル (四) 社會的權威レベル (五) 社會氣風的レベル (六) 文藝レベル (七) 學術レベル、といった各層が一體となつて、文革の總體を構成しつつも、しかし相互に獨立しているのである。そして、窮極的には權力闘争にほかならなかつたと考えられるのである。したがって、(三)の權力レベルにこそ文革のもっとも集中的なあらわれがあつたのであるから、(三)以外のほかの層は、じつはこの(三)のレベルに奉仕し、これを正當化する手段としての比重しかなかった。だが、また、ひるがえつて、權力闘争が(三)以外の層に奉仕するという側面もなくはなかつた。

このようなものとして文革を理解するとき、(そして、少なくともわたしはこのようなものとして文革を理解するのであるが) まえの引用に示された、“四人組”にたいする糾弾は、まさしく、權力闘争がもつ非情な側面をいきいきと示す激越な口調にみちているとはいへ、文革をさまざまな側面から總體的にとらえようとしているものではない。

もともと、このような“四人組”糾弾は、ほかでもない、まさに“四人組”糾弾のために執筆され、公表されたものであるから、文革を總體的にとらえることなど、はじめから意圖していいのであるが、しかし反面、文革とはなんであつたかをあきらかにするには、中國の讀者にとっては、おそらくこのような記述と論調で十分であり、かつ適切なのであつて、だからこそ七分の成果も、三分の誤りも記述がないのであろう。“四人組”にたいする猛烈な糾弾を讀むとき、胸のおくや頭のすみから當時の記憶が蘇ってきて、なんら他人のことあげを待つ必要はないはずである。

だが、そうした、讀者の革命體驗の有無とはべつに、右に引用した部分では、「IV 文革」期と、それにつづく、「V 文革派」對「脱文革派」の抗争」期とが、混在していることが注目される。右の引用にみえる「造反派」は、「IV」期に、「反潮流」、「第二の武裝」は「V」期にそれぞれ屬することがらである。「IV」期における文革、「V」期における「反潮流」や「第二の武裝」の民兵や「批林批孔」運動といったものを總體としてとらえ、それらを推進した「四人組」の正體をここでとりだしているのであるから、とりたててこの二つの時期を區別することは必要としなかったであろうが、しかし、現在までのところ、『人民日報』、『光明日報』などにみられる「四人組」批判の諸論文・諸發言はもっぱら「V」期のもろもろの事象にむけられており、「IV」期の文革を總體としてとらえて言及することは、ない。それは文革そのものを評價すること、および評價にたちいることを注意ぶかく避けているのだとおもわれる。そこで、二つの時期を區別しない右の引用の論調は、一般の讀者にはほとんど定着しているであろう「V」期における「四人組」の惡を、「IV」期にまで遡って印象づける效果をもっているとおもわれる。かれらが結集した人間のなかに、「牛鬼蛇神」をいれているのは、文革のさい、打倒目標とされた人間に貼られたレッテルであり、文革中もつとも流行した罵語であつて、ここは、それを「文革派」の「四人組」に投げかえしたものである。このなまなましい罵語が出現している以上、讀者に、とりわけ中國の讀者に、この箇所から文革を想起することを禁じることとはとうていできないであろう。この箇所の論調が、將來、どのように展開するかはわからないが、毛澤東の「七分の成果、三分の誤り」を主たる方針としつつ、そして、個別的な問題に限定しつつも、かなり深刻な指摘があらわれるものとおもわれる。すでに、われわれは、その一例をみたのである。右の引用は、さらににつづけて、つぎのように指摘している。

《要するに、かれらは、綱領をもち、路線をもち、組織をもつ反革命的なブルジョア階級の組の派閥體系を形成していた。かれらは八億人民のなかにあつて、きわめて孤立したひとにぎりにすぎないとはいへ、能力は大きく、過小評價すべきではない。その流した毒の廣いこと、禍いの烈しいこと、影響の深いことはわが黨の歴史上、まれにみるものである。》⁽²⁾

この引用の箇所も、「Ⅳ」、「Ⅴ」期を區別せず、誤りとする否定的事實についての具體的な指摘はなく、むしろ、「四人組」の誤りがもたらした影響とそれにたいする評價がのべられているだけである。しかし、この評價は中國の讀者の直接の體驗に
てらして、これが適當か否かの判斷をうけるものであり、したがって、もつとも直接的な事實ということにもなる。そうだと
すれば、文革は、なるほど「七分の成果」をもっているかもしれないとしても、ある視角（たとえばこの論文が指摘する、そ
の派閥に結集した人間にたいする評價のような）からすれば、その視角からするかぎり、評價としては、成果は一分もないと
なろう。文革は旗ではあるが、襤褸の旗である、ということである。旗とはもともとそのようなものであつて、襤褸の旗にこ
そ自負・自尊の志が誇示されるとしても、文革のさい抬頭した「四人組」が、「Ⅳ」期にひきつづいて、「Ⅴ」期に發動した
もろもろのうごきや運動、とりわけ「反潮流」のうごき、「批林批孔」運動、「儒法鬭爭に學べ」運動は、つまりは、文革の
悪い冗談でしかなかったということになる。それはそうならざるをえないのである。「Ⅴ」期は、「毛澤東時代」にとつては
蛇足でしかなかったが、しかしこの時期があることによって、ひとつの時代として措定されるにふさわしく終つたのである。

第二章 〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗爭・女皇の夢の論理

一 〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗爭

a この期における左右へのゆれ

それでは、「毛澤東時代」の「Ⅴ」期、すなわち「〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗爭」期は、どのような展開をみせたのであ
らうか。

「Ⅴ」期に屬する六年間は、これをはじめの二年半とつぎの三年半とに分け、はじめの二年半は右へゆれたが、つぎの三年

半は左へゆれたと概括することができる。すなわち、一九七一一七三年前半は、〈脱文革派〉が優勢を占めたが、七三年後半以降、〈文革派〉がまきかえしたとみるのである。ただし、つけくわえるなら、七五年後半には、ふたたび〈脱文革派〉の抬頭があつて右へゆれ、まもなく〈文革派〉による左へのゆれがとつかわり、七六年十月まで繼續したという状況がある。

以上のような左右へのゆれは、大きな政治的事件と關連している。七一年前半にはじまる右へのゆれは、七〇年八九月の陳伯達除名と七二年九月の林彪「墜死」事件が背後にあり、七三年後半にはじまる左へのゆれは、七三年八月の中國共產黨の第十回全國代表會議（十全大會）をきつかけとしており、七五年一月の第四期全國人民代表大會（四期人代大會）の開催、とくに四期人代大會以後、鄧小平が國政を握ったことは、右へのゆれと、それに反撥する左へのゆれとを發生させている。

だが、その鄧小平の抬頭にしても、このとき突然として起つたことがらではなく、七〇年後半にはじまり、七三年前半までつづいた右へのゆれのおかげで軌道が敷設され、その軌道のうえを走ってきたのが、鄧小平であつたにすぎないのである。すなわち、七一年からはじまる周恩來による諸施策、とりわけ、失脚幹部を復活させる措置が、この「V」期の左右へのゆれのそもそもの發端であつたのである。

このような、右へのゆれ、左へのゆれの區切りを念頭において、「V」期を眺めてみよう。すでにのべたように、それはまず、七一年〜七三年前半の、右ゆれの状況からはじまる。そして、それは七〇年の状況の繼續という一面もあつたのである。七〇年八九月、中國共產黨九期二中全會において、陳伯達が除名になるが、これは、文革からの轉換となるものであり、陳伯達が失脚したことは、林彪に微妙な影響をあたえた。しかし、陳伯達の除名は、中國においても一般民衆には公表されず、ただ、「先驗論」批判、「天才論」批判として展開されるが、（これはやがて擴大して、觀念論的な「唯生產論」、「唯意志論」、ブルジョア的な「ヒューマニズム論」、「階級闘争消滅論」、「路線闘争消滅論」に反對する運動として展開される）一般的には、劉少奇修正主義批判の繼續、深化、「闘、批、改」「闘争し、批判し、改革する」運動の繼續、深化として展開されていた。一九七二年二月、雜誌『紅旗』が巻頭に、「短評」として、「眞剣に讀書し、努力して世界觀を改造せよ」を掲載したが、ここ

では、「王明、劉少奇のたぐいのニセ・マルクス主義政治ベテン師」という表現が使われていた。これが陳伯達をさすことは、『紅旗』三期に、「路線闘争は休戦してはならない——王明、劉少奇、周揚一味が「國防文學」を鼓吹した反動性を評す」（署名は北京大学聞軍）がでたことであきらかになった。一九三六年、上海の文壇を沸騰させた「國防文學」論争のなかで、陳伯達が、「文藝界の二つのスローガンの戦争は休戦すべきである」という論文を發表したことはよく知られており（したがって、文革中に、周揚、および周揚のスローガンを支持した人間が批判されながら、ひとり陳伯達のみ不問に付されているのは、心あるひとびとが疑問としてきたことであつた）、この『紅旗』論文の「休戦」の二字こそ、陳伯達批判がはじまったことを天下に告げる信號であつた。ついで、各省・市黨委員會の著作小組が、毛澤東の著作の學習論文を『紅旗』誌上に連續して發表した。そのなかの一篇が、「王明、劉少奇のたぐいのニセ・マルクス主義者は、〔中略〕つねにマルクス主義の顔つきをして、勞働者・農民幹部と天真爛漫な青年をあざむき、おどした⁽²⁶⁾」とのべるに及んで、文革そのもの、紅衛兵そのものにたいする批判、再検討がすすんでいることがあきらかになった。

七一年一月からは、整風運動のよびかけもおこなわれていたが、六月ごろから、「批修〔修正主義批判〕整風運動」がとねえられ、社會運動のもつとも主要な部分となつた。これは、中國共產黨内部では、「批陳〔陳伯達批判〕整風」と呼ばれていた。そして、九月には、林彪の「墜死」事件が発生した（九月十二日にとびたつたかれが搭乗していたといわれる飛行機が、十三日の早朝二時半、モンゴルで墜落大破した。「九・一二」事件と呼ぶばあいもある⁽²⁷⁾）が、この事件もまた、七二年七月、毛澤東が外國人の賓客に語るといふ形式で公表されるまで、外國にたいしては公表されず、國內でも、表面上は「批修整風」の繼續、強化がうたわれるにすぎない状況であつた。しかし、内容をよく検討すると、あきらかに、林彪を批判した論文も發表されている。たとえば、七一年十月に劉少奇批判と銘うちながら、觀念論批判をおこない、それによって、林彪を批判した論文が、はやくもでてくる⁽²⁸⁾。

七一年は國內のそうした事件が伏せられた反面、外交上のはなばなしい新展開がめだつた。七一年四月にはじまる、いわゆ

る「ピンポン」外交は、世界の關心をあつめ、七三年二月、ニクソン、アメリカ大統領が北京を訪問して、毛澤東と會見し、それが衛星中繼のテレビで放映された。日本との國交回復が九月に實現したことも、この一連のうごきにつながる。中國國內では、文藝面では、文革中の革命模範劇以外の新しい作品が生まれ、しかも、革命模範劇が發表されることに江青の指導が讚美された文革中のしきたりを破って、江青にはふれない評論も生まれた。⁽²⁹⁾この右よりの空氣は七三年にもつづき、四月、鄧小平が副首相の資格で復活するにおよんで、最高潮にたつした。鄧小平は文革で失脚してிரらい、六年ぶりに公職につき、公的な場に姿をあらわしたのである。

だが、一九七三年後半からは、左へのゆれが生じ、中國は上述の二年間と反對の方向へむかう。そのきっかけは、すでにのべた、八月の中共十大大會である。

十大大會では、周恩來が「政治報告」、王洪文が「規約改正報告」をおこなったが、周恩來報告は、中國共產黨として、林彪反黨集團（林彪、陳伯達ら）が存在したことをはじめて公式にみとめるものであった。「批修整風」は「批林整風」となり、林彪や陳伯達にたいする名ざしの批判が、このときからはじまる。

だが、この名ざしの、林彪批判、陳伯達批判は、じつは、名を伏せた周恩來批判として展開するのである。王洪文がこの大會で「規約改正報告」をおこない、かつ、無名の青年から一躍して中央委員會副主席（筆頭の周恩來につぐ二位）になったことは、〈文革派〉を勇氣づけるものであったにちがいない。文革で抬頭した張春橋は、中央政治局員から中央政治局常務委員に昇進した。あるいは、十大大會を期に、左への轉回が毛澤東によって、指示されたのかもしれない。すでにのべたように、それまでの「批修整風」が「批林整風」と呼ばれるだけでなく、「上部構造領域の革命を重視せよ」と叫ばれるようになった。十大大會の周・王報告は、ともに、「上部構造の階級闘争」にふれている。これが、「孔子批判」ひきおこし、さらに「批林批孔」運動となって、つづく三年半の左へのゆれの發端となったのである。また、王洪文報告には、周恩來報告がふれていない、「反潮流」のうごきを奨勵する言辭があった（王洪文の權威をたかめるため、毛澤東が王洪文にのみ指示したと考えられ

る。十全大會の直前、大學を受験した張鐵生という下放知識青年が答案を白紙で提出し、かつ、入試制度にたいする批判をも書き記した行爲が、この十全大會の王洪文報告に照らして賞讃されたのは、九月のことである。白紙答案事件は、たちまち「反潮流」のモデルとなり、「反潮流」はいっそう推進され、青少年層の社會的氣風ともなった。同年末には、小學生による教師批判がとりあげられている。いっぽう、「批林批孔」運動においては、秦の始皇帝が肯定され、その焚書坑儒などが法家路線としてもちあげられ、それが儒家路線と對立するものであることが指摘された。中國史における「復辟と反復辟」、「復古と反復古」、「尊孔と反孔」などの對立も指摘された。あたかも、ダムの堤防が決壊したかのような勢いで、孔子（孔丘、孔老二と呼んだ）を論じることが、たちまち尊儒反法を論ずることに擴大し、孔子に殺されたという少正卯が讃美されるなど、いまにも「第二文革」が開始されるのではないかとおもわせるものがあつた。こうした批判運動を牽引する役割りを擔つて、九月にははやくも上海で、雑誌『學習と批判』が創刊されていた。

こうした左へのゆれは、一九七四年にはいるといっそうにぎにぎしくなつて、中學生が答案を共同で作成したのが推奨されたかとおもうと、「裏口入學」批判、ベートーベン批判、「絶對音楽」批判、アントニオーニ批判などがたてつづけにでた。これらはいずれも、約二年間にわたつて實施された、脱文革的な諸措置にたいして、〈文革派〉が反撃にでたものである。とりわけ、文革によって失脚した高級幹部が復活したのに、〈文革派〉はがまんがならなかった。二月には、『人民日報』社説が、「批林批孔」運動の論點をしぼつて「克己復禮」に^ま的を定めるようよびかけ、ここに運動は本格化し、一段と激しさをくわえた。これは、林彪が「克己復禮」の四文字を誰かに揮毫してもらい、これをつねに枕頭にかかっていたからであるといわれたが、眞のねらいは、失脚幹部が復活する傾向を批判するところにあつた。そして、「批林批孔」運動を聲援するかのよう^にに、晋劇『三たび桃峰に上る』批判、湘劇『園丁の歌』批判がおこなわれた。「批林批孔」運動のなかでは、柳下跖（盜跖）が口をきわめて賞讃され、孔丘が猛烈に罵倒された。北京大學・清華大學大批判組という署名の論文、「孔丘そのひと」^③は後者の一例であるが、これはあきらかに周恩來を攻撃するものであつた。「批林批孔」運動のなかで、孔丘や孟軻、そして儒家

が批判されるのとは逆に、法家の著作を研究せよ、「儒法闘争に學べ」、と強調された。法家の代表的人物が紹介された。これらは、〈文革派〉、およびその系統に屬する人間の權威をたかめる意圖をもつてなされたものである。また、「マルクス主義の理論隊列」が強化されることもよびかけられたが、全體としての主流は、法家に屬する諸人物や諸著作の論評にあって、法家の著作の現代語譯が新聞雜誌に掲載されたばかりでなく、小冊子や單行本としてもさかんに出版された。『老子』や『孫子』の新資料が出土すると、それらも法家にひきつけて論じられたのである。儒教批判としては兒童用の教科書『三字經』、『女兒經』などがとりあげられた。すなわち、一九七三年の後半から一九七四年全年にわたって、ぜんたいの傾向は左にゆれ、「批林批孔」運動が、いくつかの小運動をともなうて強力に推進されるとともに、「批林批孔」運動としては、孔子・儒家を否定し批判することから、法家を肯定し、賞讃する「儒法闘争」研究へと重點を移したといえる。とくに一九七四年の後半、呂后、武則天がもちあげられるようになったことは注目に値する。一九七四年のこうした傾向は次の年にも繼續する。

一九七五年は、すでにのべたように、全體の基調としては前年の方向をうけつぐものであるが、しかし反面、後半には右にゆれた數カ月があつたところにもみられるように、〈文革派〉と〈脱文革派〉の抗争が複雑にいまじつた年であり、〈文革派〉が危機感をもつた年であつた。

一月、中國共產黨十期二中全會がひらかれ、（ここで、鄧小平が中央委員會副主席、中央政治局常務委員會委員に選出された）ついで、第四期全國人民代表大會がひらかれた。この人民代表大會で周恩來が「政府活動報告」をおこない、張春橋が「憲法改正についての報告」をおこなった。周恩來は、その報告のなかで、（一）一九八〇年までに、獨立した、比較的に整つた工業體系と國民經濟體系をうちたてること（二）今世紀内に農業、工業、國防、科學技術の現代化を全面的に實現すること（いわゆる「四つの現代化」）を提案した。新しい改正「憲法」は、毛澤東に制度上においても絶大な權力があることを保證したが、施政方針としては、毛澤東の革命理念にもとづいて文革を反覆することをうたわなかつたのである。すでに復活していた鄧小平は、四期人代大會第一回會議において副總理（しかもその筆頭）に任命された。すなわち、右へゆれたのである。

〈文革派〉は翌月、「プロレタリア獨裁理論」學習運動を開始し、さらにその翌月、「ブルジョアの權利」について批判、および制限の運動を展開した。しかし、鄧小平は、周恩來に代って第一線にたって活躍した。七、八、九の三ヵ月は、「右翼まきかえし風」〔原文「右傾翻案風」がもつとも猛烈にふきまくった、と〈文革派〉は指摘する。すなわち、一月の人民代表大會をうけて、八、九月は、右よりであったといえる。しかしながら、この右よりはほとんど立案段階にとどまり、すべてが右にゆれて實施されたとはいいいがたい。七月には、暗々のうちに鄧小平を狙って『水滸傳』批判、『水滸傳』宋江の投降主義批判〕の運動が展開された。この『水滸傳』批判運動は、「批林批孔」運動の大きな波を追うようにして、白い波がしらをたてておしよせた、新しい、大きな運動の波であった。教育革命についての「大辯論」が各大學、とりわけ清華大學、北京大學でさかんとなった。「新しく生まれた社會主義的事物」を支持せよ、という主張もあらわれ、「文革」を讚美した文章もでた。七五年は、ぜんたいの調子としては、左へのゆれがめだったが、仔細にみれば、右へゆれ（一月）、左へゆれ（二、七月）、右へゆれ（八、九月）、そして左へゆれた（十月）といえる。

一九七六年は、新年早々、周恩來が死去し、民衆の哀悼は暗黙のうちに〈文革派〉を批判していたが、〈文革派〉はこれを壓殺するかのごとく、さらにいっそう左へゆれた。周恩來の死から一週間たつと、『人民日報』などは、北京大學、清華大學の教育改革についての「大辯論」の報道に紙面をさき、「右翼まきかえし風」批判、「四つの現代化」批判、「三項の指示を綱とせよ」批判が展開し、北京大學などの大字報を外國人記者に見學させることもおこなわれた。その間に、華國鋒が總理代行になった。やがて、名ざしの「鄧小平批判」運動が大々的におこなわれた。清明節の日、「天安門事件」が発生し、この直後、鄧小平は一切の職をうばわれた（黨籍は残った）。毛澤東の指名によって、華國鋒が、黨第一副主席兼總理に任命された。「批林批孔」運動、『水滸傳』批判運動、「四つの現代化」批判、鄧小平批判がつづいたが、なかには華國鋒にねらいをつけた論文もあった。そして、九月に毛澤東が死去し、十月に「四人組」が逮捕され、いわば華國鋒體制がはじまった。一九七六年は右ゆれの側面もあり、左ゆれの側面もあったが、十月までは、とにかくにも左へゆれた年であった、ということができよ

b 「批林批孔」を方向づけた二論文

このように概観すると、中國大陸において、あたかも四季がうつりかわるようにつぎつぎに社會的運動が発生し、消滅していったかのである。しかし、「批林批孔」運動でいえば、そのまえに先行する布石として、「孔子批判」運動があり（そして實際の政治的事件として林彪の失脚があり）、さらにそれに先行するうごきとして、春秋戰國時代にたいする社會發展史における位置づけがあった。すなわち、孔子を批判するためには（二十世紀七〇年代の中國の批判者としては）、かれを反動的階級の出身者として規定しなければならないが、ひとつの階級が進歩的であるか、反動的であるかをきめるためには、その階級が直面する時代が、いかなる時代であるかをみなければならないのである。したがって、孔子が生きた時代を、奴隸制社會から封建制社會への轉換期と規定し、孔子を没落奴隸主貴族のイデオログと位置づけることによって、はじめて孔子にたいする批判は、明快なものとなる。このような時代規定をおこなったのが郭沫若であり、その時代規定を援用して、思想上に孔子を位置づけたのが楊榮國であった。

郭沫若の論文、「中國古代史の時期區分問題」⁽³³⁾は、奴隸制から封建制への發展を、西周と東周の交、紀元前七七〇年ごろにおいた第一説、秦と漢の際、紀元前二〇六年ごろにおいた第二説を回顧しつつ自己批判し、新たに第三説として、「奴隸制の下限を春秋と戰國の交、すなわち紀元前四七五年において區切る」ことを提出したものであった。そして、楊榮國の論文、「春秋戰國の時期における思想領域内における二つの路線の鬭爭——儒法論爭から春秋戰國時期の社會變革をみる」⁽³⁴⁾は、急激な變革期としての春秋戰國時代、奴隸が解放をもとめ、新興勢力が抬頭し、奴隸主階級を攻撃したが、そのような鬭爭がイデオロギー領域に反映したのが、儒法兩家の鬭爭である、と指摘したものであった。没落奴隸主階級の思想的代表は、儒家の孔丘と思孟（子思、孟子）學派であり、新興地主階級の思想的代表は法家の商鞅、韓非らであり、また、荀子は儒家ではあるが、そ

の哲學や政治思想からすれば、基本的には新興勢力の思想的代表である、というのである。

楊榮國は、さらに、儒と法の春秋戰國時代における鬭争の實際狀況をのべて、孔子、孟子、子思を批判し、商鞅、荀子、韓非を賞讃し、李斯が法家の精神にもとづき始皇をたすけて中國を統一したこと、始皇の若干の措置と中國統一は、法家の道を前進したものであったことに説きおよんでいる。

郭沫若と楊榮國の論文は、これからあとの數年間、中國を席捲した、「批林批孔」運動、「儒法鬭争に學ぶ」運動の大きな論理を提起したものであった。その論理とは、(1) 奴隸制から封建制への轉換は、春秋時代と戰國時代の交りまじわりにある(2) この變革期が思想領域に反映したものが、儒家と法家の鬭争である、というものである。(1)と(2)のあいだに、(3) 没落する奴隸階級の思想的代表は儒家であり、抬頭する封建地主階級の思想的代表は法家である、という中間項の論理がおかれているが、いちおう以上の(1)と(2)を、そのごの二大運動の柱とみることができる。このように要約して、あらためておどろかれるのは、以上の二つの論文が、わたしのいう「V」期の、右にゆれた時期、一九七二年の七月と十二月にそれぞれ發表されていることである。一見したところ平穩無事な時期に、はやくも、つぎの嵐を呼ぶこのような論文が準備され、發表されていたのである。

右ゆれの時期に、左にゆれる時期のための論文が二篇も發表されたということは、偶然であろうか。もしこれを偶然とみることができないとすれば、この二篇は、いずれもしかるべき指示のもとに執筆されたものでなければならぬが、しかし、郭沫若や楊榮國は、それぞれの論文にみられる着想をはやくから抱いており、かつ發表している。郭沫若は、一九五二年出版の『奴隸制度時代』のなかで、時代區分の第三説を發表しており、楊榮國は、かれが主編となった、一九六二年出版の『簡明中國思想史』⁽³⁵⁾において、春秋戰國時代は、奴隸制舊貴族が没落し、封建新興地主勢力が抬頭した時代であり、孔子は基本的に前者の利益を代表した、そして後者の利益を代表したのは法家であって、儒家と法家のあいだには「禮」と「法」の鬭争があった、とのべている。⁽³⁶⁾したがって、運動の要請にこたえて、にわかにこしらえた理論ではない。

しかしながら、いずれも、すでにのべたように、「批林批孔」運動、「儒法鬭争に學べ」運動の大きな論理的な柱となる見解である。當然、それぞれの學者が、まず基本的な論文を發表し、これにたいする反應をみるとともに、やがて社會的な運動として展開されるさい、これを學習して、さらに多量の論文を執筆することを奨励しようという意圖が、中國の上層指導部（それは「四人組」ということになるが）にあって、この二編が發表されたものとみななければならない。

郭沫若のばあいには、その時代區分が毛澤東と矛盾するものでないことを、かれ個人としても辯明しておく必要があったものと想像される。

毛澤東は、「新民主主義論」においてつぎのように説いている。

《周秦よりこのかた、中國はひとつの封建社會であつて、その政治は封建的政治であり、その經濟は封建的經濟である。そして、この政治と經濟が反映した、支配的地位を占める文化が封建的文化である。》（『新民主主義論』一九四〇年一月）
同様の趣旨の文章は、一九三九年冬、延安でつくられた教科書、『中國革命と中國共產黨』の第一章にもみえる。

《中國は偉大な民族國家であり、地廣く人衆く、歴史悠久にして、かつ革命的傳統と優秀な遺産に富む國家である。しかし、中國は奴隸制度を離脱して封建制度に進んでから、その經濟、政治、文化の發展は長期にわたつて、發展が遅れ緩慢であるという状態におちいつていた。この封建制度は、周秦よりこのかた、ずっと三千年前後つづいたのである。》（『中國革命と中國共產黨』第一章 中國社會、第二節 古代の封建社會）。

だが、これは『毛澤東選集』の編者の解題がいうように、毛澤東、單獨の執筆でなく數人で協力して作成したものであり、とくに第一章は毛澤東が書きおろしたものではないから、郭沫若は、「新民主主義論」の「周秦」をとりあげた。

この「周秦」という表現から、紀元前十一世紀から紀元前三世紀にわたる全期間を想定し、したがって、中國は紀元前十一世紀から封建制社會であつたとうける學者や一般讀者があらわれると、ことは面倒になる。そこで郭沫若は、その論文の末尾で、とくに右の毛澤東のことを引用して、つぎのようにのべたのである。

《この「周漢」という用語は、周秦の際をさしている。あたかもわれわれが戰國時代に争鳴した百家を「周秦の諸子」というようなものである。「周秦」の二字は分けて論じてはならない。〔分けて論じると「周」と「秦」で、西周のはじまりから含むことになる——引用者〕「周秦よりこのかた、中國はひとつの封建社會であつた」とは、いいかえれば、こうである。中國の古代奴隸社會と封建社會の交替は、春秋と戰國の交にある。》

これはこの文章に即しては強辯のようであるが、しかし毛澤東は、べつの箇所、『中國革命と中國共產黨』のなかでは、《もし、秦以前のひとつの時代が諸侯が割據して雄を稱した封建國家であるとすれば、秦の始皇が中國を統一してからあとは、專制主義的、中央集權的、封建國家が樹立されたのである。》

といつており、「諸國が割據して雄を稱した封建國家」といういいかたで、戰國時代に封建制にはいつていたことをみとめているのである。したがって、郭沫若が『中國革命と中國共產黨』をはじめから引用していれば、わざわざ苦しい解説をつける必要がなかつた。⁽²⁷⁾郭沫若は、まえにのべたように、『毛澤東選集』に收録されていても、毛澤東の文章でないと斷つてあるものを、とりあげるわけにはいかなかったのであらう。そしてそれは、《文革派》が感じていた困難でもあつたらう。

郭沫若は、要するに『奴隸制時代』の新版を出版するにあたって、右のような論文を新版の序文として書いただけかもしれない。そしてそれが『紅旗』に掲載されたあと、楊榮國によつて、その論理のうえにさらに《文革派》の運動發動上に適切な論理が提起、附加されたのかもしれない。いずれにもせよ、『紅旗』の編集は「四人組」のひとり姚文元の手中にあつた。これがこの二論文は「批林批孔」運動の前途を、論理的にきりひらくものと考えて掲載したことは疑いない。

c 《文革派》・《脱文革派》

この「V」期は、これを以上のように概括し、かつその論理を準備した論文を指摘したとしても、それだけでは、この期の概観として十分でない。この期の名稱、《文革派》對《脱文革派》という、その《文革派》、《脱文革派》とはなにか、それぞ

れをみなければならぬのである。

わたしが「文革派」というとき、それは單に、一重の層、あるいは單一の個體として存在するのではないのである。すなわち、思想的、世代的に文革を支持し、文革を信じて社會活動をおこなった、そして、なかにはそのために、人民公社の生産隊などで責任者にも拔擢された廣い層と、その廣い層のうえに君臨してごく限られた人的結合をもち、言論機關を握って、文革型の社會運動を發動しようと畫策、活動した少數の上層權力集團とである。後者こそ、「四人組」、王洪文、張春橋、江青、姚文元であった。かれらは、對立者とたたかって權力を奪取した、というよりは、毛澤東（毛澤東はたしかに權力をその對立者から奪った）の委託や任命をうけて、言論機關を握り、紅衛兵、民兵という實力裝置を握って、權勢をふるったのである。權力の枠組みとしては、皇帝型權力に寄生する宦官型權力であった、といえよう。宦官型權力は、皇帝型權力にとっては、ときに自己をおびやかしかねない宰相型權力よりも、はるかに使いやすく、したがって愛すべきものであって、それが集團や派閥をつくっても、ほんらいそのような存在を許容しない皇帝型權力からは黙認されるという特權をもっていたが、宦官型權力の實質的な内容はなにも存在せず、その枠組みの内側を埋めるのは皇帝の權威にほかならなかった。皇帝からすれば、ときに不満であり、そしてその權力が濫用されることは不愉快でもあったろう。そして、皇帝が死去すればまったく無力となる。

この「四人組」の下部には、「四人組」と人的結合をもつ派閥があった。たとえば、白紙答案事件の張鐵生のように、「四人組」のオルグとして各地をかけまわり、演説してまわった人間、あるいは、「梁效」、「羅思鼎」のペンネームをもつ執筆者集團を統括したり、執筆者集團のなかでも、「四人組」の意を體して執筆した人間がこれに屬する。いわゆる「死黨」である。忠誠を誓うとともに權勢の分與にあずかり、その集團や職場で權威をふりかざしているの、「四人組」がいったん逮捕されるとかれらも罪に問われる。これも、現實的、肉眼的には、「四人組」のなかまであり、「文革派」であるが、しかし、社會的な運動をかれらが發動する能力も權限もないのである。この區別はけつきよくかれらが「走狗」でしかないことを示している。さらに、その下部に、より廣い範圍で存在するのが思想的、體制的、また世代的「文革派」である。農村に下放し、

毛澤東のおしえ（とくに、文革的な色彩の強いおしえ）を實行して、生産隊の責任者になったり、解放軍の政治委員になったりした青年層、また下放したあと推薦されて入學した大學でも、もっぱら大字報を貼ったり、走資派の教授摘發に熱心だったような學生がこれに屬しよう。すなわち廣義の〈文革派〉である。わたしが〈文革派〉對〈脱文革派〉の抗争、というときの〈文革派〉は、主として、狹義の、「四人組」にしばつての〈文革派〉をさしているが、狹義の〈文革派〉と人的結合をもつ派閥的人間や、廣義の〈文革派〉としての思想的、體制的、世代的な存在を無視しているわけではない。

これにたいする〈脱文革派〉は、〈穩健派〉、〈實務派〉といっても同じことであるが、これは〈文革派〉のように、明確な派閥や集團を形成しているわけではない。現在の中國において、派閥や集團を形成し、それが摘發されるなら、反革命分子、反革命集團として斷罪されることは眼にみえているからである。（「四人組」は派閥や集團を形成していたが、それはすでにのべたように、宦官型權力として特權をもっていたからである。）にもかかわらず、〈脱文革派〉が存在したことは、〈文革派〉がそれにたいして、しきりにレッテル、「走資派」を貼ったことによって、あきらかであろう。このばあい、「走資派」の「派」は、「頑固派」、「反動派」というときと同様、ひとつの類型をなしているという程度の意味しかない。「走資派」というレッテルを貼られたとしても、それは〈文革派〉が貼ったレッテルであるから、レッテルを貼られた人間がはたして資本主義の道をあゆむ一派であるか否かは、また別の問題であつて、まったく恣意的にレッテルが貼られているばあいが多いのである。しかし、レッテルが貼られたという事實は否定できないから、その事實から推測すれば、〈文革派〉をいらだたせ、怒らせ、反撥させるなにかが、少なくともそこに存在したであろうこともまた、否定できない。そのなにかは、わたしは、ひとつの傾向という程度で存在したと考へ、それを〈脱文革〉的傾向と呼び、しかし、その傾向を推進するひとつが存在したはずであるから、そのひとつとを〈脱文革派〉と呼ぶのである。

〈脱文革〉的傾向は、もっぱら〈文革派〉が攻撃することによって浮き彫りにされてきたが、内容としては、〈反・文革〉というものであるにすぎず、積極的なもの、明確なものとしてはとらえにくい。

それで、わたしは〈文革派〉と消極的に對立させて、〈脱文革派〉と名づけるのである。しかしいちおう兩者をきわだたせてその輪廓を描くとすれば、〈文革派〉はもっぱら毛澤東の革命概念に忠實であつて（それがかれらの權力の來源でもある）、文革型の社會運動をくりかえし發動しようとするのにたいし、〈脱文革派〉は文革型の社會運動に効果をみとめず、生産と生産のための規律を遵守することによって國內建設、民衆の生活向上はかろうとするものである。一九七五年、四期人代大會で周恩來が示した、現代化された中國の建設こそは、〈脱文革派〉の主張を代辯するものであつた。そして、代辯したのが國務院總理であるところからわかるように、〈脱文革派〉のこのような主張は、じつは、國務院各部が、國家機構として當然擔うべき業務にほかならない。したがつて、〈脱文革派〉は、人脈としては、國務院官僚、およびその業務に參畫する學者、技術者ということになるが、かれらは、そのおかれてゐる職域からして、とりたてて派閥を形成せずとも、日常の立案や業務を遂行することによって、その主張を主張し、實現できるのである。したがつて、〈脱文革派〉の頂點には、國務院總理としての周恩來が存在した、ということになる。そしてこれにも、廣義の〈脱文革派〉、すなわち民衆のなかの文革離れの部分、をみとめることができる。

〈脱文革派〉なるものの主張や行動は、日常的な行政や生産のなかに埋没させることができるのであるから、ここをとりだして、〈脱文革派〉なる派閥は存在しないと主張することも可能である。そこに存在するのは、一般的な官僚、一般的な學者や民衆であつて、そのうえを、ひろびろとした綠地のうえを暴れまわる狂犬のように、“四人組”が暴れまわり、氣にいらぬ人間、自分の地位や人氣をおびやかす人間にかつてきまゝなレッテルを貼つてまわつた、とみるみかたである。“四人組”はもともと〈文革派〉でもなかった、というみかたが、そこからでくる。わたしは、そのようなみかたを全面的に否定するものではないが、しかしすでにのべたように、〈脱文革派〉にも主張があつた。周恩來のまえにふれた「報告」が、文革をくりかえすことを提起してゐないのは、提起しないことによる主張であり、〈文革派〉にたいする批判、抗議でさえあるとおもう。結社を組織せず、派閥らしい派閥を形成せずとも、それを嫌惡し、監視し、彈壓しようとする敵對的な派閥（〈文

革派」が存在する状況のなかでは、敵對的な派閥（「文革派」）から、その傾向それ自體が、ひとつの「派」として名づけられる意味をもたざるをえない。そして、その傾向のなかには、めだたないが、いくつかの人的結合が存在して、そのような傾向全體を支えているはずである。

このような、「文革派」對「脫文革派」のとらえかたにたいして、なお異論がでるのは、「文革派」四人組を逮捕したのが、「脫文革派」というよりは「文革派」にみえる華國鋒であつたということであろう。しかし、わたしの分類では、華國鋒は文革のなかから昇進してきたということからすれば、一見「文革派」のようであるが、「四人組」と人的結合はなく、また「四人組」によって拔擢されたわけではないから、狹義の「文革派」ではなく、廣義の「文革派」ということになる。その廣義の「文革派」と華國鋒が、狹義の「文革派」「四人組」と正面きつて對決し、これを逮捕したのは、同じ派閥のなかにも對立や矛盾があつたのであろう。また「脫文革派」の有形無形の主張が、華國鋒に決斷を迫つたということでもあろう。一九七五年九月十月、第一回農業は大寨に學べ全國會議における華國鋒の報告は、すでに「文革派」「四人組」から距離をおいていたといえる。毛澤東の死後、「四人組」はかれと對決しようとしたから、狀況としてかれにはもはや決斷することだけしか残されていなかった。そしてかれは、毛澤東から、第一副主席という、黨規約にない地位をわざわざ指定されてもいたのである。一九七六年九月十月における權力闘争とその結末は「文革派」對「脫文革派」の抗争という圖式からいえば、「脫文革派」の影響下の「文革派」の分化、そして分化した「文革派」（かりに「文革派・右派」といってもよい）と「脫文革派」の連合、という圖式としてとらえることができる。しかしながら、ここで斷っておかなければならないのは、そのような分離結合は、あくまでも上層指導部の範圍の事件であつて、もちろん、それは大慶油田なら大慶油田という民衆レベルの生産現場に波及するとしても、また逆に民衆の聲なき聲が無言の壓力となつてそれに影響したのだとしても、民衆のデモとか投票によつて、惹起されたのではない、ということである。むしろ一面では、民衆レベルでの暴動を豫防する政變でもあつた、といえる。したがつて、「文革派」對「脫文革派」の抗争という圖式は、それぞれの「派」の裾野まで視野にいれるとすれば、「四人組」が逮捕

されたあともなお有効とすべき根拠があるといわなければならないが、純粹「文革派」ともいうべき「四人組」の消滅によって、「四人組」が敵視した傾向としての「脱文革派」としては、對立面を失ったわけである。したがって、兩者のあいだの「派」對「派」の尖锐な對立はみられなくなっているというのが現状である。しかし、この現状を過去にも適用して、「V」期における「文革派」對「脱文革派」の存在と抗争をも否認しようとしても、それは現實をみないというだけのことではない。

d 梁效と羅思鼎——「文革派」執筆集團

だが、派閥があるとしても、それだけでは文章は生まれない。執筆する人間が必要である。「批林批孔」運動の發動にあたって、「文革派」は、北京と上海に、それぞれ執筆者集團を設立したのである。

北京における執筆者集團は、北京大學と、清華大學にまたがって組織されていた。成立したのは、一九七三年であるという。この執筆者集團は、はじめは、「北京大學、清華大學大批判組」という名稱をもちいたが、また、「梁效」（「兩校」と同音）、「柏青」、「北」「清」と音を通じ、かつ、「江青」を連想させる）、「高路」（文革初期、「高炬」というペンネームが、のろしをあげる論文を發表したことがある）などのペンネームでも知られている。また、メンバーは、固定したものではなく、いれかわっていった。「北京大學、清華大學大批判組」というペンネームにもっとも權威があり、それにつぐのが「梁效」であった、という説明が、北京大學を訪問した外國人におこなわれたこともあるようであるが、最初に「大批判組」が成立し、それがつぎに「梁效」などのペンネームを使ったという中國側の報道もある⁽³⁸⁾。わたしはそうしたペンネームのそれぞれの論文の重要度から考えて、はじめ、ひとつの集團として成立し、「北京大學、清華大學大批判組」を名乗ったが、運動の展開につれて、執筆論文の重要度、緊急度や専門的な内容にしたがっていくつかの集團に分かれるようになった、そして、その集團のなかで、もっとも政治的に「四人組」に近く、その意嚮をくんで執筆した（したがって、もっとも權威をもった）のが、「梁效」の集

團だった、とおもう。

この、北京大學、清華大學にまたがる執筆者集團が存在することは、ペンネームからもわかることであるが、「四人組」が逮捕されてまもなく、外電が伝えるところによると、五臺のトラックに分乗した兵士が、途中、ドラムやシンバル（ドラ）をうち鳴らしつつ、北京大學を急襲し、建物の一つを包圍したことがあって、「このなかには急進派の宣傳を擔當する」著名な執筆者たち⁽³⁹⁾が住んでいるといわれる」という事實からも、それは裏書きされよう。さらに、それから數日して、清華大學革命委員會主任、兼教育部副部長の遲群、および、氏名はあきらかにされないが、北京大學の最高責任者が逮捕されたことが伝えられた。⁽⁴⁰⁾そこで、考えられることは、遲群が、「四人組」の黒い大將」と「四人組」逮捕のあと指摘されたような指導者となり、北京大學の氏名不詳の責任者を副指導者としても、兩大學の教授、助教授、講師、助手、學生を構成員とし、このような執筆者集團を組織したということである。そして、連絡上、執筆上の便宜のために、またそれらのひとびとを優遇するために、一つの建物に集めてしまったのかもしれない。もともと、中國の大學は、構内に教授の宿舍があたえられているものであるが、このように集中したことによって、「四人組」の祕密連絡所、黒い指示の傳達驛、かけねなしの「江青經營會社」および「偽中央辦公廳」⁽⁴¹⁾となった一面もあろう。

そして、それはたしかに、「中央辦公廳」であった。

ある報道によれば、そもそも、清華大學には男女二人の「四人組」の腹心、「黒い幹將」がいて、「四人組」のあいだに直通電話を設けてたえず連絡していた。遼寧、上海、文化部、の「四人組」腹心、さらには行動のつかめない人物が、つぎつぎと清華大學、および兩校大批判組を訪問してき、情報を交換し、「黒い材料」をだいてやってきては、「黒い材料」をかかえて去っていったという。⁽⁴²⁾

そのような來訪者や來信のために、わざわざ別個の「受付」が清華大學に設けられていたというが、自分の所屬しない職場や機關を訪ねるときは所屬する職場や機關の紹介狀が必要とされ、かつ訪問先きの「受付」を通さなくてはならない中國にお

いて、この「受付」がいかにも威壓感を周囲にあたえ、この「受付」を自己の集團ために設けることのできた人間が、同じ職場のほかの人間にたいして、いかに権力者としてはぶりをきかせたかは、同じような社會制度をもたない人間には想像もつかないほどであろうということだけは想像できる。この報道は「嚴然として別個にひとつの『中央辦公廳』を設けたのである」といっている。

この「中央辦公廳」の「中央」は、黨中央でなければならぬ。ここで、全國各地から、かれらを通して毛澤東、黨中央にあてた手紙を檢閲し、そのなかから中央や地方の指導的同志をおとし入れることのできる「黒い材料」を抜き書きして、「四人組」におくりとどけていた、という。おそらく、ここでいう全國各地からの手紙は、「批林批孔」運動に關連する手紙で、そのなかにはこの運動に反對する「反革命分子」を摘發する言辭が含まれていたであろう。ひとつの「運動」が主流を占めるとき、その「運動」に非協力的な人間、あるいは反對する人間を、「運動」の敵として、糾弾するということはありうる。糾弾せずとも、その「思想」については評定しなければならない。したがって、故意であると、故意でないをとわず、「密告」が、このような「受付」と一種の文書取扱い集團を通じて制度化されたわけである。それは、武則天をおおいに賞讃した江青はじめ「四人組」、およびその論文を作成した梁效執筆集團にとって、當然の制度であつた。武則天は密告を獎勵したからである。

《この祕密連絡點は、各地からの來信、來訪、およびそのほかの陰謀的な手段をつうじて、ひそかに大量の黒い材料をまとめあげ、中央と地方の多數の黨・政・軍の責任ある同志を誣い陥れた。そのなかには、中央政治局の若干の同志、國務院の若干の部・委員會の責任ある同志、人民解放軍の若干の總司令部・兵種・部隊の責任ある同志、および若干の省委員會・自治區委員會の第一書記・書記・副書記らが含まれていた。これらの黒い材料は、風を捕え影を捉み、罪名を捏造し、あくまでも原則にこじつけ、必らず責任ある同志の多數を打倒し、これを窮地におとし入れてのち、はじめて快しとせずにはい⁽⁴³⁾なかつた。《

この執筆者集團の人数は、ただ、「何十人」といわれているだけでわからない。おそらく、一部は、「五・七幹部學校」へ下放したり、授業を擔當したりなどして、流動的であつたろうし、ペンネームのちがう集團をそのときどきで編成するという事もあつたであらう。しかし、とにかくにも、三年間にわたつて百六十八篇の文章を執筆した、というのである。

その一部を掲載したのが、七四年二月、北京大學で創刊された『北京大學學報（社會科學版）』であるが、これに掲載された「爲すところある女政治家武則天」が、はじめは「爲すところある法家の女皇、武則天」と題されていたところにもみられるように、全國的な新聞や雑誌に掲載されるものよりは、意圖のある、尖鋭な文章が多かつたものとおもわれる。

上海では羅思鼎というペンネームの執筆者集團が組織された。その成立の経緯などは、まだあきらかにされていないが、上海で發行された雑誌、『學習と批判』は、その内容といい、創刊された時期（一九七三年九月）といい、香港で發賣されるようになったころ（一九七四年一月）には、これが〈文革派〉によって刊行されていることは疑いないものとみられた。この香港發賣の號から、雑誌は題字を變更した。それまでは毛澤東の揮毫であつた、という説があり、わたしも紹介したが、わたしは現在では江青の揮毫であつたと考えている。要するに、徹頭徹尾、〈文革派〉“四人組”の雑誌であつた。

雑誌の奥付けをみると、編集は、「上海學習と批判雑誌編集部編」とあり、下に小さく「（上海復旦大學）」と記されている。しかしながら、“四人組”が逮捕されてから暴露されたところでは、復旦大學の構内には、これの編集部は存在していなかつたということである。おそらく、北京大學、清華大學と同じように、復旦大學の教授の一部が、構成員になつていたものであらう。そして、これを指揮したのが、上海市委員會著作小組の“四人組”⁽⁴⁵⁾によつてはめこまれた二人の心腹⁽⁴⁴⁾だつたという。その「心腹」と稱されるひとり、上海市革命委員會常務委員、朱永嘉であらう。⁽⁴⁶⁾かれは七六年十月、「魯迅展」の團長として來日したことがある。一九六四年ごろから、かれは上海市委員會のなかに政策研究のための集團をもっており、それを著作小組と稱していた。ペンネームを、雷鋒が日記に記していた、一生涯ネジ釘にならう、ということばから、「螺糸釘」とした

が、やがて、音が通じる「羅思鼎」と改名したのであるという。朱永嘉は文革のさい紅衛兵に攻撃され、仕事もほとんどあたえられなかったが、七二年から張春橋、および上海市革命委員會副主任の徐景賢の庇護をうけ、徐景賢が責任を負っている「上部構造領域」の工作に従事、しだいに権限をあたえられて、上海の新聞『解放日報』、『文匯報』を掌握、『學習と批判』、『自然辯證法』の創刊も推進した。

この朱永嘉のもとにも執筆者集團がいくつかあったはずであり、『學習と批判』上のペンネームを拾うと、羅思鼎とならぶ權威があった、「翟青」、「康立」（これは羅思鼎のもうひとつのペンネームだという）、「方海」、「石侖」のほか、「石一歌」、「任贛」、「宮效聞」、「任文欽」、「紅宣」、などがみえる。前記の「魯迅展」代表團の團員のひとりには、「石一歌」（十一人の執筆集團なので、「十一箇」と音が通じるペンネーム）の構成員だ、ときいたことがある。姚文元は、この『學習と批判』編集部⁽⁴⁶⁾の指導者に、北京から電話をかけて指令していたという。

『學習と批判』編集部を中心に、いくつかの執筆集團があったとしても、うえにのべたペンネームは、ときには個人のペンネームであつたかもしれない。

『北京大學學報』、『學習と批判』だけが「四人組」の掌握する言論機關ではなく、『歷史研究』も復刊のさい、たくみに「四人組」が直接統制する性格にかえられたという。⁽⁴⁷⁾ たしかに、その主要な論文は梁效、康立の名をもって發表された。また、北京で文革のときから活躍した、「池恒」をペンネームとする集團は、北京大學、清華大學とは別のものだといふ。⁽⁴⁸⁾

しかしここで想起しておかなければならないのは、「四人組」が支配したのは、うえにのべたいくつかの雑誌にかぎらないということである。『紅旗』、『人民日報』、『光明日報』、要するに、中國の全雑誌、新聞、テレビ、ラジオが「文革派」⁽⁴⁹⁾「四人組」の支配下にあつたということである（「池恒」は『紅旗』所屬の執筆集團であろう）。したがって、執筆者集團も個人としての執筆者をふくめ、以上にかぎらないだろう、ということである。

しかし、いちおう、「批林批孔」運動、「儒法闘争に學べ」運動のなかで活躍した執筆者集團は、北京では「梁效」、上海で

は、「羅思鼎（康立）」を代表的なものとして考えることができる。

これらのペンネーム、執筆者集團は「批林批孔」運動の展開とともに有名になり、北京の「梁效」と上海の「羅思鼎」、「康立」のことを、「北梁南羅」とか、「北梁南康」とかいったことを中國旅行者の報告で聞いた。「北梁南康」は、戊戌變法のさい、北京の康有爲、上海の梁啓超のことを「北康南梁」といったことも連想しているいいかたのようであったという。

また、直接に集團的な執筆はしないが、自分の本名で論文を発表するほかに、執筆者集團の「高級顧問」として、學術的な體裁をととのえるのに協力することをした教授もいたことが指摘されている。⁽⁴⁾これらの集團に屬した學者は、こんにちでは、「御用文人」と罵られている。たしかに舞文曲筆、曲學阿世の一面はあったが、しかし、論文によっては、若干の留保を付したものが（梁效論文のなかにも）ないわけではない。しかし、「梁效」を名乗る集團は、わざわざ「北門學士」にかんする一文を草して、我田引水、中國の成語でいう、「自分の顔に金を貼る」ことをしている。あたえられた權威と待遇に満足だった人間も、なかにはいないわけではなかった。

二 女皇の夢の論理

a 〈文革派〉の實力行使

言論だけが〈文革派〉の政治的武器であつたわけではない。政治的武器としては言論だけしかありえないといった、そのような弱い立場に〈文革派〉がおかれていた、というのではけつしてないのである。

かれらは、權威と實力をもっており、それによって、國家機構の日常的な系統を無視する行爲、すなわち一種の實力行使にできることさえ、あえてやった。それが表面的にめだつようになったのは、われわれがここでとりあげている「毛澤東時代」の「〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗争」という問題からいえば、そもそもの「批林批孔」運動の開始から、すでにはじまってい

る。一九七三年九月、十全大會がおわるやいなや開催された、「批孔座談會」がそれである。

「批孔座談會」は、當時、中央政治局で「批孔問題」を討議していなかったにもかかわらず、「四人組」の意をうけた人間がこれを開催し、その人間は、あたかも黨中央の指導者であるかのごとく、「黨中央の戰略的配置である」といい、「運動」を展開し、「大戦争」をやらなければならないとのべ、さらに、裏口入學などの現象にふれたといわれる⁽⁵⁾。

座談會はたんなる座談會におわるものではなく、それは一種の命令傳達、指示傳達の場となる。現代中國の政治は、まず運動として展開される。運動に對立したり、反對すると、政治的、社會的に不利である。しかし、なにかのうごきが、はたして運動の前兆かどうかは、一般にはわからない。ひとびとは態度を慎重にし、よくよくみきわめてからでなければ、意見發表、賛否表明はしないのである。したがって、「批孔座談會」に出席した人間は、これからはじまる運動について極秘の情報を入手したわけであり、興奮もし、安心もしたのであるが、反面、この運動の推進者、宣傳者とならなければならないことも自覺したのであろう（かれらは廣義の〈文革派〉となり、こうして、〈文革派〉の基盤が形成されることになる）。

「批孔座談會」のあと、「四人組」は、工場、農村、學校などいわゆる「基層」、および、黨、政、軍の指導機關を起ちあげさせることに努めた。王洪文、江青は、手紙を書き、資料を送り、かれらの人間を派遣して活動させた。孔子批判の先頭をきった楊榮國が、全國各地を講演してまわっているときいたことがあるが、それもこの一環であったのかもしれない。それらの人間は、資料がないと訴えられると、「それは驚くべきことだ、不思議だ」と答えたというが、言外に、黨中央が正しく、熱心に指導しているにもかかわらず、一部に反對者がいて妨害しているといわんばかりの意味があつたとおもわれる。また、「問題があれば中央に報告してもらいたい、努力して解答する」などのべた。批判者によると、いかにも救世主であるかのようにふるまつた、というのである⁽⁶⁾。

「批林批孔」運動が展開されたことは、こうした實際活動をぬきにしては考えられない。その實際活動の成果のうえに、「四人組」がさらに開催したのが、一九七四年一月の二度にわたる「批林批孔動員大會」であつた。もはや小規模の座談會ではな

く、動員大會なのである。

一九七四年一月二十四日、〈文革派〉“四人組”は、北京に駐屯する各部隊を集めて、「在京軍隊單位批林批孔動員大會」を開催し、さらに翌日、黨中央や國務院の職員、勤務者を集めて、「中央直屬機關および國務院機關批林批孔動員大會」を開催したが、これは、“四人組”が毛澤東にも報告せず、政治局で討論もせず、ほしきままにそれぞれの機關に強要し開催させたものであるという。それぞれ出席者は一萬人であった。この大會に、江青、王洪文は、批林批孔の主な指導者という資格をもつてあらわれたようである。周恩來は事前の協議にあずからず、二十五日の早朝、江青名義の手紙（手紙とはいっても、國家勤務員、あるいは黨機關勤務員、もしくは直屬の勤務員が送達するものであることはいうまでもない）が届けられて、當日の午後に大會を開催し、その場で態度を表明するよう、求められたにすぎない。大會が開始されようとしたとき、江青は、得意満面、われを忘れて口走ったという。「はっはっ、周總理でさえ、わたしのおかげで處置なしといったさまだ」、と。

大會の席上、江青は、「第一線にたつて突撃し、陣を陥れ、戰鬪を指揮します」と揚言し、江青から、「少し多く發言しなさい」といわれた姚文元は、批判者のいうところでは、毛澤東の詩詞を「惡意をもって歪曲し」て引用し、指導的人間にたいして造反せよと、のべたといわれる。さらに“四人組”の二人の主要な“將”が、演説したが、いずれも氣焰萬丈、煽動的なもので、長時間にわたった。批判者によれば、「ゲッペルスのアシスト的熱狂、胡風集團の反革命的慣用語、王熙鳳ばりの潑婦が街に罵るといった態度」であった。そして、いずれも、自畫自讃、江青をほめそやし、二十五日のばあい、二人の主たる發言者は三十四回も「江青同志」の名をあげ、「批林批孔」の資料は、江青の「直接的な配慮のもと」、「具體的な指導のもと」執筆され、編集されたもので、江青は「一字一句、のこるくまなく讀み」、「讀みかたは細かく」、「革命模範劇を掌握したときのように眞剣であつた」とのべたが、江青も、その演説に三十三回も口をはさんだ。

主要な演説者は、二十四、五日とも同一人物で、それは二人であつたが、かれらは、當時、おそらく珍らしくない現象となつていた、「裏口からはいる」、すなわち下放した子女を裏から手をまわして都會の父母のもとによびかえしたり、裏口入學

させたりする高級、中級幹部の行爲にたいしても批判をむけた。⁽⁵⁵⁾ いわゆる、「三矢、いっせいに發す」といった勢いがあつた。おそらく、そうした緣故重視にからめてであろう、批判者のいうところでは、古い世代の革命家にたいして、「マルクス・レーニン主義、毛澤東思想に叛き、革命の放蕩息子となり、反對物に轉化し、化して反動派になっている」ときめつけ、「闘わざれば退き、闘わざれば崩れ、闘わざれば修正主義となる」というスローガンを提起して煽動し、ほこさを周恩来、葉劍英にむけるよう煽動した。⁽⁵⁶⁾

おそらく、大會に出席したひとびとは、いまや「文革派」が主流であり、黨上層部では江青をかしらとする「四人組」が大きな權力を掌握した、ほかの指導者（「走資派」というレッテルを貼られた指導者）は、權力から追われ、この運動の進展につれて没落するだろうという印象をうけたにちがいない。動員大會のあと、廣義の「文革派」はいっそうふるいたつたであろうし、廣義の「脱文革派」は、慎重な態度をとろうと自戒したであろう。出席した周恩来、葉劍英には、打撃ともなつたはずである。このような動員大會は、開催しえたことがひとつの政治的勝利であり、さらにつぎの政治的勝利を爭むものであつた。動員大會のあと、ふたたび、手紙や資料を送る活動を開始した江青は、ひとりで十數通の手紙を書いたが、そのほとんどが、末尾に「凌晨何時何分」と記してあつたという。また、下部からあがってくる報告の末尾に記す「批示」、意見や指示をあたえる短文（長文のばあいもある）は、軍隊を攻撃するものもとても多かつた。總參謀部については、「燒きはらえ」、總後勤部については、「みたところ火を放つべきだ」、空軍については、「冷えてきた」、海軍については、「解決しなければダメだ」とあつた。總政治部については、江青、張春橋は、そこに所屬する一部の腹心を引見、「火を放ってきれいに燒きはらえ」、とのべた。各軍區、各兵種についても同様であつた。さらに一月二十五日の大會の錄音テープを整理し、全國に配布する準備をすすめていた。⁽⁵⁷⁾

その「批示」の用語、「燒きはらえ」、「火を放つべきだ」が、文革の用語であることは、かれら「四人組」がどのような精神状態にあつたかをうかがわせるものがある。

二月十五日にいたって、毛澤東が、「形而上學猖獗す」と批判し、さらに、一月二十五日の録音テープの全國配布をとりおさえた。「四人組」の實力行使がこのあたりから阻止されるのである。そして、それは、鄧小平による右へのゆれを大きくさせることになった。

毛澤東の江青らにたいする批判も、ひきつづきくりかえされるのである。

b 呂后、武則天讚美の諸論文

1 江青の呂后、武則天賞讃

〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗争における、〈文革派〉の主張は、まえにのべた實力行使を背景に、呂后、武則天を讚美するにいたって、最高潮に達したといえることができる。

すなわち、「反潮流」で一種の信號をうちあげ、「批林批孔」で周恩來を批判して〈脫文革〉的傾向を〈文革〉的傾向に方向轉換させ、さらに「批林批孔」を發展させて、「儒法鬭争に學べ」と提唱し、法家路線、法家指導集團がいかに重要であるか、すなわち、〈文革派〉「四人組」が、毛澤東の後繼者としていかにふさわしいか、を主張したのである。ところで、その「四人組」の指導集團のなかで、つぎの皇帝型權力の繼承者はだれか、という疑問が生じよう。これにたいする回答が、呂后、武則天を讚美する暗喩による江青推戴、すなわち江青自薦のうごきということになる。

いっぽう、周恩來が病氣入院すると、それにかわって鄧小平が活躍し、「四人組」の勢力をおびやかすので、「四人組」は『水滸傳』批判、教育革命にかんする大辯論で鄧小平を批判する。しかし、周恩來が死去したあと、政權はかれらの手にわたらず、華國鋒が總理代行となった。そこで、〈文革派〉はふたたび、孔子批判、『水滸傳』批判をかりて華國鋒を批判する。まもなく天安門事件が発生、鄧小平を失脚させることはできたが、華國鋒が第一副主席兼國務院總理になったので、こんどは鄧

小平批判をかりて、華國鋒による周恩來、鄧小平路線の踏襲を牽制し、ふたたび、呂后、武則天讚美を展開したが、ついに毛澤東の死をむかえ、失脚するということになる。

現實の展開は一波また一波とつづくが、言論上の論理は〈文革派〉のそのなかでの對立者への批判から、自己の正當性、正統性、優位性の主張へと上昇している。現政權の擔當者（周恩來、鄧小平、華國鋒）を批判し、ついで、新政權の擔當者（「四人組」）を自己推薦するというのは、それなりに論理がつながっているが、その自己推薦にあたってもちだされたのが、法家讚美を前提とする、婦人の身で皇帝型權力を掌握した呂后、武則天であった。呂后、武則天の賞讃にいたって、〈文革派〉の論理はのぼりつめて頂上にたっした、といえよう。

呂后、武則天讚美の論文は、一九七四年八月～十一月に出現している。

それら數篇の論文は、「批林批孔」運動が、儒家とは對立する「法家人物」に學べ、「儒法鬭爭史」、「法家路線」に學べ、と強調することへ移行し、しだいに白熱する議論のなから出現したようにみえる。そして、たしかに、議論は白熱してくるのであるが、しかしだからといって、まったく自然に、それらの論文が出現したのではない。こんにち、暴露されているところによると、一九七四年六月十四日、江青は、「梁效」をペンネームとする執筆者集團のひとり、もしくは、ひとり以上の人間をよび、みずから任務をさずけた。「呂后はたいしたものです。漢の高祖劉邦の事業にたいし大きな役割りを演じました」、「呂后については、單獨一條、突出宣揚する必要があります⁽⁵⁸⁾」。しかしながら、それから五日たって、『人民日報』に掲載された「法家人物紹介」をみて江青は激怒したといわれる。⁽⁵⁹⁾ 北京大學・清華大學署名の、新聞一頁をついやしたその紙面に、秦始皇嬴政、李斯、漢高祖劉邦、漢文帝劉恒、景帝劉啓、賈誼、晁錯を見出しにたてながら、呂后については、漢高祖劉邦の末尾にわずかに二行の付記があるとすぎない。「劉邦の死後、呂后は權力を掌握した。彼女は「ひととなり剛毅」で、かつて「高祖を佐けて天下を定め」たが、政權を擔當してからひきつづき法家路線を推進した⁽⁶⁰⁾」⁽⁶⁰⁾と。

江青が激怒したのも無理からぬこととおもわれるのは、一日おくれて出版された、『北京大學學報（哲學社會科學版）』一九七四年第三期（『六月二十日出版』）には、呂后は單獨の項目として、ほぼ雜誌半ページを占めて紹介されているからである。彼女は、そのことを承知していたのである。大學の『學報』よりも宣傳効果のある全國紙が項目をとりつけたことは、いっそう、その立腹をおさえきれないものにしたことであろう。

江青は、つぎの紙面では、内容がたとえ重複しようとも再度呂后をとりあげるよう、それも、呂后を單獨にとりあげるよう、命令した。そこで、羅思鼎、梁效のペンネームをもつ執筆集團が、數篇の論文を執筆した⁽⁶¹⁾のである。それらの論文のなかに、もはや北京大學・清華大學大批判組署名のものがみえないのは、おそらく責任者が更迭したか、江青がこの禍々しいペンネームをみることを欲しなかったからか、であろう。北京大學・清華大學大批判組に屬した執筆者たちは、忠誠心に缺けていて任務遂行にそれほど熱心でなかったとも考えられる。すでにのべたように、六月十四日に江青がよびよせたのは、「梁效」である。大批判組は、梁效の指揮下にあり、江青と直接面會ができなかったのかもしれない。

以上のような経緯があつて、つぎの論文があらわれた。

- (一) 羅思鼎「秦漢のさいの階級闘争を論ず」
 - (二) 梁效「なすところある女政治家、武則天」
 - (三) 清華大學幼稚園勞働者理論小組「武則天にたいするいくつかの見方を語る」
 - (四) 梁效「儒法闘争の歴史的經驗を研究せよ」
 - (五) 翟青「西漢初期の政治と黃老の學を論ず」⁽⁶²⁾
- 以下、それぞれの論文が、どのような含意をもつて、なにをどのように主張したかをみることにする。

この「秦漢のさいの階級闘争を論ず」と題する論文が、呂后を賞讃することを眼目とするものであったことはいうまでもないが、呂后賞讃論文としては最初のものであるだけに、執筆者の意欲はなみなみならぬものがあつたようである。ただ呂后をとりあげるだけでなく、秦の始皇帝——陳勝——劉邦——呂后の法家路線の系譜と、趙高——孔鮒——項羽の儒家路線の系譜の對立を描いているのである。「壮大」といえるかもしれない。だが、論文のなかで、いよいよ呂后を賞讃する段になると、その骨子は、すでにまえのところで紹介、引用した、「法家人物紹介」の呂后にふれた箇所、原文わずか數十字の規定を逸脱していいのである。

それも道理であつて、この論文を執筆するにさいしては、指示があつた。署名の「羅思鼎」というペンネームが示すように、これは上海の執筆者集團によつて執筆されたものであるが、七四年の七月はじめ、「四人組」につながる上海の執筆者集團の指導的なある人物は、論文作成にあたつて、江青の口調をそのまま、執筆者たちにむかつて、つぎのような三點を書くことを要求したといわれる。

(1) 「呂后は、劉邦を理解することとつとも深く、劉邦に追隨することとつとも緊密で、劉邦と共同で生活した時間がつとも長い。劉邦が樹立した功績は呂后ときりはなすことができない」こと。(2) 「呂后は劉邦にもつともふさわしい後繼者」チニパンレン「接班人」であり、劉邦の法家路線の忠實な繼承者である」こと。(3) 「呂后は劉邦の生前の法家路線にてらしてことをはこんだ。呂后のほかに、いかなる人間であれ、劉邦が終えなかつた事業を完成したものはいない」こと。⁽⁶³⁾

この指示を傳達したとき、呂后とは江青の暗喩であることが、つけくわえて説明されたかどうかはわからないが、このような執筆者集團にくわわるほどの人間にとっては、いわずともあきらかであつたろう。かれらは、歴史人物と現實の人物の對比、暗喩については、じゅうぶん承知して論文を執筆したのにちがいない。すなわち、〈呂后——江青〉である以上、〈劉邦——毛澤東〉、〈蕭何——張春橋〉、となる。さらに、〈始皇帝——毛澤東〉、〈趙高——周恩來〉、〈項羽——周恩來〉、〈陳勝——紅衛兵あるいは王洪文〉、〈李斯——朱德、葉劍英ら〉、となる。そして、始皇帝についても、劉邦についても、その死後について、死後の後繼者につい

て、および路線について、とりあげているのである。

この論文は、このように執筆にさいしての三項目の指示に忠實であつたばかりでなく、蕭何（すなわち張春橋）の功績を賞讃することも忘れていない。張春橋は、かねて、文革を、「王朝の交替だ」「改朝換代」といつていたというが、羅思鼎論文は、文革がはじまって論文執筆時までの「八年」をしたじきに、楚と漢の争いは「八年」にわたつたとのべ、「漢朝が樹立される」と、蕭何は第一功と評された」とほめそやしている。呂后と蕭何が關中を經營して、前線に出撃した劉邦の力強いしろだてになつたとか、「大儒」趙高がもぐりこんでいて政變をやつたとか、いずれもあてこするところがあつた。論文に「劉邦、呂后は剛毅にも韓信、彭越らの叛亂を消滅し、西漢王朝の中央集權をまもつた」とあるのは、姚文元がじきじきに加筆したものであつた、という。⁽⁶⁴⁾

たしかに、この論文は、「四人組」が逮捕されるや、時間のないひととはこの一篇だけ讀めばよいと、批判者からも推薦されているほどの構成をもっている。⁽⁶⁵⁾ 江青は、この論文が發表されると同時に、うたつた。⁽⁶⁶⁾

江上 奇峰あり

江上有奇峰

鎖とぎされて煙霧のなかにあり

鎖在煙霧中

尋常は看つね不見みれどもみえず

尋常看不見

偶爾ときとして崢嶸たくけしきを露あらわす

偶爾露崢嶸

彼女はこのとき、すでにこの論文の内容を知っていたはずである。

羅思鼎論文はいう。

始皇帝の功績は、かれが新興地主階級の革命家として、關東の六國に大量に残っていた奴隸制の殘餘をうちくだいて、中國史上、最初の統一的、中央集權的封建國家を樹立したことにある。その政權が死後わずか三年をへずして滅亡したのは、暴

政”の結果ではなく、むしろ獨裁（奴隸主復辟派にたいする彈壓）が不徹底であつて、そのために趙高が秦王朝の心臓にもぐりこみ、始皇帝の死後、二十餘年ももぐりこんでいた趙高が發動した反革命政變が直接の原因となつて、秦朝が滅亡したのである。趙高が政變をくわだてたときの李斯の妥協と動搖もまことに許しがたい。趙高は始皇の法家路線をやめて儒家路線をとつたが、これに反對して、蜂起したのが陳勝であつた。陳勝の敗北は、孔丘の子孫の孔鮒ら反動儒生が蜂起軍にまぎれこみ、内部から破壊したことが原因である。すなわち、蜂起軍のなかにも儒法闘争があつた。陳勝、呉廣の蜂起にひきつづいて出現したのが、項羽、劉邦をそれぞれの代表とする儒家路線と法家路線のたたかいである。項羽と劉邦は、もともとは陳勝が指導した農民蜂起の隊伍に屬していたが、陳勝、呉廣が犠牲になつたあと、項羽は、「西楚の霸王」を自稱、劉邦を漢王に封じた。この兩者のあいだに戦争が生じ、「楚と漢とあい争う」ことになつた。この戦争は、路線からみれば、儒法闘争であつた。劉邦は入關すると、趙高の嚴重苛酷な法律を廢止した。さらに趙高を殺して投降してきた秦の王子嬰、および關中の地主階級にたいして保護政策をとつた。これと反對に咸陽を占領した項羽は宮殿を燒き、財寶を奪い、始皇の墓をあばいた。これは、六國の舊貴族の亡國の恨みをはらしたものであり、階級的報復をおこなつたものである。

羅思鼎論文は、そこでいよいよ眼目の呂后について、つぎのようになる。

《楚と漢の争いにおいて、劉邦が項羽に勝利することができた鍵は、劉邦集團の路線が項羽よりも正しかったことである。それとともに始皇のときに残しておいた強大な物質的基礎にも依據している。軍事的な實力からいえば、項羽の敵ではなかつた劉邦が、たびたび戦つてたびたび敗北し、何回か全軍が覆滅したが、最後には戦えば戦うほど強大となつた。その重要な原因のひとつは、關中人民の支持であつた。關中は呂后、蕭何の指揮下に積極的に建設をすすめ、前線を支援する根據地となり、源々と斷えることなく前線に人力、物力を輸送した。劉邦は、強力なうしろだてとしての關中根據地をもつたことによって、着實に勝利を入手したのである。漢朝が樹立されると、蕭何は第一功に評せられた。》

羅思鼎論文は右のようになるべたあと、さらに、つぎのように、『史記』蕭相國世家を引用する。

《大臣たちも、こう考えたのである。——蕭何は關中を轉漕して食糧を補給し、缺乏させませんでした。陛下はしばしば山東で亡^まけましたが、蕭何はつねに關中を全^まうして陛下を待ちました。これは萬世の功であります。》

以上のほかにも、つぎのようにのべた箇所がある。

《劉邦、呂后は、剛毅に韓信、彭越などの叛亂を消滅した。》

《劉邦、呂后から、あいだに文帝、景帝をへて漢武帝劉徹にいたったとき、一步を進めて統一と中央集權を強化し、封建社會制度がついに強固なものになったことを表示している。》

3 梁效論文について

この論文の原題は、「法家の女皇、武則天」であつたが、執筆、公表の意圖があまりにも露骨にあらわれるのを恐れて、發表のさい、「なすところある女政治家、武則天」に改めたとい⁽⁶⁷⁾う。江青は、一九七四年のはじめ、清華大學におもむき、「女がなぜ皇帝になることができたか」と武則天を問題にした。あたかも、當時の豫定では一九七四年に開催されるはずの四期人代大會の前夜であつた。梁效をペンネームとする執筆者集團は江青の意をうけ、歴史上の武則天を書くことになり、こんにちの「江則天」を書き、それによって、江青が現代の女皇になるうえで「意義のある仕事」をしようと、(1)歴史の眞相をあきらかにする、すなわち、武則天が男尊女卑の觀念を蔑視したことを賞讃し、女が皇帝になつてもよいことを論證する、

(2)歴史の經驗をしめくくる、という執筆上のねらいをさだめた、とい⁽⁶⁸⁾われる。

武則天については、皇帝に即位してからみずから語った、有名な話がある。

彼女がまだ唐の太宗の宮女でしかなかったとき、「獅子驄」と名づけられた名馬があつて、骨格たくましく、これを調教して乗ることのできるものがいなかった。彼女は太宗にむかつていった。「妾はこれを制することができます。一に鐵の鞭、二に鐵の撻^こ、三に七首です。鐵の鞭で撃つて服従しないなら、撻^こでその首を撻^{なぐ}ります。それでも服従しないなら、七首をもつて、

その喉を斷つてやりますわ」。

この話をしたあと、彼女は聞き手にむかつて誇らしげに語った。

「太宗は朕を壯とされたものじゃ」。

梁效論文は、右の話を要約して紹介したあと、「武則天じしん、庶族地主集團が腐朽した士族地主集團を打撃つ一條の鐵の鞭であつた」とのべて、反對派、反對集團にたいする容赦ない彈壓を賞讃している。が、それはまた、江青をこのような武則天像にかさねあわせて、その權威を誇示することでもあつた。「庶族集團」が「文革派」、さらには、文革的な思想を支持する勞働者、青年層を、「士族地主集團」が「脱文革派」を、とりわけ、周恩來や國務院の副首相級を指していることはいうまでもない。梁效論文は、武則天の反對派にまわつた長孫無忌、褚遂良に、それぞれ「太上國舅」、「顧命の老臣」という形容をつけながら、武則天派の人物には一切そのような形容をつけないということによって、「文革派」の敵が誰であるかを暗示し、武則天がどのようにその政敵を「一條の鐵の鞭」で彈壓したかをのべることによって、「脱文革派」が將來どのような處分を受けるかを、暗示したのである。それは、「脱文革派」にたいする、あるいは脱文革とまではいかないが、「文革派」に不滿なひとびとにたいする警告であり、恫喝であつた。さらにこの論文は、毛澤東と江青の夫婦關係を暗示しつつ、高宗と武則天の關係が思想的なものであることを強調し、また、武則天の庇護をうけて特權をもっていた「北門の學士」の政治的な任務を強調して、ほかでもない、この論文の執筆者じしん、すなわち梁效集團じしんの特權的、政治的立場を誇っているのである（じつさい、それは誇っているとしか讀めない）。

梁效論文はいう。

武則天は生涯にわたつて法家路線を推進した。それは、腐敗した士族地主の利益を代表する頑固派の反抗をうけたが、それとの闘争は、三回にわたつたかまりをむかえた。

第一回は、六五〇年、唐の高宗が即位してまもなく、皇后を廢立する問題をめぐって、武則天は王皇后と對立したが、武則天は勝利した。名門士族出身の王皇后のあとおしをしたのは、「太上國舅」長孫無忌、「顧命の老臣」褚遂良らをはじめとする守舊派であり、庶族寒門出身の武則天のあとおしをしたのは、庶族地主集團に屬する李勣、許敬宗、李義府らであった。六五五年、褚遂良は追放され、六五九年、長孫無忌は自殺し、守舊派の官僚二十餘人が罷免になった。六六〇年、武則天は高宗の委託をうけて、「百司の上奏を決する」ことになった。これは實際上、全部の政權を掌握した、ということである。

第二回の鬭争は、六八三年に高宗が死んだあとに發生した武裝叛亂を鎮壓したことであり、第三回は、六九〇年、武則天が正式に位に登って皇帝と稱し、國號を周と改めたさいの叛亂を鎮壓したことである。

梁效論文はいう。反動的な士族地主の奪權鬭争に勝利すると、武則天は政治、經濟、思想文化の各領域で、法家の革新路線を實施したが、それは、斷乎として士族地主に打撃をあたえ、庶族地主を扶植するところにあらわれている。（ここで、まえに引用した、武則天じしんが一條の鐵の鞭であった、という記述がでてくる）。守舊派に打撃をあたえるために、武則天は告發すること、密告することを獎勵し、密告する人間であれば、農夫、樵者であっても召見し、その言うところが旨に稱^{かな}えば、即日、官を除^あえた。

梁效論文はこのようにいう。

《すべてこれらの措置によって、武則天政權の統治の社會的基礎は唐太宗のときよりもいっそう擴大した。武則天が皇帝になるとき、表を上^{たてまつ}って擁戴したもののだけで六萬餘人あった。》

梁效論文は、さらに、武則天の經濟措置をのべたあと、思想面では反儒教的色彩があったとし、「儒教に反亂することは、唐の高宗と武后が結合する重要な思想的基礎であった」という。また、若干の文學者を組織、北門から直接宮中に入入りできるようにし、政治に参加させて、これによって宰相の權力を分^わかった。これらの文學者は「北門の學士」と呼ばれたが、武則天の革新政治のなかで、重要な役割を演じたのである、という。

だが、梁效論文は、武則天を完全無缺な政治家として賞讃してばかりいるのではなく、けっきょくは地主階級の政治家であったこと、儒教を攻撃するために佛教を利用、佛寺を建築して人民の負擔を重くしたこと、新しい封建大貴族を保護したことなどの缺點を指摘している。

梁效論文はつぎのように結ばれている。

「たしかに、武則天の歴史的な役割は、封建社會を推しやって前進させた革命的な農民に比べるなら、同列に論ずることはできないものである。しかし、彼女は、つまるところは歴史の潮流に順應した傑出した人物であって、これを法家の女皇武則天と呼ぶことは、歴史の實際に符合するべきである。」

4 理論小組の論文について

この清華大學幼稚園労働者理論小組の論文、「武則天にたいするいくつかの見方を語る」は、おそらく、本節、3でとりあげた梁效論文が若干の留保をつけ、効果がいくらか弱くなったのを救うためであろう、極力、武則天をおしだす論旨である。この論文について、いままでのところ、とくにとりだして論じた批判論文がないのは、署名が梁效執筆集團のいまひとつのペンネームであるから、梁效について批判すれば、それがそのままあてはまるからであろう。また、論旨があまりにも明快であるため、江青が武則天になろうとしたと批判すれば、これまた、あてはまるからであろう。

しかし、ある批判論文がつぎのようにいっているのは、この理論小組論文が、末尾において婦人の重要性を強調しているのに照應している。

「『四人組』の執筆集團は、いちはやく「呂后が政治をおこなったのは、儒家の男尊女卑思想にたいする否定であった」といい、さらに武則天が皇帝になったのも、まるで女權を争うためであったかのようにいっている。いまや江青はみずから女權闘士の桂冠をあたまに戴いた。(レリニンから引用を省略)地主階級支配者として、呂后と武則天が女權を争うために闘争するはず

はないのだ。この勤勞婦人を搾取する江青という吸血鬼が、あれこれみずくろいして婦人解放の英雄のみなりをしようとしたところで、だれを騙すことができるのか。⁽⁶⁹⁾」

また、べつの批判論文も照應している。

《江青が女皇帝を鼓吹するのは、男尊女卑の觀念を打破し、女權を伸張するためか。まったく、そうではない。中國史上、おおくの革命的女英雄が生まれ、農民革命の婦人指導者が生まれたが、われわれは江青がそれらの婦人を表彰したことを耳にしたことがない。問題ははっきりしている。彼女が心酔しているのは勤勞人民のあたまたがって、威張りちらしている女皇帝なのだ。⁽⁷⁰⁾》

理論小組論文は、《わが國の歴史には、皇太后が政務をみたことが一度ならず出現している。だが、ひとりの皇后として、皇帝が在位したときには、朝廷に臨んで政務をみ、皇帝が死んでからは、これまた正式に皇帝となったのは、唐朝の武則天ひとりあるのみである》と書きだしている（これこそが、江青がもつとも文章化、活字化して欲しかったことばであろう）。そして、「一、武則天はなぜ皇帝になることができたか」、「二、武則天ははたして、^{みだ}濫りに殺し」、「殘酷」であったか」、「三、武則天が皇帝になったのは「めんどりが、ときを告げる」であるか」という三つの問いを設けて、それぞれに答えている。

「一」が、これも單刀直入に、「孔孟の徒は、彼女が美貌であつたため、皇帝を魅了し、陰謀詭計をやつて、皇位を篡奪したのだという。はたして、そうであるか」と書きだしているのは、すでに、江青についてこのような風評がおこなわれているのを、それとなく、しかし大膽にとりあげたのかもしれない。これについては、高祖が王皇后を廢して、武則天をたてた背後に、「豪門士族」對「庶族地主」の對立をみ、後者のあとおしがあつたことをあげている。封建社會の貴族王侯にとっては、「結婚も一種の政治的行爲であり、新しい姻戚關係を借りて自己の勢力を擴大する機會であつた」というエンゲルスのことば、また、「いかなる社會の時代であれ、自己の偉大な人物を必要とする、もしそのような偉大な人物がいなければ、それはその

ような人物を創造しようとするのだ」というマルクスのことを引用している。

「二」については、むしろ武則天が、南北朝いろいろの世襲の門閥等級を打破して、庶族地主出身の人材を大量に任用、拔擢したことをみるべきだといひ、武則天が殺したのは、復辟をはかる唐朝の宗室、貴族の親戚、舊臣であつたという。《これによつてわかるように、武則天が人を用ひ、人を殺すのは、いづれも彼女の革新的な政治路線に服務するためであつた》といふのである。

「三」については、男尊女卑の封建社會において、武則天は破天荒にも女皇帝になつたが、これは、孔老二の徒、子徒孫のヒステリックな發作をひきおこした、かれらは「めんどりが、ときを告げるのだ」とわめきちらした、とのべ、それをつぎのように批判する。そこでは「子」に、男の子はふくむが、女の子はふくまない字義まで援用しているのである。

《かれらの眼からみれば、夫は妻の綱おづなであり、夫唱婦隨しかありえない。とくに皇帝にいたつては、それは「天子」なのであつて、天の息子ということはありうるが、娘ということはありません。それは朝、空があかるくなると、おんどりがときを告げることはありうるが、めんどりはときを告げることができないのと同じであつて、これは天經地義のことなのだ。もし、「養い難い」女子が男子と同じように皇帝にならうものなら、それは、「めんどりがときを告げる」ことであり、でたらめだということになるのである。かれらが、孔老二の「男尊女卑」の破れた旗をふるのは、かれらが男を重んじ、女を輕んじるがために武則天を攻撃しようとしただけではなく、より重要なことは、武則天が實施した法家の路線を攻撃しようとしたのである。》

ただし、この論文も、われわれは武則天の一切を肯定しようとするものではない、と斷っている。だがしかし、そのあとさらに、毛澤東の詩句を引用し、中國の天から地まで、高原から海洋まで、どこに女同志が缺けてよいところがあるうかといひ、《批林批孔鬭争のなかにあつて天の半分をささえ、革命をつかみ、生産をうながすなかにあつて天の半分をささえ、六億神州のなかにあつて、天の半分をささえよう！》

と結んでいる。

この論文は、論理を擴大する構造をもっている。すなわち、武則天、じつは江青に反對するものは、男尊女卑の思想のもちぬしである、それは儒家の徒であつて、法家革新路線、すなわち、毛澤東革命路線に反對するものである、という構造である。「路線」という用語が、まるで一つの齒車のように、概念の擴大、轉換に利用されている。

5 梁效論文について

「儒法闘争の歴史的経験を研究せよ」と題するこの論文は、商鞅の變法にはじまる法家路線が、中國史の流れのなかで消長するさまを概観したものであるが、とくに前漢の前期と中期に法家路線が堅持された根拠を、「法家指導集團」が成立していたことにもとめている。「四人組」にたいする批判者によれば、この點こそ江青らの野心のあらわれだといふのである。

梁效論文はいう。

商鞅の變法から秦の始皇帝が中國を統一するまでに、百三十餘年を経過した。魯國が「初稅畝」を実施したときから數えると、三百七十餘年を経過した。この何百年間かのあいだに、新興の地主階級は、何回か政權の奪取、喪失をくりかえした。

秦の始皇帝は法家路線を實踐して、最初の中央集權的封建國家を樹立した。秦王朝樹立ののちも、復辟と反復辟の闘争は激しいものであつた。奴隸主復辟勢力の代表的人物趙高は、法家の衣をきて秦王朝の心臓にもぐりこみ、始皇帝が死ぬやいなや、沙丘の反革命政變を發動し、儒家路線をもって法家路線にかえ、地主階級の政治的代表にたいして血なまぐさい階級的報復をくわえた。これをみてもわかるように、路線がかわれば、復辟がまかりとおるのである。

趙高の篡權にたいして、地主階級の政治家は無策で手だしできなかったが、陳勝、呉廣の農民蜂起軍は、三年をいえずして

趙高政權を墳墓におくった。

秦末の農民大蜂起が奴隸主復辟勢力を一掃した基礎のうえに、新興地主階級の西漢王朝が誕生した。しかし、没落奴隸主階級は若干の面では新興地主階級よりも強力で、儒生をかき集めては復辟の世論をつくり、手中の軍事力をもって武装叛亂を發動した。こうして、西漢の反復辟闘争は、長期、複雑、困難なものにならざるをえなかったのである。

西漢王朝が、前期と中期における反復辟闘争に勝利を占めることができたのは、法家路線を堅持したからである。始皇帝の死後には、法家路線は中斷したが、漢の高祖の死後には、法家路線は呂后、文、景、武、昭、宣帝の六代にわたって堅持された。それは、農民戦争、階級の力の對比にもよるが、中央政權に、長期にわたって法家指導集團を保持したことが、大きく關係している。

梁效論文は、この法家指導集團について、さらにつぎのようになる。

《劉邦は秦王朝の滅亡から中央指導集團のきわめて大きな重要性を認識した。かれは法家の人材登用路線を堅持し、闘争の實踐のなかで人材を選び用いた。劉邦の死後、呂后と漢文帝、およびそれにつづく何代かは、いずれもひきつづき劉邦の法家路線を貫徹し、かつ晁錯、張湯、桑弘羊らの法家の人物を重用し、かれらに中央で工作を主宰させた。中央にこのような比較的連續した法家指導集團があったことによって、法家路線が堅持されることが保證されたのである。》

しかし、奴隸制復辟の危険が過去のものになるにつれ、地主と農民の矛盾は日ましに尖鋭となり、法家思想は地主階級から嫌惡されはじめ、適當に加工改造された儒家思想が、かれらの必要にこたえるようになった。

梁效論文は、このあたりから結論をいそぎ、つぎのように入。

封建社會の中、後期には、儒家の學説が地主階級にとって支配的地位を占めるイデオロギーとなり、法家は新興階級の代表としての資格を失い、地主階級のなかの革新派となった。社會的危機、民族的危機にたいして、法家は若干の改革を主張、統一を堅持して分裂に反対し、抗戦を堅持して投降に反対した。しかし、かれらは封建制度のために出口をさがしてやることは

できなかった。孔孟の道を批判はしたが、徹底的に決裂することはできなかったし、また、決裂することを願わなかった。鬬争はしたが、西漢以前の法家のように前途にたいして自信をもっているわけではなかった。儒家がますます支配的地位を占め、法家はますます儒家の壓迫と迫害をうけたのである。かれらは、自覺的に歴史發展の客觀的法則を掌握することも、人民大衆が歴史を創造する偉大な役割りを認識することもできなかった。

6 翟青論文について

一九七四年七月、『學習と批判』編集部にたいして「四人組」からこの論文を書けとの指示があったとき、この指示をうけた「四人組」配下の人間は、會議室にとびこんできて叫んだという。「呂后の文章を書かなければならない。誰か名乗りでるものはいないか。希望者は申出してくれ。この文章は現實性が強い。だが、危険もおかさないやならない」。名乗りでるものがないので、また叫んだという。「希望者は申出してくれ。申出してくれ」。「四人組」のべつの人間は、呂后の文章を手配するにあたって、文章が、讀者に「江青は唯一の、傑出した、正しい路線の繼承者である」ことを暗示するよう強調した。⁽⁴⁾こうして書かれたのが、この論文「西漢初期の政治と黃老の學を論ず」である。

この論文は、ひとつながりの、呂后、武則天讚美の論文の最終決定版ともいうべきものであった。以上、われわれがみてきた、ひとつながりの論文を概観して、歴史研究者の黎澍は、「四人組」が逮捕されたあと、つぎのように指摘している。これは、當時の時流に媚びることのなかった人間がとらえた概観である。

《「四人組」のいわゆる儒法鬬争史を研究せよは、雲をぼかして月を暗示する手法をもちいて篡奪權の陰謀をすすめるためのものであった。奪權したあととは、だれが權力を掌握するか。江青の語ったことばが、すでにこの消息をもらしている。「呂后はたいしたものです。劉邦をたすけて天下を平定しました。劉邦は韓信を殺さなかったのですが、呂后は果斷にも韓信を殺しました」。「呂后については、これだけを立てて宣傳しなければなりません。漢の高祖の死後、天下が大い

に亂れました。呂后は權力を掌握し、またあらためて天下を統一しました。呂后は主として法家路線を實施しましたが、それは漢の高祖の路線です」。

毛主席は、「江青には野心があるぞ」と指摘した。共産黨の呂后となって、一朝、權力を入手したならば、韓信のたぐいの古參幹部を大いに殺し、彼女の封建的ファッショ獨裁を樹立しよう。これが江青の野心だったのである。

江青が、このようなおもわせぶりを語ったあと、呂后を賞めそやした文章を書かなければならないというのが、梁效と羅思鼎の、一九七四～一九七六年のあいだの念じ念じて忘れざる氣がかりとなった。だがこの題目たるや、まことに書きにくいものであった。

梁效は一九七四年に「法家代表人物紹介——呂后」（『北京大學學報』一九七四年三期六月二十日出版掲載）を書いたあと、どのようにしても、呂后だけを立てて宣傳する文章らしい文章が書けなかった。一九七六年十月はじめ、「四人組」がすでに覆滅にのぞんでいた最後の時刻に、江青が黨の最高權力を篡奪する準備として、かれらは「劉邦の死後、呂后はどのように既定方針どおりやったか」という題の大論文を書くようにしていたのである。

「四人組」の上海における代辯者、羅思鼎は一九七四年六月、江青の「呂后は、これだけを立てて宣傳せよ」という指示をつつしんでうけるや、ただちに「呂后を論ず」という題の文章を書くべく動員した。しかし、原稿はくりかえし手を入れて數カ月経過したが、完成しなかった。最後に、『學習と批判』に「西漢初期の政治と黃老の學を論ず」を發表して、「借金を返した」ことにした。題目からみると、この論文は黃老學派の漢初政治における役割を論述しているようであるが、しかしその眞實の目的はそこにはなく、呂后が政治をおこなって、「力をつくして劉邦の法家路線を守って變らなかつた」こと、「以後の『文景の治』のために堅固な基礎をかためた」ことをほめそやすためのものであった。この文章は、さまざまな方式をもって、正面から、側面から、もってまわったところから、しかしながらきわめ鄭重に、十回にわたって呂后の名をあげ、もって彼らの内心における「女皇」「江青陛下にたいする耿耿たる忠心をあらわしているのである」⁽⁷⁾。

黎樹の批判は以上のものである。しかし、當時、翟青論文は正面きつて掲載され、反論はみられなかったのである。

翟青論文はいう。

西漢の初期、中期は、基本的に法家路線であった。宣帝（第九代）のことば、「漢家には漢家の制度があるが、それはもともと王道と霸道を雜えたものである」は、清朝の魏源が解釋しているように、「黃老」の外衣のもとに法家路線を推進したということである。いいかえれば、「道」（道家）が表で、「法」（法家）が裏だ、ということである。

西漢初期の封建統治集團のなかで、公然と黃老の學を提唱したのは曹參である。蕭何が死んでから、呂后は劉邦の遺囑を守って、賢相という評判の高い齊國の曹參を中央により、第二代の相國にした。曹參は、劉邦、蕭何の既定の路線と政策にてらしてことをすすめ、別個に新しいことをはじめようとはしなかった。表面的には「日夜、醇酒を飲み」、なにもせず政治の話をもちこまれると、その人間と酒を飲み、「無爲」を主張する法家の方であったが、劉邦の法家路線に背こうとする人間にたいしては警戒心をはたかせ、法家路線を忠實に實行する人間は重くとりたてた。曹參は自分を無能よばわりする恵帝を、「職を守って、遵って失わなければ、それでよいではないか」といって、やりこめたことがあるが、その「職を守」とは、劉邦の法家路線を變更しないことであつた。

《呂后、蕭何、曹參らの「無爲にして治む」は、表面上は「無爲」であるが、實際上は「有爲」であつて、先秦の道家思想にたいして、積極的に改造をくわえ、新しい階級的内容をあたえたものであつて、「黃老」の外衣をまとつた法家政治であつた。》

翟青論文は、劉邦が天下を掌握したときは、民に仕事がなく、飢饉となつたが、呂后が政治をおこなうようになってからは、衣食足り、犯罪も減少した、といい、つぎのようである。

《呂后が久しく戦亂を経た天下を迅速に安定することができたのは、彼女が劉邦の法家政治路線を堅持貫徹したばかりで

なく、劉邦の法家組織路線を堅持貫徹したことにあるのである。呂后のとき、「登用した曹參、王陵、陳平、周勃らは、いずれも高帝が劉氏を安定させるべく留意した人間でないものはない」（趙翼『二十二史劄記』）。この一群の久しく試練をへた法家の人物は、すべて重用され、重要な鍵となる指導的な陣地に配置された。こうすることによって、中央には比較的に連續した法家指導集團があることになり、法家路線が中斷されないよう保證したのである。それは、政權を強固なものにするために、重要な意義をもっていた。『

翟青論文はいう。

文帝、景帝のとき、黄老の學はさらにさかんになった。武帝が「雄才大略」をふるうことができたのは、文帝、景帝のときの蓄積があったからである。この時期の、表は「道」、裏は「法」の代表的人物は、文帝の妻の竇太后であった。竇太后は皇后であること二十三年、皇太后であること十六年、太皇太后であること六年、半世紀近く黄老の學を提唱した。

黄老の學は、儒家から猛烈に攻撃された。『史記』老子韓非列傳に、「世の老子を學ぶものは儒學しりせを黜しりせけ、儒學もまた老子を黜しりせく」といっているが、「世の老子を學ぶもの」とは法家のことである。したがって、表面上は「儒」と「道」の對立であるが、實際上は、「儒家」と「黄老」の外衣をまとった法家の對立であった。

漢初、黄老の學にたいして、法家と儒家が異なった態度をとったのは、歴史的には、道家が奴隸主階級の下層の利益を代表する學派として春秋戰國の時期に出現し、奴隸主貴族の利益を代表する儒家とは矛盾があったからである。儒家を批判するうえでは、道家と法家は比較的に近く、「刑名法術の學を喜び、その歸するところは黄老にもとづく」（『史記』老子韓非列傳）韓非たちは、黄帝を革新派の代表的人物として描いている。そして漢初の黄老は、先秦道家の本來の面目を失い、新しい時代の特種形態となっている。

法家は黄老を愛し、儒家は黄老に反對した。それは景帝の面前における轅固と黄生の辯論となってあらわれ、『老子』を攻撃した轅固は竇太后の怒りをかき、罰として獸園にいれられ野猪と格闘しなければならなかった。竇嬰、田蚡は儒家を推賞し

て免職になり、竇太后の死後、田蚡は丞相となって、まきかえしをやった。

西漢初期においては、中央政權は「尊法」であって、基本的には法家の天下であつた。西漢初年の歴史をみるなら、復辟と反復辟、分裂と統一をめぐる二つの路線の闘争は停止したことがない。注意すべきことは、西漢初期の分裂割據勢力はたいいていが北部草原上の匈奴の反動的な奴隸主貴族と結托していることである。

翟青論文は、賈誼を文帝時期の、晁錯を景帝時期の、法家代表人物としてとりあげて論じ、晁錯にいたって、裏の法家思想が表にあらわれ、儒の表が不必要となつたばかりでなく、道の表も餘分のものとなつた。最後に、黃老思想の外衣をぬぎすてたのは桑弘羊が賢良、文學たちと展開した闘争である、という。漢初の封建統治階級が黃老の學を提唱したことは、階級性のはつきりした地主階級の政策であるが、積極的でもあれば、消極的でもある。地主階級は、一切の擯取階級と同じように政權を奪えば革命をやめてしまう。したがって、プロレタリア階級はそれとは異り、繼續革命を堅持し、革命を深めなければならない。

第三章 〈文革派〉の挫折・女皇批判の展開

一 歴史の懲罰と周勃讚美

もともと、現代（そのときどきの現代）の人間を歴史上の人物になぞらえるということは、いかなる社會であれ、珍らしくはない。江青が、自分を呂后や武則天になぞらえたという行爲にしても、たとえ、それを讀まされ、聞かされ、見させられる側には、江青が呂后や武則天とはたして同一かという疑問、また、なぜ、江青は自分を呂后や武則天になぞらえるのかという疑念が生じたかもしれないにしても、現代の人間を歴史上の人物になぞらえるということそのこと自體は、いちおう許容されてう

けとられたのであろう。そのような許容が民衆一般のあいだになければ、江青に、そのような「古を今のために用いる」行為は、そもそも発生しなかったはずである。そして、その許容は、江青の挫折によっても崩壊しなかった。

江青ら「四人組」が、華國鋒によって逮捕されたあとに出現したのは、呂后、武則天を讃美したかずかずの證據を否定し、そのような歴史上の人物に自分をなぞらえた江青を批判した論文であったが、そればかりではなく、こんどは逆に、華國鋒を暗黙のうちになぞらえつつ、呂氏打倒の人物としての周勃を讃美した論文も出現した。批判者もまた、「古を今のために用いる」許容を最大限に活用しているのである。〈呂后—江青〉という公式が成立したかげでは、〈劉邦—毛澤東〉という公式が暗黙のうちに承認されていたはずであり、この二つの公式の延長線上に、〈周勃—華國鋒〉という公式が出現したとしても、それはそれで不思議ではない。

江青が讃美したのは、まず法家であり、法家の女皇としての武則天であり、即位こそしなかったが、これも法家の呂后であった。したがって、批判が、まず法家讃美の論理にむけられたことはいうまでもないが、「四人組」の逮捕以後しばらくして、およそ、わたしが「V」と名づけた時期に、〈文革派〉が主張し、提唱した一切、さらには實力行使にもでた事件のかずかずの一切に反対する文章、論文が洪水のようにあふれたこと、これもまたいうまでもないのである。「批林批孔」運動、「儒法闘争に學べ」運動にたいするものとしては、その最初の聲ともいうべき、北京の労働者、歴史研究者の座談會がひらかれ、新聞は、「歴史を嘲けり弄んだ」「四人組」は、歴史の懲罰をうけた⁽⁷³⁾—という見出しをつけたのであった。同じ趣旨の見出しとしては、「四人組」に逆轉された歴史を逆轉せよ⁽⁷⁴⁾もあらわれている。子の矛をもって、子の盾を陥さば何如、という反撥であつたらう。

周勃讃美の論文の出現もはやかった。つきにかかげる論文の(一)は、まえにのべた座談會の記事の一週間後に發表されたものであり、さらにそれから一カ月たらずして、ふたたび同じ趣旨をさらに深めた論文(二)が出現している。これは、本稿の冒頭(三二八ページ)でふれた論文である。(呂后讃美を批判していても、周勃を讃美していない論文はここではふれない。)

(一) 徐遜「江青と呂后」⁽⁷⁶⁾

(二) 李延明、隋喜文「劉氏を安んずる者は、必ずずや勃なり」⁽⁷⁶⁾

(三) 北京自動車製造廠労働者理論研究所『呂后そのひと——呂后および諸呂の叛國篡權資料選譯』序文⁽⁷⁷⁾

〈文革派〉の理論がしだいに上昇して、〈呂后—江青〉、および〈武則天—江青〉といったところまでのぼりつめてきていた以上、〈周勃—華國鋒〉という命題がでてこざるをえないのも、自然の理であるようにおもわれる。というよりも、のぼりつめてついに山顛にたった〈文革派〉の論理を、その山顛から一蹴してはるかな下界にまで轉落させる命題として、むしろ積極的に提出されたとみるべきであろう。これはあいにく、〈武則天—江青〉には對應しないが、中國の歴史上、武則天にたいしては、呂后にたいする周勃のような人物を缺いているためであって、〈武則天—江青〉については、それはそれとして、批判することになる。

二 周勃讚美の諸論文

1 徐遜論文

呂后讚美が現實の江青を二重うつしにして書かれていたように、周勃讚美が現實の華國鋒をしたじきになっている部分があるのは當然のなりゆきであるが、徐遜論文、「江青と呂后」は、とりわけ、劉邦の死後の呂后、呂氏一族の專權ぶりを指摘する箇所において、江青の專横のさまを念頭において記述しているように感じられる。呂后が關中の地を、前線支援の根據地として經營したという賞讃にたいして、いちいち年代をあげて反論しているのは、歴史論文の體裁を守っている。だが、惠帝の死後、呂后が子供をつれてきて、「小皇帝」にしたという、その「小皇帝」は、事實上、幼少で小さかったし、權力もなかったから、人形を飾っておくようなもので、この表現にふさわしい存在であつたろうが、十全大會で突如、副主席におどりあがった、

美青年の王洪文を想起させないでもない。正論をのべて丞相をやめさせられた王陵は鄧小平を、名目だけの丞相、太尉であった陳平や周勃は、葉劍英や華國鋒を（葉劍英は國防部長であるから太尉の周勃に、華國鋒は總理であつたから丞相の陳平に、なぞらえるのがより適切であるかもしれないが、しかし華國鋒は公安部長でもあつた）、朱虛侯の劉章は汪東興を想起させる。徐遜の表現に、「一擧にして」とあるのは、これは華國鋒の「四人組」逮捕のさい、『人民日報』などがかならず使用した表現である。そして、劉邦が死に臨んでのべたことばを引用したあたりのしたじきが、毛澤東が華國鋒にあたえたという、「きみがやってくれば、わたしは安心だ」であることは疑いないのである。そして論文は、呂后らを、「二千餘年前の「四人組」」とのべて、現實をかさねながら読んできた讀者に、その推定が當っていることを保證し、結末にいたって、毛澤東が、劉邦が周勃に期待して死んだ故事を華國鋒に語つたと告げ、この歴史故事を現代に適用することは、毛澤東にてらしても正しい、といおうとしている。

徐遜論文はいう。

歴史は無情なものであつて、誰であれ、歴史を嘲り弄び、歴史を篡改するものは、必らずやしかるべき懲罰をうけるであらう。

王洪文、張春橋、江青、姚文元ら反黨集團は「批林批孔」運動のなかで、破壊活動をやつた。かれらのいう法家の人物のなかで、江青は呂后（呂雉）に眼をつけ、いたるところで、「呂后も法家だ」、「偉大な法家政治家だ」、「劉邦の法家の政治路線を貫徹したばかりでなく、法家の組織路線も貫徹實施した」などと吹きまくつた。残念なことに、史書には呂后が「高祖を佐けて天下を定めた」という讃語はあるが、實際の内容がない。

徐遜論文は、羅思鼎「秦漢のさいの階級闘争を論ず」が、劉邦は軍事力では項羽の敵ではなかつた、劉邦が最後は強くなつたのは呂后、蕭何が關中を前線支援の根據地としてつくりあげたからである、とのべたのを批判して、つぎのように指摘する。

關中が前線を支援したことはたしかに事實であるが、劉邦はその功績を蕭何のものといっている。「國家を鎮め、百姓を撫り、餽饌を給して糧道を絶たしめざるは、われ蕭何に如かず」と。呂后はなにをしたか、事實をみてみるがよい。

《紀元前二〇九年、劉邦が沛の地で反秦の兵を起したとき、呂雉は家郷にあった。紀元前二〇五年、項羽が彭城において、大いに漢軍を破り、劉邦は數十人をひきつれて逃げ、沛にいつて家族をつれだそうとしたが、かれの父親と妻はすでに逃げた。その途中、楚軍のために逮捕され、項羽の陣營にとどめおかれて、二、三年のあいだ捕虜になっていた。紀元前二〇三年になって、楚と漢は鴻溝を境界として講和し、そのときになって、項羽は呂雉と太公を劉邦に送りかえた。このときようやく、呂雉は劉邦と一緒にしたのである。彼女は關中にいかなかっただろうか。史書には記載がない。だが、呂雉が漢にかえってわずか三カ月にして、項羽は烏江で自殺し、劉邦は完全な勝利をえた。楚漢あい争う重要なとき、呂雉は捕虜として項羽の陣營にあった。これはあきらかな事實である。》

徐遜論文は、これにつづけて、このような事實無視は、「歴史はひとからいのように化粧をされ着付けをされるがままになる女の子だ」といったブルジョア階級のプラグマチスト、胡適でさえ、及ばぬことだと慨歎するだろうという。

徐遜論文は、つぎに梁效、羅思鼎が、呂后は劉邦の法家政治路線、法家組織路線を貫徹した、そして中央に法家の指導集團をつくった、とのべたのを引いて、それを検討している。まず、『史記』高祖本紀の、劉邦が臨終のさい呂后に問われて、曹參、王陵、陳平、周勃の名をあげた箇所を引用し、それらの人物と呂后の對立を指摘する。

紀元前一九九年、劉邦が死ぬとまもなく、呂后は篡權をはかって、喪を發せず、一舉に劉邦の功臣を殺害しようとしたが、陳平、灌嬰が兵十萬を守っており、周勃が二十萬の大軍の將として代（山西省北東部）にあったため、その實行をみあわせたではないか。

蕭何が死ぬと曹參が丞相になったが、曹參は呂后のことがめを恐れ、日夜、家にあつて酒を飲み、三年間なにもしなかったではないか。

紀元前一八八年、劉邦の子、劉盈（惠帝）が死ぬと、呂后は子供をつれてきて小皇帝とし、彼女は朝廷にでて政務をとり、皇帝となった。しかも人を使って、丞相の王陵、陳平にむかい、軍隊の指揮權を呂后の甥、呂臺、呂産、呂祿にゆずるよう説得させたではないか。

それでもたらず、呂后はその甥を王にしようとして、丞相の王陵に反対された。王陵が劉邦の誓い、「劉氏に非ずして王たるものは、天下ともに撃て」を根據に、呂后に反対すると、丞相をやめさせたではないか。呂后の寵臣審食と呂氏の家族が權を専らにしたため、陳平の丞相も周勃の太尉も名目だけとなったではないか。呂后はさらに死に臨み、呂産を相國とする遺詔まで作成している。劉家の天下はまもなく呂家の天下になろうとしていた。

徐遜はこのような事實を列舉したあと、つぎのように、周勃を描き、讚美する。

《このように岌岌として危きとき、太尉の周勃と丞相の陳平、および朱虚侯の劉章は計を定め、一舉にして呂産と呂祿の軍權を奪取し、諸呂を消滅し、劉氏の天下を回復した。劉邦が死に臨んでのべた、「周勃は重厚にして文少なし、しかれども、劉氏を安んずる者は必ずや勃なり」は、實證されたのである。このことは、劉邦が臨終のまえ、すでに呂后が篡權しようとすることを見ぬいていて、望みを周勃に托し、かれに劉家の天下を安んじさせようとしたことを説明している。

周勃は劉邦の期待に負かず、この重要な任務を完成した。周勃は、すなわちこのような人であったのである。》
徐遜論文はさらに、つぎのようについて。

《詭計多端の江青は、あろうことか、梁效に指定して、周勃がいかに呂后が皇帝になるのを支持したかを論じた文章を書かせていた。もし、「四人組」が倒れるのが少しおそかったなら、かれらのために舞文弄墨する、かの一群の文人どもは、そのような絶「妙」な文章をこねあげたにちがいない。》

そこで、呂后には、法家政治路線などというものも、法家組織路線というものもなく、あるのは篡權奪位の政治路線であり、劉邦の功臣を排斥して呂氏を重用する組織路線であった、と徐遜はいう。《呂后にくわえて、呂産、呂祿、呂通は、二千餘年

前の「四人組」ということができよう。』

徐遜論文は、江青が梁效集團に命じて、「呂后は劉邦の既定方針にてらしてことをはこんだ」〔呂后按劉邦既定方針辦〕という資料集、および論文を作成させていた、と指摘し、さらに、江青が呂后賞讃の文章を發表させていたところ、毛澤東は華國鋒にむかって、劉邦が臨終のさい、呂后篡權をおこなうことを看破していた歴史故事を語った、とのべ、つぎのように結ぶ。

『華國鋒同志は眞にわれわれの全黨全軍、および全國各族人民が衷心より愛戴するにふさわしい英明な領袖である！』

2 李・隋論文について

この論文、『劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり』は、解放軍某部隊に所屬する李延明と北京市建設委員會に所屬する隋喜文の二人の合作で、(一)の徐遜論文と同じく、周勃を讚美したものであるが、やや論調が異なるのは、周勃が呂氏を打倒したことを讚美はするものの、それだけではなく、(1)劉邦の法家路線を繼續して實施したこと、(2)皇帝たるべき人間を慎重に選んで「新しい内亂」が發生するのを防止したこと、(3)陳平とよく協力して、「軍・政の團結を保持したこと」をあげている。そこで、この論文は、徐遜論文が華國鋒を突出させたのにたいし、華國鋒の「四人組」打倒を成功させた葉劍英（陳平は葉劍英の暗喩であろう）や解放軍の支持と協力があつたことを指摘したものととれる。そして、葉劍英や解放軍が、なぜ華國鋒を支持し協力したかといえ、それは華國鋒の路線が正しいからだ、というわけである。華國鋒の路線の暗喩として使われている、「劉邦の法家路線」というのは、毛澤東の革命路線であるのか、周恩來の現代化路線であるのか、この論文のかぎりではわからないが、毛澤東の革命路線と周恩來の現代化路線は矛盾しないという立場をとれば、すなわち矛盾しない、そのような路線ということになろう。ところがいっぽう、この論文が發表されたころまで、華國鋒の新指導部からは、「走資派」批判（「四人組」を「走資派」とする）や「批鄧」（鄧小平批判）、「右翼まきかえし風反對」といったスローガンが提起されていた。⁽⁷⁸⁾

したがって、それらをふくめたものが、「劉邦の法家路線」ということになるが、(2)の皇帝たるべき人間の詮衡とは、復活の聲がしきりであった鄧小平の問題を意味しており、周勃の太尉よりはるかに高い皇帝の即位問題をもちだしたのは、鄧小平を復活させるばあい、その地位はかなり高いもの——すなわち一部の大字報が傳えたように、行政面では總理、軍事面では總參謀長、黨の面では第一副主席の地位——でなければならぬといっているのかもしれない。〈華國鋒—周勃〉を認めつつ、周勃、華國鋒を讚美することだけにおわっていないこの論文は、いくらか一種のおしつけがましき感じられないではない。そこで二人の筆者の所屬する「軍」と「北京市」というのが意味をもってくるようにおもわれるが、もしそうだとすると、「劉邦の法家路線」は、周恩來の現代化路線に限定されよう。「劉邦の法家路線」に「批鄧」をふくめると、それは鄧小平の復活と矛盾するからである。「天安門事件」には軍人が(私服で)参加していたという報道もあるが、そうした軍人と北京市の幹部の一部が構想する新しい體制は、華國鋒を排除はしないが、鄧小平を復活させ、鄧小平に采配をふらせて、現代化路線の推進をはかるというものになる。もっとも、皇帝たる人物の詮衡はひとつの比喩であって、鄧小平を復活させることは、それほど重大な問題なのだ、と警告したものとれなくもない。そうだとすれば、「劉邦の法家路線」は、毛澤東の革命路線を重視するという意味になる。

李・隋論文は、まず

《秦末漢初、劉邦を助けて政權を奪取し、政權を強固にし、劉邦の死後にあっては、呂后、および呂氏一族の篡權尊位との闘争のなかで、またもや決定的なたらきをした人物がいた。その人物こそ、出身は貧しく、文化は低く、ひととなりはずっと温厚な、太尉周勃であった。》

とのべ、以下、かれが秦朝にたいする戦いと、「楚漢戦争」のなかで、どのように功績をたてたかをのべ、葦のむしろを編む小手工業者で(つまり、職人であろう)、葬式があれば雇われて蕭を吹いたという出身から、八千八百八十戸、絳侯と號するま

でに拔擢されたが、「楚漢戦争」に従軍して、劉邦と項羽の路線がちがうことや、勝敗を異にしたそれぞれの路線の結果をみて、周勃の思想と政治的立場は、強く影響されたと断定している。

《長期の闘争の試練において、周勃は劉邦の法家路線に忠であつたし、劉邦も深く周勃を理解した。劉邦の臨終にさいして、呂后がかれに國事をだれに託すかをたずねたとき、「周勃は重厚なれど文化は低し。然れども劉氏を安んじる者は必ずや勃なり。令して太尉とすべし」といつた。よく人間を知り、よく人材を登用する劉邦のこのことばは、周勃の前期の活動にたいするもつともよい總括であつて、王朝の運命を周勃に託したことも、周勃にたいするきわめて大きな信任と希望をあらわしている。事實が證明するように、劉邦のみかたはまったく正しかったのである。》

右の引用のなかで、『史記』の「文少」を「文化は低し」と現代語譯（中國語現代語譯）していることについては次節でふれる。

李・隋論文はいう。

劉邦は生前に、「白馬を刑こゝろし」て盟もくわいを定め、「劉氏に非ざれば王たらず、功あるに非ざれば侯たらず」、これに違反する者は、「天下ともにこれを撃たん」といつたが、劉邦が死ぬと、呂后はその一族の四人を王に封じ、六人を侯に封じ、劉邦の親屬や功臣を殺害した。呂后の死後、諸呂は權を擅はしにし、周勃の太尉、陳平の丞相は名目だけとなった。こうした困難な状況のなかで周勃は困難な闘争をすすめた。呂后が、諸呂を王としようとしたとき、かれは本心をいつわつて應待し「虚與周旋」、右丞相の王陵を怒らせた。周勃は、「一時の措置であることをうちあけ、最終的には、劉邦の法家路線を繼續實施することを保證し、漢家の天下を保證し、國家の統一を保持するためである、とのべた。》

決定的な時期に、英雄の本來の面目があらわれる。呂祿、呂産が亂をしようとしたとき、

《周勃という中流の砥柱は、挺身して出て、迅雷は耳を掩うに及ばずの勢いをもって叛亂を撲滅した。》

《かれはまず、陳平の援助のもとに、計略をもつて呂祿を騙して北軍の兵權をさしださせた。周勃は北軍のなかにはいっ

ていって、「呂氏のためにするものは右袒^{ゆうたん}せよ、劉氏のためにする者は左袒^{さたん}せよ」といい、かれらに自己の立場を選択させた。「袒」とは肩から腕までをあらわすことである。古代の制度では、大事を決定するときは左の肩から腕までをあらわし、刑を受けるときは右の肩から腕までをあらわした。周勃が、「呂氏のためにするものは右袒^{ゆうたん}せよ」といったのは、諸呂に追従する人間に決戦をいともうとしたのである。』

その結果、周勃は北軍を掌握し、南軍を掌握していた呂産を殺し、さらに諸呂の叛亂を徹底的に粉碎した。

《この闘争のなかで、周勃が比較的冷靜に當時の形勢を評價し、決定的な鍵をにぎり、決定的な時機をにぎり、機智果斷、敵を各個撃破しえたことは、かれの闘争の才能を十分にあらわしている。劉邦が、周勃を「大事を屬すべし」とみたのは、まったく見誤りではなかった!》

諸呂を鎮壓したあとは、當時の漢の少帝は惠帝の實子ではなかったから、血統を尙ぶ封建制度のもとでは、《この現象がひきつづき存在することは、その後新しい内亂をかかえこむ。したがって、諸呂を平定したあと、もっとも緊迫した問題は、だれを選んで皇帝に立てるかということにはかならない。》

周勃、陳平らは、當時の何人かの劉姓の諸侯・諸王を比較して、「もともと、刑名の言を好む」、代王の劉恒を選んだ。《これは、周勃らが、眞の劉姓の血統の皇帝を選立するという形式のもとで行動した眞の實質は、法家の人物を選立して國家の最高指導權を掌握させることであつたということを説明している。漢の文帝、劉恒は、即位以後、劉邦の法家路線をうけついでひきつづき中央集權を強化し、封建經濟を發展させ、漢朝が強く盛んになるために基礎をさだめた。》このことで、周勃のはたらきは突出したものであつた。司馬遷は、周勃は「高祖が天下を定めてより將相の位にあり、諸呂、亂を作さんと欲すれば、勃、國家の難^たを匡^{ただ}し、これを正しきに復す。伊尹、周公といえどもなにをか加えんや!」と高い評價をあたえている。

李・隋論文はいう。

《周勃の一生はわれわれに告げている。かれが従事した事業が成功した主要な原因は、かれが正しい路線の側に立つこと

ができたからである。もし路線が誤り、歴史の發展の方向に背くなら、身は敗れ名は裂けることがよくある。周勃が勝利をうることができた、もう一つの要素は、陳平と牢固たる友情を樹立し、軍・政の團結を保持したからである。いかなる國家であれ、いかなる階級であれ、自己の統治を實行しようとしたならば、文武二つの手段をもち、軍事鬭争と政治鬭争、思想鬭争を結合しなければならない。これは支配階級のどのような集團にもせよ、その特殊の利益によって動かそうとしても動かせないことである。軍・政のあいだの團結を強化することは、その階級の最高利益を保護するために必要なことである。』

陳平に忠告したのは陸賈であつて、陸賈は「將と相の和」が重要であると説いた。

劉邦は、「劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり」といったが、それは周勃が劉邦に従つて南征北戰數十年、劉邦の事業に忠誠を盡したからである。周勃は厚重淳樸、よく人を團結させ、國家の運命にかんする重大問題については原則を堅持することができた。劉邦が王朝の運命を周勃に託したのは、遠見があつた。

『劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり』。これは劉邦の豫言であり、歴史の眞實でもあつた。』しかし歴史を歪曲することを慣用手段とした江青は、その崩壞の前夜まで腹心のものに、「劉邦の死後、呂后はどのように劉邦の既定の方針によつてことを處理したか」とか、「周勃はどのように呂后を支持したか」、という文章の作成を指示していた。『彼女は歴史はかつてきまみに弄び、篡改できると考えていた。歴史がどのように無慈悲であるかを知らず、歴史を嘲り弄ぼうとした江青は、ついに歴史の懲罰をうけた。』

3 『呂后そのひと』の序文

これは單行本（小冊子）、北京自動車製造廠労働者理論研究所『呂后そのひと』の序文として書かれたものであつて獨立して書かれたものではないが、序文の執筆の日付けは、まえにのべた（一）徐遜論文のわずか四日後であり、しかも、史書から

の抜粹にその語釋、現代語譯を付して編集されたものの序文であるから、いっそう明快な歴史觀がみられる。すなわち、華國鋒による江青はじめ「四人組」逮捕は、歴史上の周勃による諸呂誅滅と同じ性質のものであり、劉邦はあきらかにそれを周勃に期待して死んだが、毛澤東もまた、あきらかに華國鋒にこれを期待し、委託したのだ、というのである。

この小冊子の資料は、『史記』、『漢書』から選ばれている。『史記』の「高祖本紀」は全文、「呂太后本紀」は篇末の「太史公曰」の箇所を除いた全文、そして「留侯世家」、「樊噲列傳」、「漢書」の「匈奴傳」、「外戚傳」、「周昌傳」、「陸賈傳」から、短い抜粹、さらに卷末附録として「劉邦、呂雉大事年表」を付している。

「呂太后本紀」の「太史公曰」の省略は、おそらくそこで、司馬遷が、孝惠帝と呂后のとき政治にみるべき成果があったことをのべているからであろう。司馬遷は「天下、晏然たり」といつているのである。さらに、「刑罰は罕に用い、罪人は是に希し。民は稼穡に務め、衣食は滋殖たり。」ともいつている。すなわち、ここは華國鋒にとってぐあいがるいのである。

この小冊子が、『史記』から「絳侯周勃世家」を收録しなかったのはなぜだろうか。その篇末の「贊語」は、周勃が高祖に仕えて功績があり、かつ諸呂が亂をなそうとしたとき、これを匡した、古の聖人、伊尹、周公もこれには及ばないと、華國鋒にとってこれ以上望むことはできないはずの最大級の讃辭をささげている。「將相の位に在りしとき、諸呂亂を作さんと欲せるも、勃は國家の難を匡し、これを正しきに復す。伊尹、周公もなにをもつてか加えん哉！」。しかしながら、司馬遷はまた、「鄙樸の人なり、才能は凡庸を過ぎず。」ともいつている。あるいは、これが、「周勃列傳」を資料にくみいれることを、ためらわせたのであろうか。高祖が臨終にさいして周勃に期待しかれを評した、「周勃重厚少文」をこの小冊子の現代語譯は、「周勃穩重、缺少文化」と譯している。「文化」wénhuà は日本語でいう「文化」、「教養」からさらに日常的な「よみかき」をも含んで使われている。ここは、うえの「重厚」に並べ「文少なし」と訓めなくてはならない(げんに小竹文夫・武夫譯『史記』では、「重厚だがやわらか味がない」となっている)が、おそらく、「絳侯周勃世家」に、「勃、文學を好まず」とあることもあって、「缺少文化」という現代語譯が生まれたものであろう。「四人組」逮捕以後、周勃に言及した論文はすべてこの系統の譯で、「文

化低」としたこともある。高祖のことばが、はたしてこのような「缺少文化」、「文化低」といった、直接的な、ばあいによっては貶辭ともとられかねないような意味であったかどうかはわからない。また、現代中國の人間が〈周勃—華國鋒〉という對應を考へるにしても、どの程度まで細部にわたって對應すると考へているのか、それもわからない。要するに華國鋒が「四人組」を逮捕したことに照應する記述は、「高祖本紀」、「呂太后本紀」を收録すれば、それで十分であり、「絳侯周勃世家」は、むしろ、成功した周勃が新しい權力者の嫉妬をおそれて引退したことや、かれの子がけっきょくは誅されてしまったことが主たる記述となっているから、これをわざわざ收録することは、かえって讀者にいらざる忖度（そんたく）をさせるから、省略したのであろう。

この序文における暗喩は、〈樊噲—毛遠新〉、〈審食其—張春橋〉、〈王陵—鄧小平〉、〈陳平—葉劍英〉となっており、呂后と審食其の性的な關係を匂わせた「曖昧なる關係」をいうのは、「陳丞相世家」に、呂太后、呂后が楚（項羽）の捕虜となったとき、審食其が、舍人として待っていたこと、高祖に従って項羽を破ったあと侯となり、「呂太后に幸せら」れたこと、左丞相になってからは丞相の職を放棄して宮中にいて、百官がかれに決裁を仰いだことを記しているのを根據にしたものであろうが、それはまた現代の呂后に投影させているのであろう。「四人組」「四人幫」のもじりとして、「呂家組」「呂家幫」というのはまだしも、〈呂氏小朝廷が組織された〉とか、〈呂雉を中心とする王朝が劉邦の旗をにかけて樹立され〉、呂雉の權力は〈さいごにはかつてに皇帝を廢立できるまでに達した〉といっているのが、現實の暗喩だとすれば、その状況は言語に絶するといわなければならない。暗喩は現實をなぞるものであるが、暗喩から現實を想定することは、必ずしも現實を過不足なくとらえることにはならない。しかし、現實を想定しない（想定することを許さない）暗喩は暗喩ではないから、この『呂后そのひと』序文は、かなりな程度、肉眼でみえた現實について、讀者に伝えようとするところがあるとおもわれるのである。

『呂后そのひと』の序文は、まず〈華國鋒同志をはじめとする黨中央は毛主席の遺志を繼承して、王洪文、張春橋、江青、姚文元ら反黨集團の篡奪權の罪惡的な陰謀を斷乎果斷にも粉碎し、黨のために大奸を除き、國のために大害を除き、民〇人

民」という用語ではない」のために大憤おどろきないきどおを平らげた。』と歡喜のことばをのべて、つぎのようにいう。

《以前、毛主席は華國鋒同志にたいしことばも重くおもいをこめて、臨終せまる劉邦が呂后が國に叛き權力を篡かすめとろうとしていることを見破った物語を語ったことがある。これは「四人組」にたいする力のこもった批判であつたが、また、華國鋒同志にたいし切實な期待と願望を託したのもあつた。華國鋒同志は、毛主席の期待と願望に負くことなく、プロレタリア革命家の雄渾偉大な氣魄と革命的膽略をもって、全黨・全軍・全國人民を指導して、「四人組」の陰謀を粉碎する偉大な勝利をかちとつた。》

そこで、毛主席が語った物語の意義を理解して革命事業をおしすすめるために、『史記』、『漢書』から選んでこの資料を作成した。

《呂后、名は雉、中國の歴史上、惡臭を放つ名のよく知られた大野心家、大陰謀家である。彼女は長期にわたって苦心經營し、劉氏の政權をとつてこれに代ろうとして、自分の生んだ子、劉盈の太子の地位を保持しようとし、金をつかい、説客を招聘した。《あげくのはては、劉邦のところへいつて泣きわめき、鼻汁をたらすやら涙を流すやらして、「妻と子にたいする情愛」をいいたてた。》

《呂家組の勢力を強化するために、呂雉は姻戚關係を利用し、以前は劉邦がもつとも親しく信頼もしていた大將、樊噲をなかにひきこみ、曖昧な關係によつて審食其と盟約かたい黨を結成し、彼女の兄の呂澤といつしよになつて、劉姓王朝のなかにあつて呂氏小朝廷を組織して、いったん劉邦が世を去つたなら、篡政奪權をやろうとした。》

劉邦の死後、大權は呂雉の手中におちた。劉邦の功臣宿將は呂雉にとつて最大の障害であつたので劉邦の死を祕匿し、《劉邦の威望を利用して「諸將を誅し」、宮廷政變をやろうとした。》しかし、陳平、灌嬰、周勃が大軍を率いているので、政變を發動することができなかった。彼女は呂氏の家族を大量に起用して重要な職務につけた。呂祿、呂産に軍權を掌握させて、《太尉周勃を實權のないものとした。彼女は自分の子分の審食其をもつて、劉邦が手をうておいた丞相繼承人、劉邦路線を

勇敢にも堅持した王陵にとってかえた。陳平にたいしては、鶏を殺して猿のみせしめとするといったやりかたで、王陵をやめさせて陳平を恐れさせる一方、わずかな恩恵をあたえて、なかまにひっぱりこもうとし、陳平は怒りながらも反駁のことばがなかった。』

さらに呂雉は北方にあつて挑發する匈奴に卑屈な態度をとった。

《一系列の陰謀活動のなかで、呂雉の権力とはめどもなく膨脹し、さいごにはかつてに皇帝を廢立できるまでに達した。呂雉を核心とする王朝が、劉邦の旗をかかげて樹立された。》

呂雉の野心と陰謀活動にたいして、劉邦は生前から察知しており、呂雉の生んだ子、太子の劉盈を廢することを考えたし、呂雉の妹婿、樊噲を殺せと周勃に命令したこともあった。劉邦は、目的を達することができなかったが、「劉氏を安んずる者は、必らずや勃なり」と斷言した。《劉邦の豫言は實現した。》周勃らは、劉邦の遺願を遵守して、劉邦の老臣を連合し、一舉にして呂氏叛國陰謀集團を粉碎した。

《毛主席が華國鋒同志にたいして語った、臨終まじかの劉邦が呂后は必らず國に叛き權力を篡ろうとするであろうと見破つた物語は、「古を今の用となす」であつて、深い意味を寓している。》毛主席は、われわれに現代の呂后に警戒せよ、「修正主義がでるのを警戒せよ、とくに中央に修正主義がでるのを警戒せよ」とのべ、かつ古參の同志をはげまし、中央に修正主義がでたなら《周勃が漢の天下を安定したように》プロレタリア獨裁のためにたたかわなければならぬ、とのべている。

“四人組”は寡黨奪權の必要から、呂后というミイラをかつぎだし、反革命の世論をでっちあげた、かれらは呂后をほめそやし、江青は呂后をもちあげたばかりでなく、みづから呂后をもつて任じた。毛主席はそれを洞察していた。

“四人組”は呂雉よりも凶惡殘酷で危険である。今年（一九七六年）八、九月、毛主席の病氣が重くなると、劉邦の死後、「呂后はどのように諸侯・諸王をひとりづつ片付けたか」といい、その材料を集めるよう指示した。八月二十八日、彼女は小斬莊にゆき、「男は位を讓れ、女が管理する」、「女も皇帝になることができる。共產主義になつても女皇はあらわれる」、と叫

んだ。毛主席の逝去ののちは、梁效に、「劉邦の死後、呂后はいかに劉邦の既定方針にもとづいてやったか」、「劉邦の死後、かれの既定方針はどのように伝わったか」、「周勃はどのように呂后を支持したか」という論文をいそぎ執筆させた。

むすび——現代中國の歴史性

歴史は一回かぎりのものである。しかし、歴史上のある事件が、時代をへだてて、よく似たかたちで（あるいは、そっくり）ふたたび演じられるということもまた、めずらしいことではない。

呂后や武則天を讚美し、その讚美を一環として、呂后、武則天を再現しようとする、すなわち、女皇、共產主義の女皇たらんとする江青の活動は、挫折した。もはや、呂后や武則天が中國の政治舞臺に出現することも、しようとすることもないであろう。この歴史上の人物を讚美しつつ、じつは自分を呂后や武則天になぞらえるという人間も文章も、二度とあらわれることはないであろう。しかし、はたして、それた、二度とあらわれることはないであろうか。

われわれがすでに目撃した、江青の抬頭、そして傍若無人の態度、さらに、劇的というには劇的にすぎ、權力闘争というにはあまりにもあつけないその退場のこの一連の過程は、ことがらそのものとしては、事實以上の事實でもなければ、事實以下の事實でもない。フランス革命のさいの、皇帝や皇后が革命家の手によってギロチンにかかり、そして革命家の手によって革命家がギロチンにかかり、さらにはその革命家自身もギロチンにかかるという一連の過程が「愚劇」であるとすれば、これもまた「愚劇」である。そして、この「愚劇」が、伝えられるように、中國の民衆によって一九四九年新中國の成立による解放につぐ、「第二の解放」だといわれているのであるとすれば、「愚劇」はもはや「愚劇」であるにとどまらない。これを、「悲劇」とよぶか、「喜劇」とよぶか、それを決めるのは、その苦しみにおしひしがれてきた（あるいは、得意の日々をすごしてきた）中國の民衆（あるいは、當事者たち）であろう。われわれとしては、ただただ、瞠目し、歎息するほかはない。

それは、グロテスクなものであった。魯迅が一九一〇年代、二〇年代に指摘した、中國文明のグロテスクな側面が、あたかも巨鯨がごろりと寝返って、眞白な腹部をさらけだしたように、われわれの、一九七〇年代のわれわれのまゑにさらけだされたのである。しかし、そのグロテスクは、このとき（“四人組”逮捕のとき）はじめて、さらけだされたのであろうか。

わたしは、そうではないとおもうが、しかし、このとき（“四人組”逮捕のとき）から、中國觀測者に、いやおうなしの共通項が、事實以上でも以下でもない事實によつて設定されたのだとおもう。だが、それもまた、不幸なことであつた。ほんらい、議論、調査し、検討し、分析し、思索し、そして躊躇をくりかえしたあげくようやく提出されるべき議論によつて、ひとびとがさらに思考し判断する、そのような過程がまったく成立できなくなったからである。わたしは、江青が、もし、呂后や武則天を現代において再現したとすれば、大きな害毒を、中國ばかりでなく、關係諸國、諸地域に流したであろうと推測するが、しかし、それはまた、ひとびとに眞剣な思考と判断、さらには、態度決定をせまる過程をあたえることができたのではないかとおもう。いかとおもう。それはかえつて、將來の有益な教訓となつて残つたのではないかとおもう。どのような人間が、どのような文章や行爲をもつて、現代の呂后、武則天である江青を讚美するか、讀むこと、眺めることができたのではないかとおもう。しかし、江青は挫折した。——われわれとしては、その挫折によつて、思考や判断を停歩すべきではなく、その一連の過程の背後にはたらいっていたものを取りだす必要がある。そして、それを考えてみるべきであらう。

江青は呂后のように、また、武則天のように、成功することはできなかった。しかし、いくらか視角を變えれば、完全に呂后ほどではないにせよ、すでに呂后であつた。武則天であつた。われわれがすでにみたように、彼女が、毛澤東の晩年の數年間、あれほどの運動を推進し、あれほどの自畫自讃の文章を發表することができたということが、それを示している。彼女は、呂后であつたのである。

だがしかし、歴史上の呂后が絶對的でなかつたように、そして歴史上の事件をそっくり演じるかのよう、周勃に當る人物が出現して、江青を打倒した。呂后が現代において出現したばかりでなく、呂后を打倒した人物もまた、現代中國に出現した

のはなぜだろうか。

それは、本稿のはじめに指摘したように、現代中國における權力が皇帝型權力、宰相型權力、宦官型權力の組合せからなりとりわけ皇帝型權力にその最高の表現をみだしていたからであるとおもわれる。權力が宰相型として皇帝型である以上、その地位をねらう人間は、宰相型としての權力を獲得しようと考えるときに、皇帝となろうと望まなくてはならない。それは、野心、野望に燃えてそのように考えるというよりも、中國の廣大な版圖と芸々たる衆生としての民衆を考慮に入れるとき、この中國と民衆を統一したいというのが、中國の革命家、政治家の初心であるとともに、最後の目標であることからきている。統一のためには強力な權力が必要である。その權力を革命家、政治家が實現しようとすれば、さしあたっては、皇帝型權力しか考えられないという、民衆一般における政治的訓練の缺如の状態がある。皇帝型權力を不必要にするためにも、皇帝型權力をいっそう、ますます、強化しなければならないという自己矛盾が生じるのも、そのような政治的訓練の缺如の状態がよびよせるのである。そこで皇帝型權力は宰相型權力、さらには宦官型權力の補佐を必要とし、また逆に、皇帝型權力が存在することによって、宰相型權力、宦官型權力が発生するという構造ができる。そのような權力の型は、それを擔當する人間を固定化せざるをえない。そこで政治の固定化を惹起し、權力と民衆のきしみは、聖旨による討伐、あるいは、民衆の絶望的な叛亂というかたちをとるが、民衆の力が制壓されているばあい、上層部だけのクーデター、宮廷クーデターというかたちをとる。呂后と周勃の争いとその解決方法も、江青と華國鋒の對立とその解決方法も、いずれも宮廷クーデターであり、なぜそうなったかといえば、權力が皇帝型權力として設定されているということから規定されているのである。そこで、たまたま女性であった權力闘争のひとつの側が呂后をおもいうかべると、それを打倒する側は周勃をおもいうかべることになる。ほんらいそのような權力闘争を制止するはずの組織、中國共產黨が、このような状況にたいして政治組織としてまるで無力であるのはなぜかといえば、それは中國文明の特質である官僚制のパターンのくりかえしとして、〈率いられるものの集團〉でしかないからである。このことも本稿のはじめにおいてのべたから、ここではくりかえさない。すなわち、權力の質、官僚の質が、

皇帝の夢、女皇の夢を生むのである。

だが、すでにわれわれがみた、女皇の夢についていえば、もしも宦官型權力が存在しなかったとすれば、あるいは、事態はいま少し異っていたかもしれない。

黨内序列による順序でいえば、王洪文、張春橋、江青、姚文元の四人は、中國の權力の全面的な掌握をめざしていた。しかし、その前途にたちはだかつていたのが、毛澤東であった。もともと、毛澤東の拔擢をうけ、その權力の一部を分與され、威勢ならぶもののなかった四人である。毛澤東の死後は、かれらが最高權力者としてふるまうことができる——皇帝型權力の枠組みのなかに、自分（江青）、自分たちをほめこむことができる、と考えたとしても不思議ではない。しかし、自分を皇帝型權力にふさわしい存在にするためには、自分に權威がなければならぬ。毛澤東思想のもっとも忠實な實踐者としてふるまい、分與された權力を實際にも行使して、「批林批孔」運動などの社會運動をおこなうことは、權威を樹立するための有力な手段であった。

その運動のなかで執筆され、發表された文章が傳達していた意味は、眞理が運動の發動者の側にあり、したがってこれに反對するものは、批判され、彈壓、鎮壓されることにほかならない。讀者がそれらの文章から読みとったのは、孔子がいかに反動思想家であり、反動政治家であったかという字面の意味だけではなかったのである。江青を支持せよ、〈文革派〉を支持せよ、そうでない……という恫喝をうけとったのであった。もし、これらの論文を、「五四」いらいからの孔子批判のつづきだとのみ読みとっていたとすれば、哲學史家、馮友蘭が、「批判批孔」の開始されたとき、あのような不安と恐怖におそれるはずはない。馮友蘭は、孔子批判がはじまったとき、こう感じたといっている。《わたしの氣持ちは緊張した。わたしは思った。まずいことになった。〔中略〕わたしは、またぞろ革命の對象になるぞ。》

だが、これらの文章は、讀者を豫想していたとしても、その讀者とは、一般民衆、知識人や黨・國家の高級官僚、軍人といった範囲にかぎられていたであろうか。《呂后をもつて江青を隱喩する》文章を發表したのは、鮮明な現實感があり、「讀者

に、江青は唯一、傑出した正しい路線の繼承者であることを暗示」できるばかりでなく、歴史をもって掩護とするから、他人は容易にあげあしをとられることができず、いったん事が露見しても、一目散に逃げる⁽⁸⁰⁾ことができるからであつたといわれるが、そのばあい、かれらが、『一目散に逃げる』のは、なにかから逃げるというのであつたろうか。わたしには、毛澤東から逃げる以外のことは考えられないのである。「四人組」は世論を醸成するのに努力したといわれるが、その世論のなかには、毛澤東の判断も含まれていたとおもわれる。呂后が、法家指導集團を組織して劉邦の死後漢を維持したかという論旨は、ほかの誰でもなく、毛澤東に読ませるためのものであつた。少なくとも一般の讀者には、これを毛澤東か読んでいると考えることによって、毛澤東も同意しているのであらうと想像させる効果はあつたが、しかし、その程度にとどまらず、毛澤東に、一般讀者もこれを読み、これに共感しているとおもわせる効果をも期待していたにちがいないとおもわれる。讀者のなかの讀者として、毛澤東を置くことによって、『文革派』がなぜこれほどの精力を傾けて、文章を濫發したかが解ける。かれらは、毛澤東の決意をうながしていたのである。そして、毛澤東は、そのように、これらの文章を読んだはずである。毛澤東は、「江青には野心がある」と語つた(一九七四年十一月)。皇帝型權力の奪取、もしくは確立をめざす人間は、大衆動員力があれば文革型(紅衛兵の大衆的動員)を志向するが、それがなければ少數の實力裝置による宮廷クーデターを志向する。しかし、七〇年代にはいった『文革派』の「四人組」には、そのいづれの力も備わっていなかった。したがつてかれらは、文革開始のとき、姚文元の文藝作品批判の論文から運動の突破口をひらいた毛澤東の故智に學んで、歴史上の問題を題目として論文を發表する途をえらんだ。それによって、一般讀者には恫喝を、讀者のなかの讀者には、自己推薦と阿諛をおしつけたわけである。だが、われわれは、江青が挫折した場所から少し時間をずらせるなら、呂后や武則天は、毛澤東を安心させる歴史上の暗喩でありえないことを發見するであらう。

宦官型權力というのは、外部にたいしては權力者としてふるまい、權威をもつて臨むが、その背後(もしくは頭上)の皇帝型權力の枠組みの統制下におかれているうえ、自己の政策も豫見もたないという點では、宰相型權力よりもいっそう不憫で

ある。「四人組」のばあい、言論機關が唯一の武器であった。かれらにとっては、「鐵砲から政權が生まれる」ではなく、「ペンから政權が生まれる」であった。しかし、そのペンは、皇帝型權力のひとつの特質である皇帝の「恣意」によって、ふりまわされざるをえない。かれらは、文章の表現を最大限に嚴格、莊重にし、金科玉條の引用をおこなうが、いったん皇帝の「恣意」が異方向を指向すると、慘憺たるものとなる。のちにのべるように、自分の書いた文章を自分で裏切ることになるのである。しかしそうした「自己轉向」にすがってでも、その權威を維持しないかぎり、宦官型權力としては破滅せざるをえないから、かれらはやはり「自己轉向」の文章を執筆する。

皇帝型權力と宰相型權力と宦官型權力という枠組みがあり、それらの組合せがつづくかぎり、皇帝、女皇を夢みる人間が、（必らず出現するとは斷言できないとしても）出現したとしても、それは怪しむに足りない。さらにいえば、中國の王朝の興亡とそこに沈浮した人間を描寫した史書が中國において讀まれるかぎり、皇帝や女皇は、むしろ歴史によびおこされるようにして、永い眠りから眼覺め、起きあがり、現代に息づくであろう。もともと、「毛澤東時代」とは、歴史と現代の共感的な交流をもった人間、毛澤東が存在したことによって、ひとつの時代として出現したものであった。

しかしながら、このような枠組みとその組みあわせからの判斷は、それが起る可能性があるというのみであり、わたしとしても必らず起るとも、いつ起るとも斷定しようとするものではない。なぜなら、ことがらのある局面においては、當事者である人間の意志、決斷がつぎの局面を展開するきっかけになるが、そのような意志や決斷を、他人があらかじめ豫測することとは不可能だからである。とりわけ、大衆的なデモやストライキによってではなく、宮廷クーデターによって政權が交替するのが、いわば一種のルールになっているような政治的風土における變化は、外部の人間には事前の豫測はもとより、事後の追跡的把握も困難であるのが實情であろう。

現代中國における歴史性——を、わたしは以上のように考え、以上のように指摘するものであるが、なお、現實に生起した

「呂后—江青」の暗喩に即していくつかの條件を考えてみたい。

一九三〇年代の上海で、藍蘋という藝名の映畫女優であった女性にとって、呂后や武則天のような、映畫、演劇のかっこうの題材となる人物は、それほど疎遠な存在ではなかったであろう。女優になるほどの人間なら、あれこそ自分にふさわしい役柄だ、あれこそ演じたい役柄だと、映畫や演劇ですでに誰かが演じた役を、あれこれとおもいかべるはずである。さらにはまだ映畫化も舞臺化もされていない小説を読みながら、あるいは新聞記事を読みながら、作中人物や事件の渦中の人間にひかれるということもあるはずである。そして、歴史（あるいは歴史における物語）が身近かで、その熟知の人物の熟知の運命のほうが、未知の人物や世界をみせる近代小説よりも、はるかに民衆に興味をひきおこす中國において、歴史上のあれこれの人物が腦裏にうかんだとしても、それほど誇大妄想というわけではない。現代に生きる女優が、紀元前三世紀の呂后、紀元七世紀後半から八世紀はじめの武則天を演じたいと熱望したとしても、それは十分に理解できることである。かりに、クレオパトラを演じたいと口走ったところで、奇矯ではない。だが、それは必らず、主役でなければならぬのである。

ただ、この、もと女優のばあい、女優時代におもいかべなかったでもない（であろう）自分の役どころを、女優をやめてから何十年かたって、現實のなかで、主役として、演じようとした、そこに、いまとなつては錯覺としかいいようのない、配役上の錯誤があった、ということになる。

しかしながら、錯覺が彼女じしんがつくりだしたもので、彼女が責を負うべきだとしても、配役上の錯誤は、はたしてひとり彼女の責任であらうか。「毛澤東時代」において、このもと女優が、それほどまちがった配役ばかりをわりあてられてきたというわけではないのである。とくに、「IV 文化大革命」期における實際活動は、そのわりあてられた役柄にふさわしい演技をもつてつらぬかれている。

一九六六年八月、紅衛兵がはじめて出現したが、その紅衛兵を毛澤東が檢閲する集會の第一回、八月十八日午前五時に開會

を宣言したのは、中央文革小組第一副組長の江青であった。彼女は合計八回にわたる檢閲集會（總計一千百萬人の紅衛兵が檢閲をうけた）のうち一回を除いて、すべて參加した。毛澤東の出席しない紅衛兵の集會、軍民集會にでかけていって演説をおこなった。六六年十月からは、人民解放軍の文革小組の顧問となった。彼女は毛澤東の夫人であって、文革小組の重要人物（組長はいちおうは陳伯達であったが、陳伯達も、總理の周恩來も、集會で、「江青同志に學べ！ 江青同志に敬意をささげよう！」とスローガンを叫んだ⁽⁸¹⁾）としての役柄を、その役柄にふさわしく演じたのである。大衆集會の演説ばかりではなく、一般民衆の眼にふれないところで、實力裝置としての紅衛兵を、おもугまままにあやつて、黨の高級幹部や大學教授、藝術家などを逮捕し、「牛鬼蛇神」としてさらしものにしたのも、彼女であった。清華大學の構内をうめつくした紅衛兵が、劉少奇夫人、王光美に、わざわざインドネシア訪問のさいの洋服を着せ、ハイヒールの靴をはかせ、裝身具をつけさせて寫眞にとった行爲⁽⁸²⁾、陳毅夫人、張茜をひきたてて、街頭をおいたて、衆人環視の的とした行爲、これらも彼女の指揮によるものであった。表面にたつばあいも、背後にあるばあいも、彼女は果斷な指導者の演技を、申し分なくやってのけたのである。はじめ、その演技に酔ったのは、人格的に未成熟な少年少女であったが、やがて、れっきとした黨の指導者、知識人までが「四人組」の支配下にはいり、彼女の演技に拍手をおくり、スローガンを叫ぶようになった。かん高く、長くひっぱる聲の調子をまねて、彼女の指示を傳達する人間もあらわれるようになった。演説のさいの聲の抑揚や聲色、しぐさ、といった指導者の演技が傳染する社會、時代、集團は、すなわち、「走狗」が発生し、それが昇進する社會、時代、集團であることはいうまでもないが、それは反面、彼女が無能な大根役者として、ただ舞臺につただっていたのではないという證明にはかならない。文革の最高潮期ともいえる一九六七年五月、『文藝講話』發表二十五週年記念にあたって、彼女にたいし、毛澤東以上とさえおもわれる賞讃と權威づけがおこなわれたことは、その演技にふさわしい褒賞であり、またさらに、演技をつづけることのできる舞臺を設定したこともあった⁽⁸³⁾。

この五月、毛澤東の『文藝講話』が新聞に再掲載され、文藝問題にかんする五つの文獻（一九四四年から六四年までのあい

だに出された手紙、指示で従来未公表のもの」が新らしく發表されたのは、當然といえば當然であるが、毛澤東のそれらの文獻と綾なすようにして、江青の「京劇革命を語る」、「林彪同志の委託によって江青同志が召集した、部隊の文學・藝術活動についての座談會の記録要綱」が、いずれもはじめて公表になった。新聞掲載のさいの扱いは、まったく毛澤東と同一であって、掲載號の『人民日報』という題字、論文の表題、論文表題と本文をかこむ枠の線はいずれも赤インキで印刷されていた。

さらにこの月、「革命模範劇」「革命模範戲」という名稱が新しくあらわれ、この名稱のもとに八つのレパートリ、京劇による現代劇「智をもって威虎山をとる」、「海港」、「紅燈記」、「沙家浜」、「白虎連隊を奇襲する」、バレエ「白毛女」、「赤色娘子軍」、交響曲「沙家浜」が同時に上演された。これらはいずれも江青が手がけたものであって、江青以外のだれの作品もこの「革命模範劇」として指定されたものではなく、作品の上演と前後して發表された評論はいずれも江青の指導を賞讃した。文革によってはじめて大衆のまえに、公的な人間としてすがたをあらわし、かつ權威をもってふるまった彼女は、この一九六七年五月、毛澤東の文藝路線の正統的な後繼者として輝やかしい榮光につつまれたのである。文化大革命である以上、この「革命模範劇」というこれらの作品は、まさしく文革の正統的な成果であり、したがって、あたかもこれらの作品を生みだすために、文革がおこなわれたと主張しているのではないかとおもわれたのである。再掲載された『文藝講話』も、新發表の毛澤東の文獻も見方をすこしずらすなら、それは江青をひきたたせるためであったといえる。一九六七年五月の一カ月間の『人民日報』の綴りこみをめくるものは、だれしもがこの『文藝講話』發表二十五週年記念の主役は、毛澤東ではなく江青であると感ずるであろう。あるいは、襲名披露のさいの新舊の名題役者がはれがましく舞臺で口上をのべているような雰囲気を感じるであろう。かに江青が主役ではないとしても、しかし、文藝問題においては、最高權威であつてよいと、毛澤東が承認しているという、連日の紙面構成であつた。ここから、政治における最高權威としての自己顯示には、ほんのひとまたぎである。「四人組」が逮捕されたあと、江青にたいしては、「文革の功臣」をもってみずから任じたという非難がくわえられているが、たしかにわれわれがすでにみたように、文革の發動は毛澤東があつてはじめて可能であつたが、しかし、彼女は文革の現場に顔をださな

かったというのでも、顔はだしたがなにもなかったというのではないのである。そして、「〈文革派〉對〈脫文革派〉の抗争」期における社會運動、「批林批孔」運動の展開にあたつては、この運動を統括するために設けられた、中央「批林批孔」運動辦公室の「主任」となった。⁽⁸⁴⁾ この辦公室は、文革のさいの中央文革小組に相當する。文革小組が黨組織を超越し、黨組織を破壊することもやったことを想起するなら、この中央「批林批孔」運動辦公室的政治的重要性度はあきらかであろう。江青が、呂后、武則天を夢みる現實的な根據は、十分にあったといわなければならない。

もと、女優であつたことは、彼女に呂后、武則天という役柄をおもいつかせ、また、主役でありたいという願望をいだかせたであろうし、そのようなおもいつきと願望にふさわしい舞臺が、現實に彼女のために準備されたことはすでにみたとおりである。もちろん、女優であることが、ただちに女皇の夢を生むことではない。そこには、生いたちが、生いたちによつて養成された性格、人生に對處する態度といったものが、はたらいているであらう。

江青がアメリカの中國婦人運動の研究家、ロクサーヌ・ウィトケに語つたところと、「四人組」逮捕以後、中國で報告されているところとは、異なる箇所がある。たとえば、江青が語つたところでは、父親は貧しい大工で、世をひがみ、しばしば母親に暴力をふるつたので、あるとき彼女はそれをとめようとして前齒をおられたというが、⁽⁸⁵⁾ 中國の調査報告は、彼女の父親は縣城に十四の部屋をもつ旅館と、六つの部屋を作業場としてもつ木工店（大工といえる）を兼業し、のちにはそれを賣りはらつて、百二十畝[↑]の土地を買い小作にだす地主となつたといふ。⁽⁸⁶⁾

しかし、調査報告は彼女が語つた、母親が彼女をつれて家出し、女中になるなどしてはたらいて彼女を育てたが、彼女が十二、三歳になったとき、母親ははたらくことができなくなり、自活の道をもとめた彼女は、寄宿舎にはいることができる（食費、住居費がいらない）、濟南の演劇學校にすすんだという時期についてはふれてない。それはかえつて、この彼女の口述は事實であることを物語っているようにおもわれる。とすれば、彼女は、貧しさを知っており、自分ひとりの力で生きていかなければならない少女が、どのような困難と偏見にであうかを身にしみて味つたのだということになる。そのあげくのはてが、

主役になりたいと望むのが職業柄ともいべき女優の生活であり、それも十分につらぬくことができず、はなやかであった映画女優としては、約四年ほどしか事實上の女優生活がなかったという不運である。そのようなもと、女優が抱いた女皇の夢であった。そして、そのようなもと、女優にあたえられた、現實の主役、現實の政治的舞臺であった。呂后、武則天の夢に、一種陰惨なかげりがあったとしても、それはやむをえないことであろう。

しかしながら、そのような、嵐の海にただよう小舟のような環境にあって、とりわけ少女のとき、はやくもひとつの道をえらび、その道にすすんだということは、人生の不運に敢然として立ちむかう勇氣があったこと、向上心があったことのあらわれであろう。そのような勇氣と向上心は、逆境を通りすぎて順境におかれるとき、かえって無限に膨脹するとおもわれる。向上心と虚榮心の境界はさだかでなくなる。その個人に即して性格を分析するとすれば、以上のような推測がなりたつとしても、世間一般には、眼前の完成したがたしかみえないのであるから、人間の類型のひとつとしてうけとられることになる。すなわち、中國の民衆には、中國の婦人の、ひとつの類型、「潑婦」として、江青がみえることになるのである。

「潑婦」というのは、中國の實生活に存在し、實生活で口にされる婦人のひとつのタイプである。

漢和辭典では、これに、毒婦、惡婦、悍婦という譯をあてる。あばずれ女、ということである。中國出版の現代語辭典の説明では、ゴリ押しを押しとおし、道理をわきまえぬ婦人、日本出版の現代中國語辭典では、きつい女、きかない女、となっている。要するに、きつい女、きかない女からあばずれ女までの概念に對應するような女性は、すべて「潑婦」の類型にくくられるのである。

「潑婦」は、文學作品にも登場する。『紅樓夢』でいえば、貴族・賈家（榮國府）の當主・賈璉の正妻、王熙鳳が、そうである。また、賈璉の妾、尤二姐の妹、尤三姐がそうである。『水滸傳』でいえば、和尚と密通して夫の楊雄に斬りさいなまれる潘巧雲がそうである。楊雄はうたたねしていて、寢言で、「腌臢潑婦」と妻をののしる。「腌臢」^{アンツァン・ポイフー}、きたならしい、の限定がつくところからすれば、「潑婦」は必ずしも不潔ではない。さらに、現代文學の例でいえば、李英儒の長篇小説『野火と春風

は古城にたたかう』の開巻第一に登城する女性、金環がそうである。彼女は、「潑婦」とまではいわれていないが、性格が「潑辣」^{ポラ}であるとして描寫されている。「潑辣」な性格をもつ女性は、つまるところ「潑婦」にほかならない。そして、魯迅の雜文、「阿金」に書かれている、かれが上海で住んだアパート（いま、「魯迅故居」として保存されている）の向い側の、これも同じような形式のアパートのひとつに雇われている江北人の女中、阿金がそうである。彼女には男友だちがあり、その男友だちをめぐってか、大通りの向う側の煙草屋の年とった女と、口汚く罵りあったことがある。「潑婦、街に罵る」。魯迅は、その短篇、「采薇」に、首陽山にかくれて薇ばかりたべている伯夷と叔齊のところへでかけていって、「『普天のもと、王土に非ざるはなし。』おふたりの食べている薇も、われわれ聖上陛下のものではありませんか」と問いつめ、とうとう餓死させた女を、阿金姐^{ねえさん}とよばれる女中にしたてている。ジャック・ベルデンの『中國は世界をゆるがす』の「婦人の反抗」の章の、いきいきした女主人公、金華もまた、「潑婦」といえよう。

江青というひとは、中國の婦人の類型としては「潑婦」に屬するというのが、わたしのかねてからの考えであった。それで、わたしは一九六七年十月、「阿金考」と題する文章を草して、當時、中國語の表現でいえば飛揚拔扈していた江青、毛澤東夫人にひそかに獻じたことがある。そのなかで、以上のような「潑婦」の事例について論じ、つぎのように指摘しておいた。

《それは、ピラミッドの底邊では、市井の平凡な女であるが、頂上では、皇后、皇太后である。つまり夫の愛姫の手足をきって厠^{かわや}においた呂后や、夫を殺して新しい王朝を建てた則天武后や、息子の愛妃を井戸に投じた西太后や、これら權力をにぎった女として出現するのである。》

さらに、つぎのように魯迅のことばを引用し、わたしのささやかな願望を託した。

《最近いつごろからか、わたしがもつとも阿金を嫌うようになったのが、彼女がわたしの一筋の道に立ちふさがるように感じたことによるのは、たしかである。》

願わくば、阿金が、中國の女性の標本でないことを。⁽⁸⁷⁾

江青は「潑婦」にほかならなかった。

一九七七年一月に發表された“四人組”批判の論文は、一九七六年三月に主宰した十二の省・自治區の會議の席上、《江青はまるで潑婦ばりに大いに中央の指導的同志を罵り、その反動的な氣焰は極點にまであげられたのである》⁽⁸⁸⁾とのべている。

「潑婦」は街に罵るものである。《まるで潑婦ばりに大いに……罵》ったと指摘しているのは、その人間は「潑婦」だといっているのと同じである。

また、羅思鼎論文について、ある批判論文は、これは、《江青の例の、潑婦、街に罵るといった、山の神^{やまのかみ}の腕前を發揮した》ものだ、といっている⁽⁸⁹⁾。

彼女の性格が、その個人に屬する性格であるこというまでもないとしても、人間類型としては、民衆のなかによくあるタイプであり、それは權力構造のピラミッドの底邊にも頂上にも存在するものである。したがって、權力構造のなかにはいりこむと、個人の意志力では制御できない、人間類型そのものとしての行動へと發展する。舞臺はもはや、夫と暮す家庭でもなければ、歩いていける隣近所の範圍にとどまらない。「潑婦」として大いに罵るとき、それは街においてではなく、全國的な會議の席上においてであり、罵る相手は、大通りの向う側の煙草屋のおかみではなく、中國共產黨の革命經歷のながい古參の同志とならざるをえない。それは、政治的な行爲とならざるをえないのである。

だが、それにしても、呂后、武則天を自己宣傳するためには、ひとつの雰圍氣がなければならなかった。土壤がなければならなかった。その雰圍氣、土壤とは、歴史を論じるのでも、歴史を研究するのでもよい、歴史が現代においてかえりみられる對象とされるとき、角度、史觀、論調が形成するものであるが、それを形成するうえで力あったのは、このばあい、帝王史觀というべきものであった。

黎澍は、“四人組”の手先ぎとして、梁效、羅思鼎が執筆した歴史論文には、帝王思想があふれていた、という。

《梁效、羅思鼎といった連中は、あろうことか、ためらいもなく江青の保皇黨となり、呂后を頌め歌うことをもって、

彼女にたいし、すすんで媚をささげ、肩をすくめて追従の笑みをうかべ、さらには歴史學ぜんたいをブルジョア階級のプラグマチズムへとひっぱっていった。すでに腐敗して惡臭をはなっている帝王思想は、かれらの龍や鳳凰にお世辭をたてまつってひきたててもらう反革命宣傳によって、大々的に氾濫した。秦の始皇、漢の高祖、唐の太宗、武則天から康熙、乾隆皇帝にいたるまで、大群の封建的支配者はいずれも法家のレッテルを頭に戴き、無條件に頌揚された。このいわゆる儒法鬭爭史を研究せよというペテンは、中國の歴史學にたいする空前未曾有の大破壊であり、觀念論形而上學はさかなくなり、プラグマチズムがすべてにとつてかわつた。⁽⁹⁰⁾」

引用したところにもみえてゐるが、黎澍は、そのような論文を執筆した學者にたいしても批判をくわえ、それらの學者は、歴史學を「四人組」の篡奪權の陰謀の道具にかえ、みずからマルクス主義者をもつて封じ、「唯我獨革」のはぶりであつたといつてゐる。論文の趣旨が、「儒法鬭爭に學べ」運動における歴史學のゆがみをただすところにある以上、筆鋒に尖鋭さがみられるのもやむをえないことであるかもしれない。たしかに一群の有名無名の學者が、「龍や鳳凰にお世辭をたてまつってひきたててもらふ」、攀龍附鳳の文章を書いたことは否定できない事實である。それが、だれだれであるか、大學の同僚や同じ研究分野であるものには、明々白々であるのだらう。黎澍のいう「すでに腐敗して惡臭を放っている帝王思想」も、これらの學者や研究者が、二年以上にもわたつてつぎつぎに執筆し、掲載し、轉載したから、「氾濫」したのである。

それでは、これらの學者や研究者は、執筆を拒否すべきであつたのだろうか。

黎澍の批判論文ははつきりとはのべていないが、積極的に執筆した人間と、消極的に執筆した人間が區別されて論じられるべきであるのはいうまでもない。また、論文だけを執筆したのか、「四人組」の密議陰謀にくわつたり、煽動したり、密告したり、江青あての慰問の手紙を書いたりなどの政治活動をおこなつたかも區別されるべきであらう。そして、げんに「四人組」に反抗して迫害された人間がいけないわけではないから、論文の執筆を拒否することは、できないことではなかつた。しかし、現場にいなかった人間が、現場にいた人間を裁くことはできないはずである。それはその個人の問題である。それよりも

わたしは、執筆を拒否することを不可能にした要因が「帝王思想」にあったことが、むしろ重要であったと考える。

「帝王思想」というのは、黎澍は歴史學の論文がしきりに帝王をとりあげた、その考えかたをさしていつているが、そのような論文は、史觀としては「帝王史觀」ということになる。それは廣義の「英雄思想」であり、「英雄史觀」である。じじつ、張良や少正卯など、帝王ではなかった人間が、法家の英雄として賞讃されている。そして、この「英雄史觀」は、新中國の歴史學において、ひとつの主流をなしてきたものである。「英雄史觀」がまず肯定されていた基礎のうえに、法家の英雄がとりあげられたのであり、その英雄のなかに法家の帝王が含まれていたのである。それが、江青によって、さらに呂后、武則天に集約されたのにすぎない。歴史研究のひとつの主流として、ここまでたどりついたのであるから、そのような流れを肯定してきた歴史學者、歴史研究者が、帝王讚美の論文を執筆するにあたっての内心の抵抗はほとんどなかったのではないだろうか。残っていたのは、どの帝王を賞讃するか、ということではない。さらには、その賞讃さるべき帝王も固定化しているから、どのように賞讃するか、という問題しかそこにはなかったものとおもわれる。たまたま、持論、學説がその方向を指向していたか、持論、學説は一致せずともその領域の蓄積があった學者にとっては、むしろ千載一遇の持論、學説を發揮し、蓄積を展開する機會であつたにちがいない。しかも、その機會を提供するのは、中國においては正統、絶對的な權力につながる「四人組」であり、江青である。原稿料ばかりでなく、講演旅行、海外へ代表團として派遣されるなどの特權と待遇は、必ずしもそれを喜ぶというのではなく、反對、不服従から、修正主義、右派といったレッテルを貼られて、白眼視されるのはまだしも、監視され、行動の制限をうけることがなくなるといふことにおいて、なににもまさる報酬であつたとおもわれる。しかも、歴史研究における「英雄史觀」の氾濫は社會的な「英雄思想」の氾濫と照應しており、社會的にも善であり、是である」とみとめられていたのである。

社會的な「英雄思想」というときの「英雄」とは、人民英雄、たとえば、「四人組」が逮捕されたあとにも展開された「雷鋒に學べ」運動の雷鋒のごとき人物である。⁽⁹⁾ 解放軍の兵士である雷鋒は毛澤東思想を學習し、實踐するうえで、中國でもつと

も喧傳けんでんされている人物である。かれは、子供を自動車事故から救おうとして事故死した。一九六二年に、毛澤東が題詞「雷鋒に學べ」揮毫し、全國的な運動として展開された。當時、わたしはかれの肖像寫眞、軍隊におけるスナップがあまりに鮮明美麗なので、豫測できないはずの事故死をとげた人間に、宣傳にあつらえむきの寫眞があることに不審をいだいたが、かれの經歷を知ってそれは氷解した。生前から、かれは毛澤東思想の學習模範としてたびたび表彰されており、新聞社からわざわざ寫眞撮影にすることがよくあったのである。そしてこのような英雄は、雷鋒ひとりではない。社會的運動のたびごとに、それぞれの地域、職場で、英雄が表彰されており、その人間に英雄の稱號があたえられている。

雷鋒はもとより、それぞれの人民英雄の信條や行爲についてはしばらくおき、なぜそのような英雄が出現するのかといえ、それは、そのような人間を表彰することによって、ひとびとをその人間に感動させ、社會的な教育効果をあげようとするからであろう。その本人は表彰されようとして行爲するわけではないが、宣傳機關がそれを取りあげる意圖は、社會的な教育効果以外のなものでもない。そしてそれは、本人にとって物質的刺戟によらない報酬でもある。

このような「英雄思想」からただちに「英雄史觀」が生まれるとはかぎらず、「英雄史觀」が生まれたとしても、ただちにそれが「帝王史觀」にゆきつくとはかぎらないが、しかし、こんにちから過去をふりかえるなら、しだいに上昇し集約される社會的な脈絡というものが、そこにある。

だが、ただそれだけではなく、上昇し、集約される過程において、論理がしだいに尖鋭化し、打撃的になったということも、注目されよう。

文革の開始にあたって、紅衛兵は、舊い世界にたいして、宣戰した。《ぼくらは生まれついでの造反者であり、封建主義、ブルジョア階級の舊い思想、舊い文化、舊い習慣に造反をあえてし、これらのでたらめなものに統治されないようにしなければならぬ》⁽⁹⁾。

すなわち、「四舊」の打破である。ところで、プロレタリア階級の「四新」以前には、「四舊」しかありえないから、これは

「一切の過去と絶縁する」ことにほかならない。道德の面でも、封建道德のなかの若干の徳目は、これを抽象的形式と考え、現代にも活用できると主張した學説は批判され、《プロレタリア階級の共産主義道德は、一切の搾取階級の道德とは根本的に對立するものである》⁽⁹³⁾と主張された。文學藝術においても、一切の古典文學、外國文學を否定し、これと絶縁する風潮がさかんであった。張春橋は、『インターナショナル』から革命模範劇までのあいだ、百餘年間は空白だった』と語ったというが、それはおそらく批判者が捏造したものではないであろう。マルクス主義の立場からすれば、たとえブルジョア階級に属する文藝作品でも、ブルジョア階級の發生上昇期のものは、いちおう進歩性をみとめるのが通説であつたが、《文革派》の論理は、すべてをブルジョア階級にいれ、そして、ブルジョア階級を帝國主義にいれるのである。

《西洋の古典文藝をどのように正しく認識するかの問題を解決しなければならない。いわゆるルネッサンス、啓蒙運動、批判的リアリズムはすべてブルジョア階級の古典文藝といえる。史的唯物論の觀點から問題をみるなら、帝國主義、社會帝國主義が資本主義發展の最高段階であるのと同じように、ブルジョア階級のモダニズム文藝は、ブルジョア階級の文藝が滅亡にむかう最後の段階にあるのである。だが、長期にわたつて、國內外の修正主義者はブルジョア階級の古典文藝とブルジョア階級のモダニズム文藝を對立させ、あたかも古典文藝はブルジョア階級の文藝ではなく、これ以上すぐれたものはない「全人民の文藝」であり、評判がわるいのはモダニズムがもたらしたのだというかのようであつた。これは欺瞞である。ブルジョア階級の古典文藝とモダニズム文藝は藝術形式上は若干の區別があつて、前者はわれわれに一定の借鑒^{かがみ}をしての役割を果すが、後者はいささかもとるべきところはない。だがその階級の本質からみれば兩者は完全に一致するのであつて、後者は前者の悪性の發展であり、ブルジョア階級の二十世紀における、すなわち帝國主義とプロレタリア革命の時代における、避けることのできない政治、經濟危機の必然的結果である。》

《プロレタリア階級の政權獲得後、ひきつづき社會主義革命をすすめる過程における重要な任務は、必らず徹底的に、

一切のブルジョア反動思想體系を批判し、徹底的に、一切の搾取階級、搾取制度に奉仕する思想體系を批判することであつて、ブルジョア階級の文藝を模範としたり、「目標」としたりしてはならない。そのようなことをするのは、資本主義制度を復辟することである。⁽⁹⁴⁾

以上のような主張や理論は、「一切の舊いものとの絶縁」、「一切の古典文學と外國文學にたいする徹底的な批判と決裂」とまとめることができる。さらに大衆運動の熱氣のなかで、さらに集約され、「一切の絶縁」、「徹底的な批判」、「徹底的な決裂」という論理へと尖鋭化していったのは否定できず、そうであつたから、「四人組」が逮捕されるやいなやこれは「徹底的批判論」と名づけられ、批判されるにいたつたのである。⁽⁹⁵⁾これはまったく當然なことであつた。

だが、なお冷静に考えてみれば、そこに發生した事情は、「まったく當然なこと」ではなく、まったく奇怪なことである。

「一切の舊いものとの絶縁」、「古典文學と外國文學」、すなわち、「傳統と外來文化にたいする徹底的な批判、徹底的な決裂」主張のあとに發生したのが、「儒法鬭争に學べ」、呂后、武則天を賞讃し、これに拜跪せよ、すなわち、「傳統にかえれ」という主張であつた。そして、まえの主張者が、政治的に打倒されたわけでも、生理的に消滅したのでもなく、同じ「文革派」が、ふたたびあとの主張者であつた。まえの主張を、「絶縁と決裂の論理」と名づけるとするなら、あとの主張は「復縁と受容の論理」と名づけられよう。《絶縁と決裂の論理》から、《復縁と受容の論理》への轉換は、方向の修正などというものではなく、まったくの逆である。なるほど後者は、法家にかぎって適用され、儒家には適用されないが、しかし、それ以前の主張は、つねに、「一切」、「徹底的」と形容しておこなわれていたことから考えれば、やはりこれは論理の轉換である。だが、このような論理の轉換は、もともと、はじまりの論理において準備されていたといえる。《絶縁と決裂の論理》は、その論理そのものからは、なにも生まれない性質のものである。ひらたくいえば喧嘩わかれの論理である。對立物を失つたあとに残るのは、矛盾の片側だけであつて、ここにはなんらの運動はありえない。すなわち、唯一、絶對的な自己しかそこにはありえない。

《文革派》が、どのような政治活動や言論を展開したかはしばらくおき、自己の提起する論理をここまで唯一化、絶對化し

たとき、奇妙なことではあるが、かれらは、もはや、そのような自己の論理をも無視することのできる、無論理の境地に到達したことになった。もはや、いかなる對立者の論理も無視できる以上、自己の論理を轉換したとしても、これを批判するものはありえないからである。(そして、事實そうであった。『四人組』が逮捕されるまで、中國の新聞、雑誌に、その『絶縁と決裂の論理』を批判する意見がでたことはない。)

『四人組』、あるいは『文革派』が、つぎつぎに社會運動を展開したことは、その是非善惡、具體的な個別問題にたいする收穫をべつとして、その運動のなかで、しだいにその主張を尖鋭化し、主張の骨格とでもいうべき論理を純粹化してきたことであつた。純粹化ということは、このばあい全面否定の論理となつたことであり、したがって自己完結的なものとなつたことである。なにかを生産する論理に鍛えあげたというのではなく、なにも生産できない、自縛自縛の窮地へ自己をおいこんだことである。それは、さらに新しい社會運動を發動するさまたげになるのである。ところで、このような論理は、もともと權力闘争に奉仕するために純粹化されてきたのであるから、新しい社會運動を發動できないことは、論理の效用上からは致命的である、といわなければならない。

そこで、權力は、このあまりにも純粹化された論理をしばらく棚あげにし、これを論じないことにし、代替の論理をもちださないわけにはいかなくなる。『絶縁と決裂の論理』のあと『復縁と受容の論理』をもちだしたのがそれである。しかし、純粹化された論理を否定するのではないから、いわば、「但し書き」として、論理の純粹度をうすめ、値引きして提起するといふことにほかならない。⁽⁹⁶⁾そして實際面においては、無論理となる。權力と權力に近い「走狗」は、その純粹、唯一、絶對的論理によって反對者を恫喝しつゝ、純粹度をうすめた論理を慈愛ぶかく投げあたえ、さらに反面では、無論理な、特權的な待遇の供給そのほかによって、その論理にたいする同意をかちとるのである。⁽⁹⁷⁾じつさい、『絶縁と決裂の論理』のもとでは、梁效や羅思鼎といった、中國の古典にくわしい學者、研究者を組織することは、とうてい不可能であつたろう。論理そのものの次元でいえば、論理、およびその解釋權は、權力そのものに歸屬し、權力によって左右されるものであり、論理がそのようにと

りあつかわれているとき、権力はもつとも権力的で、しかもゆきづまっているということである。

以上のように考えてきたわれわれは、権力の枠組み、政治組織の様態、歴史観、社會運動における模範的人物といったさまざまな要素を考慮にいれるとともに、社會運動のなかでみられる主張や理論の、その骨格となっている論理が、じつはそれらの要素をつなぐ一本の糸であることに気づく。

〈現代中國における歴史性〉という命題を考えようとするとき、われわれは、それぞれの段階における運動が提起するスローガンや題目や理論やの骨格となっている論理が、どのような純粋度であるかにたいしても眼をむけなければならないのである。論理が純粹でなく、唯一でなく、絶對的でなく、ましてそのような嚴格さにおける〈絶縁と決裂の論理〉でないとき、女皇の夢は消滅しているか、おぼろで無力となっているのであつて、そのことは、夢みられるのが皇帝の夢だとしても同じことである。

そして、そのような論理の特徴は、學術研究において、はたして「百家争鳴」が保證されているかどうかをうかがうことによって、みいだすことができる。私見によれば、「百家争鳴」とは、そもそもそれが提唱されたとき、マルクス主義を唯一の指導思想とせず、論争のなかにおいてマルクス主義は指導性を獲得するというものであつた。⁽⁹⁸⁾ たしかに、権力に保護された、學問と政治の一致というスローガンのもとに政治に奉仕する御用學問に墮ちた「マルクス主義」發展史觀のうえに、呂后の夢、武則天の夢は、夢みられたのであつた。

注

はじめに——女皇の夢

(1) 比較的早く、この江青のことを傳えたのは、一九七六年十二月十七日、廣州發の新華社電である。それによると、廣州の中山大學歴史系・中文系の教師、學者たちが、江青が「女皇の夢」にとりつかれて、このように語ったと暴露している。香港『新晚報』一九七六年十二月十八日掲載。この新華社電は、江青が、いつ、どこで、

(2) このような發言をしたかは傳えていない。馮至「四人組」の「古を組のために用う」分析」(『光明日報』一九七七年五月三十一日)によれば、この發言は一九七六年月二三日、華國鋒が國務院總理代行任ずることを通告した中央の文件がだされたあと、江青がこのようなことをいったのだという。

中共廣東省委著作組歷史組「呂后の幽霊と江青の女皇の夢」(『光明日報』一九七七年三月二十日。江青がこのようなことを發したと

いうことは、彼女が逮捕されたあと、中國の新聞・雜誌の論文にみかけるようになった。しかし、いつ、どのような席でこのような發言をしたかを明記したのは、この論文が最初である。この論文の署名が、廣東省委に屬する執筆グループであることは、前注(一)で述べたように、江青がみずから呂后、武則天になぞらえた發言を、比較的早く暴露したのが、廣州の中山大學であることとおもひあわせて興味深い。おそらく廣東省委の執筆グループには中山大學の歴史・文學研究者が参加している。そして、なぜ廣東省や中山大學が批判の先頭になつてゐるかというと、「批林批孔」運動の論理的な先鋒となる論文筆者・楊榮國がこの中山大學の教授であつたことと無關係ではないとおもわれる。なお江青のことばの、「帽子をかぶらなかつた」の原文は「沒有戴帽子」。この動詞の「戴」*dài*にはべつに皮肉、蔑視の語感はない。日本語の「レッテルを貼る」に相當する、「帽子をかぶせる」のばあいは、「扣帽子」といい、「扣」*kòu*という動詞を「帽子」にむすびつけるのは、このときにかぎる。この「扣帽子」の「帽子」が、獨立してやや意味が轉化し「戴」とむすびつくと、江青が使つたような表現となるのであろう。江西ソビエト區や延安などで、紅軍に参加した青年や少年は赤い星のついた軍帽をかぶることに、とくべつの榮譽を感じた。それで、このような、もじりの用語が発生したのだとおもわれる。「扣」はボタンをはめることや力をいれてものをかぶせるときに使う動詞である。日本の軍隊で、新入の兵士を叱責するときなど、そのかぶつてゐる軍帽のひさしをつかんで、グイと下へさげ、眼がかくれるまで軍帽を深くかぶせることがあつた。「扣帽子」も同様の身ぶりの狀況があつて發生した新語(むしろ一種の隱語)ではないだろうか。「戴帽子」について補足すると、一九二〇年代、湖南省で農民運動がさかんになったとき、農民が地主を捕えてひきまわしたい、地主に地獄の獄卒の帽子をかたどつて、白い紙で三角帽子をつくつてかぶせた、その帽子をかぶることを、「戴高帽子」といったが、こ

れは、あくまでも狀態を記述しただけの表現である。それとは無關係に、「帽子」の愛稱、卑稱の「帽兒」をつかつて、「戴高帽兒」という表現が三〇年代、四〇年代に流行したが、これは、ひとをおだてること、ほめそやすことで、「愛戴高帽兒的」といえば、おだてにのりやすい人間、すぐ得意になる人間、おせじをいわれるのが好きな人間のことである。ここで、このように、「帽子」やそれと結合する動詞に、わたしがたちいったのは、江青の「沒有戴帽子的皇帝」といういいかたが、中國の現在の日常的な社會における日常的な表現であること、しかし、そのように「帽子」という用語を使うのは一種の隱語から發生したものであることをいいたかつたからである。そして、このように、重大な權力闘争と關係のあることがらを、平俗な表現で口にすること自体、その人間が特權をもつてゐることを示すものだからである。江青は冬の外套の腕をおさず、肩にはおるだけで大衆のまえに出現するのを好んだが、それも、わざと平俗な服裝にすることによって、特權者であることを示す行爲であつた。しかし、それは、われわれ個人の経験からすると、中等學校で上級生が制服の上衣のボタンをわざとはずすことができたのに近い行爲である。そこで示されるのは、閉鎖的な權力體系のなかにおける順位であつて、權力體系以外にある人間にもなつとくのかい美意識とか美的感覺ではない。もし、中國の婦人一般に外套の腕をおさないで肩にはおることが流行したのであれば、それは風俗として検討に値するが、ここでとりあげた言語、服裝の例は、中國における權力、權力者のありかた、そして江青個人にたいする評價として役立つにすぎない。

(3) 詹立波「一枕の黃梁、女皇を話す」『光明日報』一九七六年十二月二十三日《史學》欄。

(4) 歴史研究所『中國史稿』編著組「史學領域の階級闘争と」四人組の反革命復辟野心」『歷史研究』一九七六年六期・七六年十二月二十日出版。

(5) 曉斌「『國服』と窃國」『光明日報』一九七七年二月十四日。「國服」というのはかつて戦時下の日本における「國民服」と考えればよい。江青じしんがデザインし、「開襟領連衫裙」(開襟、まえあわせ、ロング・スカート、であろうか)であった。外國の賓客とあうとき、江青はもっぱら洋装であったが、これを「江青服」とも稱して普及させようとしたという。

(6) 後出(8)に同じ。

(7) 江青の出身については、すでに調査がおこなわれた。中共山東省昌維地區大批判組「叛徒江青的罪惡家世」『光明日報』一九七七年四月二十八日。

(8) 絲草「江青と呂后玉璽」『新晚報』一九七六年十一月十五日。鑒定を命ぜられたのは中山大學商承祚教授らであった。なお、絲草の一文は出土した年月を記すのみで、江青がみた新聞名と日付けを記さないが、劉乃和「西漢呂后とその玉璽」『光明日報』一九七四年八月六日(文物と考古)二十五期、とおもわれる。これはあきらかに呂后の玉璽と斷定しているが、絲草によれば、なおそのうえに鑒定を求めたようである。皇帝が用いる玉璽を呂后が用いたということ、は、呂后は皇帝に等しかったということになる。

(9) 哲學社會科學部近代史研究所、陳崧「江青の野心と殺機——『梁效』がでっちあげた武則天にかんする一篇の毒文」『人民日報』一九七六年十二月六日。同様の指摘は、歴史研究所『中國史綱』編著組「史學領域の階級闘争と『四人組』の反革命復辟の野心」『歷史研究』一九七六年六期(十二月二十日出版、にもみえる。また、徐遜「『勸進表』と『勸進書』」『人民日報』一九七七年二月八日、にも關連した指摘があるが、これについては後述する。

(10) 『通俗漢楚軍談』は、元祿三年の序、元祿七年(一六九四年)の跋がある。著者は夢梅軒草峯。ただし、八巻以後はその弟が書きついだ。『通俗漢楚軍談』を引用したのは、若干の潤色があって、前後の事情が、『史記』のこの部分よりはわかりやすいからである。そ

してこの潤色はよくできているとおもう。ただ、潤色といっても、呂后と高祖の間答はほとんど『史記』のままである。高祖のことばの末尾の二句は、引用にさいして若干加筆したが、『通俗漢楚軍談』の原文では、「宜く太尉に任ずべし、劉氏を安んずる者は必ず此人ならん」、および、「この次は朕が知るところにあらず」である。引用にさいしては漢字をへらし、かなづかい、送りがなを若干改めた。底本としたのは、「有朋堂文庫」本である。わたしが底本を改譯して引用したのは、前の句については表現がやや弱いのにあきたりなかったからである。おそらく『軍談』の作者は、高祖の豫言がみごとく中して周勃によって諸呂が殺され、劉氏の天下が回復するところに關心がいかなかった、それが譯文にもあらわれているのである。高祖の死後、呂后が高祖に寵愛された長老を殺害しようと考えてるが、酈商の忠告によっておもいとどまり、惠帝が即位して、「其のち呂后を尊んで皇太后と稱し、呂氏の一族をみな列侯に封じ玉いければ、呂澤らを始として呂后の威を恃み、妄に權を擅にして紫闥に横行しけれども、滿朝の諸大臣みな其威を怕れて敢て諫る者一人もなし。」とふれ、全書の末尾にいたって、劉章によって、それも惠帝の命令によって、呂氏の一族が制壓された、と敘述して、大團圓に終るのである。「帝乃ち高帝の遺詔に任て王陵を右丞相とし、陳平を左丞相とし、周勃を太尉とし、樊噲等に勅して常に軍兵を訓練せしめ、朱虛侯劉章に詔して呂氏の一族を制服せしめ、宰相内を治め、武將外を治め、蠻夷賓服し、此より天下甚だ無事にして萬國咸く寧く、囊の紐を解くことも無ししかば、行人路を讓て、商賈は市に歌ひ、百姓は業を樂で路に捨たるを拾ず、夜戸を鎖さず、山野の土民三尺の童子までも皆萬歳を唱しは、誠に目出度かりける事共なり。」(ルビの表記にいくらか手を加えた——引用者) 呂后が高祖の寵妃、戚姬を「人彘」としたことも、もちろんでてこない。

『通俗漢楚軍談』の作者は中國の王朝興亡、英雄割據の歴史に興

味はもち、潤色や話術としての再構成にはみごとでこまかい神経をはたかせるが、権力闘争や革命のありのままの姿には眼をそむけているといわなければならない。ここに日本における中国理解の傳統的な限界をみるのは、わたしだけであろうか。それは限界というよりは、むしろ、好み、としてうけつがれているために、いっその矯正しがたく、新しい術語を操ることで、現在も再生産されているようにおもわれる。

(11)

解放军某部・李延明、北京市建委・隋喜文「劉氏を安んずるは、必らずや勃なり」『光明日報』一九七六年十二月十六日（史學）欄四五期。

第一章 「毛沢東時代」の設定

(12)

『人民日報』、『紅旗』、『解放軍報』評論員「新舊反革命が結成した黒い組」『人民日報』一九七七年四月二十七日、『紅旗』五期。五月三日發行。このような規定は、この三紙誌評論員の論文が最初であるが、ほぼ似たような規定は、すでに一九七六年十二月二十五日、第二回農業は大案に學べ全國農業會議の席上で、華國鋒によつてのべられていた。〈張春橋、江青、姚文元の醜惡な歴史は説明している。かれらはもともと、蔣介石反動派と千本萬本ものつながりがあった。歴史的な反革命から現行反革命へというのが、かれらが歩いてきた道のすべてである。王洪文は、新しく生まれたブルジョア階級の典型的代表である。いわゆる「四人組」とは、これら新舊反革命が結成した黒い組である。〉『人民日報』一九七六年十二月二十八日『紅旗』一九七七年一期。一月七日發行。華國鋒のこのような規定と表現が、三紙誌評論員論文にうけつがれていることはいうまでもない。

また、「四人組」を斷罪した同様の文章は、ほかにもみえる。つぎに引用するのは、高崗、饒漱石の反黨連盟を批判した毛澤東の論文についてのべた、學習論文とでもいふべきものの一節である。

〈「四人組」を高崗がおこなったものもろの行爲と比擬すると、

過ぎることも及ばないところはない。かれらは嚴密に若干の地區と部門を統制し、一部の野心勃勃、手をのばして官職を求め、權力をこ

れ奪わんとし、機をみてはもぐりこみ、ヒゲをはらい、おべっかをつかう人間をかき集めて組をつくり、突撃入黨させて、各級の指導部におしこみ、力をつくしてプロレタリア獨裁の機構をかれらの黨奪權の黒い基地と黒い據點にかえた。かれらは、叛徒、特務、反革命分子、刑事犯罪分子、汚職窃盜分子、および色とりどりの社會のかすを糾合し、一部の魂を賣りわたし、身を賣り身をよせたいわゆる「老幹部」を籠絡し、一群の政治ごろつきと恥しらずの文人を重用し、上から下にいたる、綱領をもち、路線をもち、組織をもつ反革命的なブルジョア階級組派閥體系を形成し、組を結んで私利を營み、組を結んで黨を篡し、妄りにプロレタリア獨裁を顛覆し、かれらのブルジョア・ファッショ獨裁を樹立しようと圖った。〉（中共遼寧省委理論組「高饒反黨連盟から「四人組」まで——『中國共產黨全國代表會議における講話』を學習する」『紅旗』一九七七年五期。

(13)

ここでのべた、皇帝型權力と宰相型權力については、拙稿「皇帝型權力と宰相型權力——第四期全國人民代表大會にみる「批林批孔」のゆくえ」、『中央公論』一九七五年三月號、拙著『中國への視角』中央公論社、一九七五年七月刊所收、参照。ただし、わたしは當時から、いまひとつ、「宦官型權力」という範疇もしくは概念も成立するのではないかと考えていたが、これについては本稿でいくらかふれることができた。

(14)

ここでのべた、中國共產黨の〈率いられるものの集團〉としての性格については、拙著『毛澤東と中國共產黨』（中公新書）中央公論社、一九七二年四月刊、参照。

(15)

ここでのべた時期區分を、わたしは一九六五、六年ごろから使用している。當時は、當然のことながら、それいごに言及できなかったが、「Ⅱ」「Ⅲ」にあたる期間を「百家争鳴の展開（一九五六〜五

七年)、「右派批判(五七〇五八年)」、「左」から「右」への移行(五九〇六〇年)」、「劉路線と毛路線のせめぎあい(六二〇六五年)」と区分していた。本文にみられる時期区分と年表(一)は、『アジア・クォーターリー』一九七七年四月―六月、九卷二號に掲載したもので、「V」期の名稱は、「文化大革命以後」となっており、一九七七年まで含めてあった。

(16) たとえば、『晉綏日報の編集者への談話』(一九四八年四月二日)で、毛澤東はこのようにのべている。『諸君の缺點は主として弓をあまり強く引きしぼりすぎたことである。引きしぼりすぎれば、弓のつるは切れてしまう。古人は、「文武の道は一弛一弛」といっている。』(『毛澤東選集』第四卷一三三〇ページ)。『選集』編者もいうように、この「文武」とは、周の文王、周の武王をさしている。『禮記』雜記下に「張って弛めざるは文武も能わざるなり。弛めて張らざるは文武も爲さざるなり。一張一弛は文武の道なり」とある。文革中、出版された『毛澤東思想萬歲』のいわゆる「丙本」に収録されている「辨證法の事例」の「(八)緊張もあれば休止もある」でも、毛澤東は『禮記』のこの箇所を引用したあと、「緊張あり弛緩あり、團結あり鬭争ありだ。團結ばかりあって、鬭争がないのはダメだ」といっている。拙編譯、『毛澤東 哲學問題を語る』現代評論社、一九七五年四月刊、一四〇ページ参照。ただし、この拙譯は、毛澤東の引用原典をふまえていないという誤りをおかしている。

(17) 『毛澤東選集』第一卷所収。この日付けは、一九二七年三月。この「湖南農民運動觀察報告」は、『選集』収録にあたって加筆されており、引用の末尾「權力の」は、當時發表された原文によって補った。發表當時の原型については、北望社版『毛澤東集』1、参照。原型による全譯は、拙共編『民衆の大連合―毛澤東初期著作集』講談社、一九七八年刊、所収。

(18) 毛澤東「江青にあてた手紙」一九六六年七月八日。この全譯、拙編譯、毛澤東『文化大革命を語る』現代評論社、一九七四年十二月、

に収録。

(19) 毛澤東「延安各界のスターリン六十歳誕生祝賀大會における講話」一九三九年十二月二十一日。この全譯は、前出『文化大革命を語る』に収録。原文は、北望社版『毛澤東集』7所収。

(20) 前注(12)の、「新舊反革命が結成した黒い組」にみえる。

(21) 前注(20)に同じ。

(22) このわたしの文革觀は、拙編『文化大革命』(ドキュメント現代史16)平凡社、一九七三年一月刊、の序文を要約したもので文革を重層的なものと考えたのは、そこでも記したように、紅衛兵がはじめて登場した一九六六年八月十八日、天安門廣場の大集會において、林彪がおこなった演説を根據にしている。

林彪はそこで、つぎのようにいっている。『プロレタリア文化大革命は、ブルジョア思想を消滅し、プロレタリア思想を樹立し、人の靈魂を改造し、人の思想の革命化を實現し、修正主義の根をとりのぞき、社會主義制度を強化し、發展させるものであります。われわれは資本主義の道をあゆむ實權派を打倒し、ブルジョア階級の反動的な權威者を打倒し、すべてのブルジョア王黨派を打倒し、革命に壓迫をくわえる種々さまざまな行爲に對し、あらゆる妖怪變化を打倒しなければならぬ。われわれは、搾取階級のあらゆる舊思想・舊文化・舊風俗・舊習慣を大いに破り、社會主義の經濟的土臺に適應しない一切の上部構造を改革する。われわれは、一切の害虫を退治し、一切のつまずきの石をとりのぞく。われわれは、プロレタリア階級の權威を大いにうち立て、プロレタリア階級の新思想・新文化・新風俗・新習慣を大いにうち立てる。一言でいえば、毛澤東思想を大いにうち立てることです。われわれは、幾億という人民に毛澤東思想を掌握させ、毛澤東思想にあらゆる思想の陣地を占領させ、毛澤東思想によって社會全體の精神的様相をあらため、毛澤東思想という偉大な精神的力を偉大な物質的力に變えなければなりません。』

そして、それから一年餘りのち、林彪はつぎのようにのべざるをえなかったのである。《新しい歴史的時代は、マルクス・レーニン主義者のまえに、一連の新しい重大問題を提起しています。しかし、それもけっきよく、やはり權力を奪取し、權力を強固にするという、このもっとも根本的な問題に歸着します。毛主席は、『世界のすべての革命闘争は、みな權力を奪取し、權力を強固にするためのものである』とのべたことがあります。これはマルクス・レーニン主義の偉大な眞理であります。》(首都人民の十月革命五〇周年集會における林彪同志の演説)一九六七年十一月六日。

文革中、中國において流行もし、日本の一部においておうむがえしに承認された「牛鬼蛇神」という用語の來由、およびそれが政治的に使用されている状況にたいするわたしの見解は、一九六八年に「毛澤東に訴う」『毛澤東ノート』新泉社、一九七一年十二月刊所収、においてのべてある。

(24) 前出、「新舊反革命が結成した黒い組」、前注(1)参照。

第二章《文革派》対《脱文革派》の抗争・女皇の夢の論理

(25)

周恩來の諸政策とそのなかでも重要な失脚幹部にたいする措置について、中國のある論文は、つぎのようにのべている。《一九七一年、林彪が自ら滅亡を手にいれたあと、周總理は中央の工作を主宰し、ただちに林彪反黨集團がつくりだした破壊を回復することに着手した。七二年、黨中央、毛主席の指示にもとづいて、文化大革命において、多年の審査をへても新しい問題が発見されなかった老幹部を解放し、そのなかの一部は工作を回復し、人もの職務に復歸し——引用者、またべつの一部は工作を分配されようとしていた。多數の幹部の解放と工作回復とは、「四人組」をして黨にたいする破壊が徹底的でなく、かれらが豫期した「一切を打倒する」との目的を實現していなかったということを尖鋭に感ぜさせた。とくに、十全大會以後、四期人代大會以前、「四人組」は篡黨奪權に酔っており、切實に「一切を打倒する」ことを求めていたから、古參幹部が工作

を回復することは、かれらにとって、もっとも許容しがたいことであった。梁效と羅思鼎のいわゆる儒法闘争史にかんする論文は、「四人組」のこの問題にかんするみかたをすかしみせている。すなわち、古參幹部は、一度できれいにかたづけられることができるものではない。根柢で殴りつけると、「一切を打倒」したようであるが、あとからみると、「一切を打倒」してはいず、倒れたのは小數で、多數のものはまたもや起ちあがった。これはわれらの眼からみれば、すなわち「逸民を挙げ」ることであり、「復辟」である、ということになる。そこからして結論をえて復辟と反復辟は長期、反覆の闘争にする。》(黎澍「四人組」の中國歴史にたいする大破壊——いわゆる儒法闘争史を研究するというベテンを評する)『歴史研究』一九七七年二期三月三十一日印刷、四月二十日發行)

この論文は、わたしが「V」期の左右のゆれと名づけたもの、そしてその左右のゆれの來源と考えたものをみごとに裏書きしてくれている。この論文は慎重にも文革にふれないが、引用した冒頭にいう《林彪反黨集團がつくりだした破壊》とは、要するに、文革がもたらした破壊、ということにはかならない。

(26)

中共北京市委員會著作小組「觀念論を批判する鋭い武器——『農村調査・序言』と『跋』を學習して」(『紅旗』一九七一年四期)四月一日發行)。ほかでもなく、北京市委員が、本文で引用したような箇所を含む論文を發表した意味は大きい。文革を發動したとき、毛澤東はじめ中央文革小組(組長、陳伯達、副組長、江青)がまず最初に攻撃し、指導部を交替させたのが、この北京市委員會であった。林彪は、毛澤東にたいして反革命クーデターをくわだて、それが失敗して、ソ連に亡命しようとしたが、モンゴルで搭乗機が墜落し、死亡したといわれている。林彪のクーデター計畫書は、「五七一工程」紀要」と名づけられていた。モンゴル當局の最初の發表では、墜落機の乗員はすべて三十五歳以下で、後日、それは訂正されたが、それでも四十五歳以下である。(拙稿「中國文化大革命と日本人」

『中央公論』一九七四年一月號、『中國への視角』所收、一九七五年七月刊、林彪事件について中國の「文件」の譯は、拙稿「林彪事件の真相」『中央公論』一九七三年二月號）。林彪事件（クラーデータから「九・一三」までを含めて）は、まだまだ説明されるべき謎にみちている。

(28) 丁學雷「劉少奇の反動的ヒューマニズム論を批判せよ」(『紅旗』一九七一年一期十月一日發行)。林彪は、「先知」をもって自在した。それで、「先知」を觀念論として批判することが、林彪を批判することになるのである。

(29) すなわち、革命現代化京劇『龍江頌』(『紅旗』一九七二年三期掲載)とこれの評論、蔚青「社會主義文藝のまた一つの新しい花」(前同『紅旗』)がそれである。『龍江頌』が「脱文革」的傾向を示す文藝作品であることは、拙稿「中國文化大革命と日本人」(前出)参照。

(30) 柳下跖(盜跖)にたいし高く評價した論文としては、唐曉文「柳下跖、孔老二を痛罵す」『人民日報』二月二十六日『光明日報』三月十四日。「柳下跖の反亂事迹にかんして」『人民日報』同上。柏參「奴隸蜂起の領袖、孔老二を怒り斥く」『光明日報』一九七四年三月九日、唐曉文論文と「莊子」盜跖篇を収録したパンフレットも出版されている。唐曉文「柳下跖、孔老二を痛罵す」人民文學出版社、一九七四年五月。

(31) この「孔丘そのひと」は、「批林批孔」運動のなかで發表されたもの(署名は、北京大學・清華大學大批判組、「紅旗」一九七四年四月一日發行)であるが、内容は、孔子をことさら誇張し、それを現代の人物にあてはめて読むよう期待して書かれている。そのいくつかをあげると、(一)「孔丘は陰險狡猾で、奴隸制という人を食う政治を維持し、復辟しようとしながら、人を愛する顔をした。孔丘はそのうえ、信を鼓吹した。(この「信」は、一九七二年九月二十八日、國交回復のため北京を訪れていた田中角榮日

本首相に、周恩來が「言必信、信必果」と毛筆で揮毫してわたし、田中角榮も「信は萬事のもと」と揮毫して贈ったことを暗示しており、人を愛する顔、というのも、ひとびとが、慈愛深い周恩來の印象を語っていることを想起させる。(二)孔丘は蒲で包圍されたことがある。「文革」がまだ高潮期にあった一九六七年八月、人民大會堂の執務室にいた周恩來は五十萬の紅衛兵によって二晝夜以上にわたって包圍されたことがある。(三)政治ベテナーは方向をうかがい、風をみて舵をあやつり、自分の顔のくまどりをかえる。

(32) (周恩來には、「不倒翁」(おきあがり小法師)のあだ名がある。)(四)孔丘は婦人をおさえた。「江青の周恩來にたいする不満がのべられている。」「(五)孔丘は少正卯を殺した偽君子である。(林彪失脚の元凶といたいのであらう。)(六)國君にはうやうやしく、權臨には笑い顔、おおぜいのまえでは忠厚篤實な顔つきをして社會上、正人君子の美名をだましとった。(周恩來にたいする一般の好評をそけている。)(七)柳下跖にたいして面罵された。(アメリカとの接近政東をめぐり會議がひらかれたさい、林彪が周恩來を面罵したと伝えられたことがある。)

(33) 郭沫若「中國古代史の時期區分問題」『紅旗』一九七二年七期七月一日。これは郭沫若「奴隸制時代」人民出版社、一九七三年五月刊、巻頭に、「序に代えて」の副題を付して収録された。「奴隸制時代」は一九五〇年から五二年にかけて執筆された論文を収録したもので、一九五二年、新文藝出版社から出版され、いつで出版社をかえて版をかさねた。『沫若文集』第十七巻には一九六一年版が収録されている。

(34) 楊榮國の論文は、『紅旗』一九七二年二期二月一日出版。『簡明中國思想史』は、楊榮國が主編、陳玉森、李錦全、吳熙劍の編著で、一九六二年五月、中國青年出版社から出版されている。た

だ、断っておかなければならないのは、楊榮國は、この書物において、ならずしも、「儒法闘争に學べ」運動の全論理に過不足なく一致する論理だけを提出しているというのではない。かれは、法家と儒學には共通性があった、という論點も提出している。したがって、「批林批孔」運動がはじまると、楊榮國は、「先秦儒法兩家の思想は根本的に對立するものである」(『光明日報』一九七四年八月二十四日)を執筆、「彼此のあいだの闘争は、東風が西風を壓倒しなければ、西風が東風を壓倒するのであって、調和の餘地はない」と自説を訂正したのである。

- (36) このところは、拙稿「孔子批判その淵源・論理・展開」(『國語展望』一九七四年十一月、七五年三月、六月號、拙著『同時代としての中國』所收)にのべたことがある。

- (37) 郭沫若があえて引用しなかったこの箇所を、つぎの論文は引用している。劉澤華、王連升「四人組」が史學領域にうちふった覇者の旗——羅思鼎『秦漢の際の階級闘争を論ず』『歴史研究』一九七七年二期三月十一日印刷、四月二十日發行(日本到着は船便で六月五日であるから、じっさいにはなお發行がおくれたものとおもわれる)。

- (38) 石中英「北大を訪ね、"梁效"を語る」香港『新晚報』一九七七年一月十六日。

- (39) この報道は、一九七六年十月十三日付『デーリー・テレグラフ』に掲載されたもの(ロンドン時事)。

- (40) 北京七六年十月十九日(『AFP時事』)

- (41) 前注(38)と同じ。もっともこの資料は、解放軍の兵士が包圍した北京大學構内の建物が「偽中央辦公廳」であったといっているわけではない。しかし、前後の事情からすれば、このように推定される。

- (42) 新華社「清華、北大から"四人組"黨黨奪權の罪行をみる」『人民日報』一九七七年一月三十日。

- (43) 前注(42)に同じ。

- (44) 新華社通信員、新華社記者「自ら墳墓を掘り、自ら墓碑をつくる——

- "四人組"が組の雑誌『學習と批判』を通じて、反革命世論をつくりだした罪惡を暴露批判する」『光明日報』一九七七年三月十七日。

- (45) 朱永嘉が羅思鼎であるという説、および羅思鼎をペンネームとする執筆集團についての知識は海民「四人組秘録——四人組の骨幹朱永嘉——羅思鼎」香港『展望』一九七六年十二月十六日號、による。

- (46) 前注(38)と同じ。

- (47) 『歴史研究』編集部「『歴史研究』の遭遇と"四人組"が歴史を利用した反黨陰謀」『人民日報』一九七七年一月十一日。

- (48) 前注(44)に同じ。

- (49) このような「高級顧問」の存在は、北京大學哲學系中國哲學史組「歴史唯心主義の標本——『儒法闘争史概況』を評す」『歴史研究』一九七七年二期、前出。

- (50) 總參謀部通信部大批判組「三矢、いっせいに發す」、意は黨奪權にあり」『光明日報』一九七七年一月十七日。

- (51) 前注(50)に同じ。

- (52) 海軍理論組「攪亂と失敗の記録——"四人組"がつぎつぎにおこなった氣狂いじみた進攻からその極右的實質をみる」『光明日報』一九七七年三月十六日。

- (53) 「發婦が街に罵る」についてはのちにのべる。「むすび——現代中國の歴史性」また、後注(78)も参照。

- (54) 前注(50)に同じ。

- (55) 「裏口をひらく」『紅旗』一九七四年二期二月一日出版、の巻頭に掲載された「短評」、「廣汎に深く、批林批孔の闘争を展開せよ」がこの問題にふれた。『批林批孔は、搾階級の意識形態(イデオロギー)のたぐさんの側面にふれる。若干の搾階級の傳統的觀念、たとえば労働を輕視する、婦人を蔑視する、勞農大衆をみくだす、新しい事物、新しい力に目くらたてて、崇洋復古、および"裏口をひらく"「開後門」といったたゞの不正の風、これらはそれ

らの社會階級的根源のほかに、すべて孔孟の道に思想的根源をさがしあてることができる。批林批孔の闘争のなかで、林彪や孔子の反亂思想を深く批判し、これらの流毒を一掃しなければならぬ。」

こうして、いわゆる「コネ」をたよりに下放した息子や娘をよびかえしたり、大學に入學したり、幹部として復活した人間は、「批林批孔」運動のなかで攻撃の的となった。

- (56) この一段は、前注(50)、(52)の二論文をまとめて記した。ただし、總參謀部通信部大批判組の論文は、周恩來、葉劍英の名をあげず、「黨、政、軍の責任ある同志」とのみいつている。

- (57) 前注(52)に同じ。

- (58) 中共廣東省委著作組歴史組「呂后の幽霊と江青の女皇の夢」『光明日報』一九七七年三月二十日。

- (59) 前注(58)に同じ。

- (60) 『人民日報』六月十九日、「法家代表人物紹介」。『光明日報』同日にも同じものが掲載された。また同じ表題ではあるが、内密のちがうものが、『人民日報』六月十六日、『光明日報』六月十七日に掲載された。これには少正卯、末子悝、吳起、商鞅、荀況、韓非がとりあげられている。署名は、北京大學・谷滋。厚教は『北京日報』六月十五日。

- (61) 前注(58)に同じ。

- (62) これらの論文の原文題名と掲載誌紙はつぎのとおりである。

- (一) 羅思鼎「論秦漢之際的階級闘争」『紅旗』一九七四年八期
八月一日發行、『光明日報』八月六日。

- (二) 梁效「有作爲的女政治家武則天」『北京大學學報』一九七四年四期
八月二十日發行。

- (三) 清華大學幼兒園工人理論小組「談談對武則天的幾點看法」『北京大學學報』前出。

- (四) 梁效「研究儒法闘争の歴史經驗」『紅旗』十期
十月一日發行、『光明日報』十月十三日。

- (五) 翟青「論西漢初期的政治與黃老之學」『學習與批判』十一期

ほかに胡申生、馮丹楓、黃童珍「女皇武則天——『儒法闘争史話』選載之一」(『學習と批判』一九七五年一期) 一月十日出版、劉大杰「中國文藝發展史 二」(上海人民出版社一九七六年八月) 第二章「武則天時期之文學」もふれている。

- (63) 前注(85)に同じ。

- (64) 嚴銘「歴史を纂改するのが手段であり、篡奪權が目的である——羅思鼎「秦漢之際の階級闘争を論ず」を評す」『光明日報』一九七七年一月二十七日(『史學』四九期)。

- (65) 吳江「現代復辟派と古代變革史」『紅旗』一九七七年六期、『人民日報』六月四日。

- (66) 前注(64)に同じ。

- (67) 宋家鈺 方積六 唐耕耦「歴史における武則天と「四人組」の復辟衝」——「法家の女皇、武則天」一文の反革命的實質を評す『光明日報』一九七七年四月七日(『史學』欄五八期)。

- (68) このような事實を暴露したのは、『中山大學學報(哲學社會科學版)』一九七七年一期に掲載された、「江青が武則天の亡霊をよびかえしたのは、現代の女皇になろうとしてである」という論文である。いま『中山大學學報』は日本では入手できないが、前注(67)の『光明日報』(『史學』五八期(報刊文摘)欄)に内容紹介があるのによった。中共廣東省委著作組歴史組「呂后の幽霊と江青の女皇の夢」『光明日報』一九七七年三月二十日。

- (70) 歴史研究所「中國史稿」論著組「史學領域の階級闘争と「四人組」の反革命復辟の野心」『歷史研究』一九七六年六期
十二月二十日出版。

- (71) 黎烈「墓碑・哀鳴」『人民日報』一九七七年二月二十二日。

- (72) 黎澍「四人組」の中國歷史學にたいする大破壊『歷史研究』一九七七年二期
四月二十日出版。

(73)

『光明日報』一九七六年十一月十三日。副題は「——北京の一部の労働者、および史學工作者、四人組」が歴史を歪曲し、篡奪権のために反革命の世論をでっちあげた滔天の罪行を憤怒の聲をもって討つ。なおこの座談會には、一九七四年十一月、十二月、來日した「北京大學社會科學友好代表團」のひとり、張傳璽の發言もみえる。なお、張傳璽の京都大學における講演は、「中國古代における儒法闘争——奴隸制から封建制へ」（京都大學人文科學研究所編『學問に架ける橋——北京大學社會科學友好代表團講演集』所收）。ただし、張傳璽のこの講演は、儒法闘争を春秋戰國時代に限定して論じ、呂后、武則天讚美をのべていない。

(74)

『光明日報』一九七七年一月五日。これは〈史學〉欄全體の見出しで、「四人組」がさかんであったとき反對意見を投稿し、發表されなかった投書論文五篇が特集されている。

(75)

『人民日報』一九七六年十一月二十日。原題は「呂后與江青」。

(76)

『光明日報』一九七六年十二月十六日。「安劉氏者必勃也」。

(77)

これは小冊子である。中華書局一九七七年一月刊。序文の日付けは一九七六年十一月二十四日。呂后其人——呂后及諸呂版圖纂權資料選譯

(78)

この論文の翌日、發表された、『人民日報』編集部「滅亡まえの氣狂いじみたひと跳び——四人組」が「臨終のいっつけ」を偽造した大陰謀をあばく」のなかには、つぎのような一節がみえる。
『よく知られているように、毛主席が指示した、「過去の方針とおりやれ」は一定の問題に眞正面からむきあって、のべたものである。批鄧、右翼まきかえし風に反撃するなかにあっては、毛主席の一連の重要な指示どおりにやれ、毛主席が「同意する」と批示した、華國鋒同志の一九七六年二月二十五日の講話どおりやれ、ということにはかならない。』すなわち、本文の李・隋論文は、「四人組」も逮捕するが、「批鄧」もつづけるという政治的脈絡のなかで執筆されたものとみることができる。「批鄧」が消えるのは、十二月二十二

むすび——現代中國の歴史性

(79)

馮友蘭「個人的體得から批林批孔と知識分子を團結・教育・改造することとの關係を語る」『光明日報』一九七四年二月一日。これにふれた拙文は、「孔子批判は周恩來批判か」（一九七三年十二月）、「なぜ孔子が批判されるのか」（一九七四年一月）、前出「中國への視角」所收。この二つの文章では、わたしは、當時の孔子批判について周恩來批判であるよりは、周恩來批判であるにしても、周恩來のコントロールが効いていると觀測していた。おそらく、それだからこそ、馮友蘭は自己批判をおこなったのである。そのあと、周恩來攻撃が露骨になっていったとき、馮友蘭はもはやひきかえすことができず、梁效の「高級顧問」となつて、「四人組」逮捕のあと、またもや批判されている。名ざしをしない馮友蘭批判は、北京大學哲學系中國哲學史組「歴史唯心主義の標本——『儒法闘争史を概説』評す」『歴史研究』一九七七年二期（四月二十日出版。馮友蘭がもし、孔子批判から學術的意味のみを汲みとっていたとしたら、周恩來のコントロールの如何にかかわらず、このような悲運にみずからをおしやることはしなかったであろう。

- (80) 中共廣東省著作組歷史組「呂后的幽靈と江青の女皇の夢」『光明日報』一九七七年三月二十日。
- (81) 一九六八年三月二十七日。北京で開催された、軍民大會における周恩來の講話の記録による。日本語譯は「周恩來總理、一九六八年二月二十七日的重要講話」『江青同志論文藝』青藍社、一九七四年二月刊。
- (82) このときの光景や王光美にたいする訊問の記録については、拙編『文化大革命へドキュメント現代史16』平凡社、一九七三年一月刊、参照。陳毅夫人、張茜が街頭をひきまわされたという記事は、香港、臺灣の雑誌に散見するが、まだ、中國の「四人組」批判の論文では指摘されていない。本文のあとのはうでのべた、江青の聲の調子をまねて彼女の指示を傳達する人間があらわれたことは、「四人組」批判の論文にみえる。
- (83) 文革の過程については、拙編『文化大革命』の巻頭、「解説年表コミューンの夢、權力闘争」参照。一九六七年五月の状況、「革命模範劇」については、拙稿「表現としてのプロレタリア文化大革命」『岩波講座「文學」8. 新しい世界の文學』岩波書店、一九七六年八月所収、参照。
- (84) 江青が「批林批孔」辦公室主任であったという報道は、現在までのところ、公式にはない。わたしは、中共研究雜誌社編『中共「批孔」資料選輯』（中共研究雜誌社、一九七四年七月刊）の解説（四〇五頁）によって知った。
- (85) 江青がウィトケに語ったものを譯出しこれに批判的、實證的説明をくわえたものに、伊原吉之助「江青自傳」『歴史公論』一九七六年十二月號〜七七年三月號、ある。
- (86) 中共山東省昌濰地區委員會大批判組「叛徒江青の罪惡の家世」『光明日報』一九七七年四月二十八日。
- (87) 拙稿「阿金考」佐々木基一と共編『魯迅と現代』勁草書房一九六八年七月刊、所収。これは、その前年の十月、新日本文學會で開催された、魯迅没後三十周年記念の特別連續講座において語ったもの。わたしは舊稿にふれるのは、べつにわたしに先見の明があったことを誇ろうとしてではない。ただ、この小論において、江青そのひとを論じているのは、彼女が逮捕され失脚したという状況のもとで、逮捕した側にたつ優越感によって論じているのではないということとを辨明しておきたいからである。わたしは彼女を嫌っていないことといえ、それは率直ではないが、しかし彼女を逮捕したのはわたしではない。
- (88) 交通部大批判組「ひとつの反革命ドタバタ劇」『人民日報』一九七七年一月十七日。
- (89) 陳中「「四人組」雜誌『學習と批判』を裁きの臺におしあげよ——『學習と批判』が周總理を攻撃した罪行を清算する」『歷史研究』一九七七年一期二月二十日出版。ここでとりあげられている羅思鼎論文は「呂氏春秋」を評す（『光明日報』一九七四年四月六日）。ただし、廖開飛の同名の論文もある。『光明日報』七月十日。
- (90) 黎澍「「四人組」の中國の歴史學にたいする大破壊——いわゆる儒法闘争史を研究せよとのベテンを評す」『歷史研究』一九七七年二期四月二十日出版。
- (91) 「雷鋒に學べ」運動は、一九七七年三月に展開された。十四年まえに、毛澤東がこのスローガンを頭詞として揮毫したことを記念しての運動でもあるが、新しく展開するにあたって、華國鋒、周恩來、葉劍英、朱德の題詞も發表された。
- (92) 北京二中、徐紀民「ぼくたちは舊い世界に宣戦する」『光明日報』一九六六年八月二十四日。譯文は、前出『文化大革命へドキュメント現代史16』所収。
- (93) 『哲學研究』の特集「勞農兵、共產主義道德を語る」に付せられた同誌編集部「前言」『哲學研究』一九六六年一期二月二十五日出版。
- (94) 上海革命大批判著作小組「ブルジョア階級の文藝を鼓吹することは

資本主義を復辟することである——周揚がブルジョア階級の「ルネッサンス」「啓蒙運動」「批判的リアリズム」をもちあげた「反動理を駁す」「紅旗」一九七〇年四期。『人民日報』四月二日。

(95) 中國科學院外國文學研究所 柳鳴九「四人組」の「徹底的批判」論は必らず批判すべきである」『光明日報』一九七六年十一月二十日「文學」五〇期。

(96) たとえば、「四人組」は外國文學について、「全面的に外國のプロレタリア文藝を抹殺した」が、そのいっぽう、「技術を借りて鑒とせよ」、「反動的であつてもかまわない」として、「政治的基準を無視」、最後には「全面的に吸収せよ」と號令をかけたという。外國文學研究所「四人組」の外國文藝に對處する修正主義的謬論を批判する」『人民文學』一九七七年二期二月二十日出版。

(97) たとえば、つぎのように指摘されている。『四人組』はプロレタリア階級と文藝の隊列を爭奪するため、林彪の「誘」官、祿、徳をもつてす」の古いやりかたを襲った。一部の文藝工作者にはささげるのに名、恵むのに利をもつてし、願ひのままに官に封じ、ひばりこんで腐敗させ、あらゆる手段をもちいた。かれらの「組」内ではたしかに、官と祿とはあい通じた。官をもつと特等の家に住み、特等の飯を食、特等の車に乗った。江青に名言がある。「チヨコレートを食べられないのは革命をやらないからだす」、楊志杰「組派閥體制を一掃し、文藝隊伍を壯大にしよう」『人民文學』一九七七年二期五月二十日出版。

(98) 一九五六年五月二十六日、陸定一は「百花齊放、百家爭鳴」と題する講演をおこない、そのなかでつぎのようにのべた（『人民日報』六月十三日掲載）。

《わが國が富みさかえた強大な國になるためには、人民の政權を

強固にし、經濟を發展させ、教育事業を發展させ、國防を強化するほかに、なお文學藝術活動と科學活動をさかんにする必要がある、これなしにすまふことはできません。文學藝術活動と科學活動をさかんにするためには、「百花齊放、百家爭鳴」の政策をとることがどうしても必要であります。……わたしたちはまた、階級社會においては文學藝術活動と科學活動が究極において階級闘争の武器とならなければならぬということを忘れてはなりません。……わたしたちはまた、文學藝術と科學研究は階級闘争と密接なつながりをもっているとはいへ、究極のところ、これらのものは政治と同一のものではないということを見なければなりません。……わたしたちが主張するところの「百花齊放、百家爭鳴」の政策は、文學藝術活動と科學研究活動の分野において、自分のあたまでものを考える自由、辨論の自由、創作と批評の自由、自分の意見を發表し、自分の意見を固持し、自分の意見を保留する自由をもつことを提唱するものであります。……」

この陸定一の講演が新聞に掲載されたあと、郭沫若が、「百家爭鳴」とはオーケストラのようなもので、マルクス・レーニン主義という指揮棒のもとになえなければならぬとのべた（『人民日報』一九五六年七月一日）のにたいし、『人民日報』評論員の論文、「百家爭鳴」を論ず」はこれに反駁して、マルクス主義は自由討論のなかにいてこそ指導性を確立するもので、最初から自由討論の是非をはかる基準として存在するものではないとのべた（『人民日報』七月二十一日）。拙著『現代中國の文學』の4章、「百花齊放、百家爭鳴」参照。研究社、一九七二年一月刊。

（一九七七年七月六日、稿了）

【年表一】

中国 文化界の動向 略年表

(1949～1976)

I 毛澤東路線の設定	
1949 中華全國文藝工作者代表大會（第1回） 50 毛澤東、「清宮秘史」批判を指示 51 映畫「武訓傳」批判 53 第2回文藝工作者代表大會 54 「紅樓夢」研究批判、胡適プラグマチズム批判、「文藝報」批判 55 胡風批判	中華人民共和國成立 朝鮮戦争 三反・五反運動、愛國衛生運動
II 「百家争鳴」の展開・ひきしめ	
56 毛澤東「十大關係を論ず」演説 陸定一「百花齊放、百家争鳴」演説 57 丁玲批判、劉紹棠批判 58 毛澤東「蝶戀花」公表、社會主義リアリズムにかわって革命的ロマンチズムと革命的リアリズムの結合となえられる 59 曹操の再評價	スターリン批判（ソ連） 中共第八回全國大會（1956. 9） 毛澤東「人民内部矛盾」演説 大躍進、人民公社化
III 二つの路線のせめぎあい	
60 第3回工作者代表大會 61 吳晗「海瑞、官をやめる」など出現 62 濟南・孔子學術討論會、郭沫若の史劇「武則天」發表「中間人物」描けの主張あらわれる 63 毛澤東「文學藝術にかんする批示」 64 楊獻珍「二を合して一となす」批判、北京で、現代化京劇コンクール 毛澤東「文學藝術にかんする批示」「中間人物論」批判	劉少奇、中共中央を掌握、調整政策をとる 毛澤東「階級闘争を忘れるな」と主張 社會主義教育運動
IV 文化大革命	
65 姚文元「『海瑞、官をやめる』を評す」發表 66 彭真ら「二月提綱」下達、江青「座談會紀要」下達、「燕山夜話」批判、周揚批判、十六條の決定公布 67 戚本禹「愛國主義か、それとも賣國主義か——反動的映畫『清宮秘史』を評す」、革命模範劇出現「歐陽海の歌」改訂部分を發表 68 映畫「怒潮」（モデルは彭德懷）、「紅河激浪」など批判 69 スタニスラフスキー・システム批判 70 革命模範劇「紅燈記」「沙家濱」「赤色娘子軍」の〈1970年上演本〉決定	毛澤東、林彪へ書簡、「五・七」指示、紅衛兵出現 武漢事件 労働者毛澤東思想宣傳隊、大學にはいる 中共第九回全國大會、（1969. 4） 陳伯達失脚
V 「文革派」對「脱文革派」の抗争	
71 郭沫若「李白と杜甫」、章士釗「柳文指要」出版。「智をもって威虎山をとる」〈1970年上演本〉出版、先驗論、天才論批判 72 革命現代京劇「龍江頌」上演。「西遊記」「三國志」「紅樓夢」「水滸傳」發賣 73 「批林批孔」運動はじまる。秦始皇帝を肯定的に評價 74 「批林批孔」運動の本格化、ベートーベン批判、アントニオ＝批判、反潮流の推進、「三たび桃峯に上る」「園丁の歌」批判 75 プロ獨裁理論學習、毛澤東「水滸傳」批判を指示、教育改革の大辯論はじまる 76 「人民文學」「詩刊」復刊、毛澤東の詞二首公表	林彪失脚 ニクソン訪中、日中國交回復 中共第十回全國大會、（1973. 8） 鄧小平復活 第四期人民代表大會 周恩來死去、天安門事件、朱德死去、毛澤東死去、四人組逮捕
VI 華國鋒體制はじまる	
77 「萬水千山」「東方紅」「園丁の歌」上演、映畫「創業」上映、四人組の文藝彈壓を非難	

中國文化界の動向 (一九七二・二～一九七七・六)

凡 例

- 一、本年表は、拙稿「現代中國の歴史性」の補足、参考として作成した。
また、拙著『現代中國の文學 展開と論理』（研究社 一九七二年二月）
附録「現代中國の文學Ⅱ年表」（一九四九～一九七二）につづくものである。
中國で發表、掲載されたすべての論文、事項を網羅することは意圖していない。
- 一、年表内の事項見出しは、その事項にかんする最初の論文のまえに
出した。論文は發表年月日順に配列したが、若干、順序を變更して、事項見
出しにまとめたばあいもある。
- 一、雑誌はその奥付けに記された出版（Ⅱ發行）年月によったが、一九七六
年十月以後、奥付けの表示どおりに出版されかどうかはつかみにくい。
- 一、略記號

- 紅 Ⅱ 紅 旗 人 Ⅱ 人民日報
光 Ⅱ 光明日報 學 Ⅱ 學習與批判
歷 Ⅱ 歷史研究 文 Ⅱ 文 物 人文 Ⅱ 人民文學
朝 Ⅱ 朝 霞 學報 Ⅱ 北京大學學報（社會科學版）
北大 Ⅱ 北京大學 清大 Ⅱ 清華大學
紅 Ⅱ 『紅旗』第一期
紅 Ⅱ 12・4 Ⅱ 『紅旗』第二三期 Ⅱ 十二月四日出版（注記しない
ものは、その月の一日出版）
人 Ⅱ 1・1 Ⅱ 『人民日報』一月一日號
（Ⅱ）Ⅱ 作成者による注記

（太字の洋數字は年・月・日）

年月	動 向 ・ 論 文	作 品 ・ 單 行 本	参 照 事 項
1971年 1 2	<p>▼路線教育提唱される 中國共產黨北京新華印刷廠委員會「二つの路線闘争教育をし っかりとつかめ」（紅1）</p> <p>▼學習運動はじまる 短評「眞剣に讀書し、努力して世界觀を改造せよ」（紅2）</p> <p>▼陳伯達批判はじまる（名ざしせず） 北京大學聞軍「路線闘争は休戦してはならない—王明、劉少 奇、周揚一味が「國防文學」を鼓吹した反動性」（紅2） 李靜陽「原則の闘争は、必らず徹底的におこなえ—劉少奇、 周揚一味が二つのスローガンの論争は「休戦」すべきだと鼓</p>		<p>1・北京軍區改組</p> <p>2・林彪「五七一」工程紀要」 を作成</p>

吹した陰謀を徹底的にばくろせよ」(光5・25)

4

▼『紅旗』毛澤東著作を學習の論文連續掲載、以後、觀念論的「先驗論」、「唯生產論」、「唯意志論」、ブルジョア的「ヒューマニズム論」、「階級闘争消滅論」、「路線闘争消滅論」を批判(筆者は各省・市の黨委員會著作小組)

中共北京市委著作小組「觀念論を批判する鋭い武器——農村調査序言と跋を學習して」(紅旗4・4・1)

▼王明、劉少奇のたぐいのニセ・マルクス主義者は……つねにマルクス主義の顔つきをして、勞農幹部と天真爛漫な青年をあざむき、おどした。暗に陳伯達を批判し、文革の再検討を求めている」

5

▼「眞人眞事」とらわれず創作せよ、との主張出現
任文欣「文藝創作は「眞人眞事」の制限を受けるな」

(光5・26)

10

丁學雷「劉少奇の反動ヒューマニズム論を批判せよ」(紅11、人10・23)

12

宇文平「『眞實を描け論』を批判せよ」(人12・10)
遼寧大學中文系革命大批判寫作小組「眞人を描け」鼓吹者の反革命的禍しき心をあばく——周揚のたぐいの政治的ベテラン師の反動的謬論」(光12・19)

▼毛澤東の胡風批判論文を學習

北京市委著作小組「社會主義革命時期の階級闘争の歴史的經驗を記憶せよ——『胡風反革命集團にかんする材料』をかさねて讀む」(紅13・12・4、人、光12・27)

4

中共中央、「批林整風匯報會議」(九十九人會議)
・「ビンボン外交」はじまる

6・3

林彪以後公式の場に出現せず

▼「批修整風」が運動の主要な題目となる(6月以降)

7

北京放送、ニクソン・アメリカ大統領が來年五月までに訪中と發表(アメリカと同時に發表)

8

全國各省に黨委員會成立おわる8・9 毛澤東、全國を巡視

9・8

林彪、武裝政變を發動

10

國慶節パレード中止(のちに、9・12、モンゴルで林彪ら墜死と公表) 國連總會、中國の一切の權利の回復と蔣介石の代表の追放を決議

10

豫告された十全大會 開催されず(豫告は70・9)

▼

前年度にひきつづき革命模範劇の定本を發表(次年度にひきつづ)

7

『革命現代京劇 智をもつて威虎山をとる』(一九七〇年七月上演本)(人民出版社)

8

江青撮影の林彪の肖像寫眞發表
林彪副主席(『中國畫報』七・八月合併號、日本語版『人民中國』10)

9

文革後、最初の出版物
章士釗『柳文指要』(中華書局)
『魯迅雜文書信選』(編者・出版社未詳)

10

郭沫若『李白と杜甫』(人民文學出版社)

1972年				
1	3	4	7	8
<p>▼人民大衆の利益優先をうたった「現代京劇」出現（この評論では、「革命模範劇」と呼ばず、しかも高く評價）</p> <p>丁學雷「龍江風格」萬古常青なり」（紅1）</p>	<p>蔚青「社會主義文藝のまた一つの新しい花」（紅3）</p> <p>『龍江頌』についての評論、江青の功績にふれず</p> <p>雷軍「なぜ、いくらかは魯迅の雜文を讀めと提唱するか」（紅3）</p>	<p>▼世界史の讀書をすすめる</p> <p>史軍「いくらかは世界史を讀め」紅4、光4・8</p>	<p>▼「批林批孔」運動への布石、郭沫若論文發表</p> <p>郭沫若「中國古代史の時期區分問題」（紅7）</p> <p>哲軍「哲學史から天才論の反動性をみる」（光7・13）</p>	<p>▼林彪批判（名ざしせず）</p> <p>沈鈞「毛澤東戰略思想の偉大な勝利——遼瀋戰役の作戰方針にかんして」を學習する」（紅8・11・8・1）</p> <p>「劉少奇のたぐいの右翼ひよみ主義路線」劉少奇のたぐいの修正主義政治路線と軍事路線」と指摘</p> <p>紀平「社會主義時期の階級闘争の法則を掌握せよ」（紅8）</p>
<p>1 『カゴ半分の落花生』へ一九七二年一月試験上演本（光1・28）（浙江省でのこころみ）</p> <p>2 『革命現代京劇 海港へ一九七二年一月上演本』（紅2）</p> <p>3 『革命現代京劇 龍江頌へ一九七二年一月上演本』（紅3）</p> <p>4 『革命現代京劇 赤色娘子軍へ一九七二年一月上演本』（紅4、人4・4）</p> <p>5 『魯迅雜文書信選 續編』（編者、出版社未詳）</p> <p>浩然『輝やかしい大きな道』（原文『金光大道』へ第一部）（人民文學出版社）</p>	<p>1 中共中央、林彪のクーデター計畫書「五七二工程」紀要」を黨内に配布</p> <p>1・6 陳毅死去</p> <p>1・10 陳毅追悼會、毛澤東出席</p> <p>2 毛澤東、ニクソン大統領と會談</p> <p>▼失脚幹部の復活を示唆</p> <p>4・24 「人民日報」社説「前を懲しめて後を慰ましめ、病を治して人を救う」</p> <p>5・1 周恩來、「龍江頌」を観劇</p>	<p>▼林彪墜死事件を公表</p> <p>7・27 北京とアルジェで中國外交官が言明</p> <p>「毛澤東、スリランカ、パンダラナイケ首相（6・28）、フランス、シェーマン外相（7・10）に語る」</p> <p>7・80 毛澤東、中南海で上海京劇團の「龍江頌」劇團員を接見（テレビで四回、映畫で一回みたと語る）</p>		

1973年				
4	3		12	10
<p>▼社会主義の新生事物を限定評價し、林彪を劉少奇より悪いとする論文、出現</p> <p>紀平「本質上から問題を觀察せよ」(紅3)</p> <p>中共雲南冶金第三礦委「黨の基本路線を運用して修正主義批判を深めよ」(紅4)</p> <p>▼毛澤東、『哲學研究』、『歴史研究』などの復刊について指示〔指示の文章は未發表—人77・1・11〕</p>			<p>▼教育改革再検討のうごき</p> <p>周培源「綜合大學理科教育革命にたいする若干のみかた」(光10・6)</p> <p>▼周恩來にたいするあてこすり出現</p> <p>孟雲來「キリンの皮の下から馬脚をあらわしめよ—魯迅が反革命二面派をあばいた方法を學ぶ」(人10・19)</p> <p>解放軍某部范咏才「われはわれを知る」(人10・19)</p> <p>▼「批林批孔」運動への布石、楊榮國論文發表</p> <p>楊榮國「春秋戰國時期の思想領域における二つの路線の闘争—儒法論争から戰國時期の社會變革をみる」(紅12)</p>	
<p>4 復旦大學・上海師範大學中文系『魯迅小説詩歌散文選』(上海人民出版社)</p> <p>5 潘富恩 甌群『中國古代の二つの認識論の闘争』(上海人民出版社)</p> <p>6 復旦大學・上海師範大學中文系『魯迅雜文選』(上海人民出版社)</p> <p>北京魯迅博物館『魯迅手稿選集三編』</p>			<p>11 『革命現代京劇 白虎連隊を奇襲する—一九七二年九月上演本』(紅11、人11・3)</p> <p>11 北大哲學系哲學史組『哲學史上の先驗論』(人民出版社)</p>	
<p>4 鄧小平復活、肩書は副首相</p> <p>6 “四人組”が『歴史研究』に</p>			<p>9 「日中共同聲明」調印</p> <p>10 江青、外國の賓客のままで周恩來に反對、簡化字をのしる(人77・2・22にみえる)</p>	

▼「反潮流」のうごきはじまる
 「人を深く反省させる答案」(人8・10、光11、原載1遼寧日報7・19)「張鐵生、大學入試の答案を白紙で提出、かつ試験制度を批判した短文を記す」
 程晋「反潮流の革命精神をもつべきである」(人9・19)「これらのうごきを評價」

▼孔子批判はじまる

楊榮國「孔子——頑固に奴隸制を維持した思想家」(人8・7)
 (これは、林彪にふれていない)

▼孔子批判と林彪批判を結合、キャンペーン展開
 唐曉文「孔子は『全民教育家』か」(人9・27)

▼秦の始皇帝を肯定的に評價、法家路線とする
 施丁「焚書坑儒」辨(人9・28)

▼創刊の『學習と批判』、儒教批判と法家肯定をはじめる
 石命「尊儒反法を論ず」(學119・15)「10・に紅、人に轉載」

王運熙ほか「屈原の儒尊反法思想試論」(學1)
 史尚輝「『三不足』から王安石の法學思想をみる」(學1)
 石一歌「魯迅世界觀の轉換を論ず」(學1)

徐緝熙「『紅樓夢』を評す」(學2110・16)

康立「『封建論』を讀む」(學2)

翟平「孟子——奴隸制復辟の頑固派」(學2)

景池「春秋戰國、儒法經濟思想對立の實質」(學2)

石命「尊儒反法を論ず」(人10・25、紅10)

李定生「荀子の哲學思想を論ず」(2110・16)

高亨「孔子が少正卯を殺したのを論ず」(光10・31)

陝西師範大著作組「秦始皇帝は斷乎として奴隸主復辟に打撃をあたえた政治家である」(人10・31)

現代中國の歴史性

(文物出版社)

7 『革命現代京劇 平原作戰(一九七三年七月上演本)』(紅7)

楊榮國主編『簡明中國哲學史』(人民出版社)

楊榮國『中國古代思想史』(一九六五年版の第二版)(人民出版社)

『四部古典小說評論』(人民文學出版社)「三國演義」「水滸」「西遊記」

『紅樓夢』を評論

9 趙紀彬「孔子が少正卯を誅した問題にかんして」(人民出版社)

復旦大學・上海師範大學中文系『魯迅書信選』(上海人民出版社)

▼上海で『學習と批判』創刊(9・15)
 (題字は江青の揮毫とおもわれる)

10 任繼愈主編『中國哲學史簡編』(人民出版社)

『革命現代京劇 杜鵑山(一九七三年九月北京京劇團上演本)』(紅10)

ついで指示、毛澤東の方針をゆがめる

8

中共十大大會(周恩來「政治報告」、王洪文「規約改正報告」、林彪・陳伯達除名)

(十大大會開催をひかえ、

四人組は王洪文を毛澤東のもとに派遣して周恩來を中傷、周恩來をしりぞけて四人組によって組閣しようとしたが、毛澤東に叱責された)

▼民兵の強化はじまる

9・28 『人民日報』社説「民兵をしっかりとれ」

10 江青、『歴史研究』編集部にマンガを贈る

11

▼羅思鼎をペンネームとする論文、はじめて發表

羅思鼎「秦王朝の樹立過程における復辟と反復辟の闘争——かねて儒法闘争の社會的基礎を論ず」(光11・9、紅11、〔北京周報〕74・4・30號に日本語譯を掲載)

李慶霖「反潮流を語る」(紅11)〔李は下放青年の父親で毛澤東に直訴の手紙をだし、有名になった〕

『中國近代史叢書』編者「ブルジョア階級と儒法論争」(學3||11・16)

金冲及「『天演論』と中國近代の反孔思潮」(學3)

沈漢「反儒尊法から尊孔讀經へ——章太炎思想の變遷過程を試論する」(學3)

12

▼馮友蘭、自己批判を發表、孔子評價を訂正

馮友蘭「孔子にたいする批判とわたしの過去の尊孔思想にたいする自己批判」(光12・3)

馮友蘭「復古と反復古は二つの路線の闘争である」(光12・4)

北大、清大大批判組「百餘年來の反孔と尊孔の闘争」(人12・7)

▼小學生の反潮流

小學生・黃帥の投書と日記抜萃(人21・28、原載||北京日報12・12)

康立「漢代の儒法大論戰——『鹽鐵論』を讀んでの札記」(學4||12・16)

郭紹虞「漢代の儒法の争いから王充の法學思想を語る」(學4)

鍾晋文「近代中國の反孔と尊孔の何回かの闘争」(光12・31)

11 全國連環畫、中國書展、全國寫真藝術展

12 魯迅先生記念委員會『魯迅全集』(二)

十卷、人民文學出版社、上海重排第一版)

12 毛澤東、ピラントラ、ネパ

ール國王夫妻と會見

▼自力更生方針、ふたたび強調される
魏東奎「獨立自主、自力更生の方針を堅持しよう」(紅1)

▼中學生が答案の共同作成を主張
「なぜぼくは一日のうちに品行、學業」ともに劣る」になっ
たのか」(人1・10)
康立「孔子、儒家と禮」(學111・16)

▼裏口入學の大學生、退學を申請
「ある退學申請報告」(人1・18、光19)

▼絶對音樂、ベートーベン批判
朝華(中央民族學院藝術系)「絶對音樂には階級性はないか」
(人1・14、光17、原載北京日報1・6)

▼アントニオニ、映畫『中國』批判
人民日報評論員「惡辣な下心、卑劣な手法」(人1・31)

▼批林批孔、本格化、「克己復禮」に目標を定める
人民日報社説「批林批孔の闘争をさいごまでおこなえ」
(人2・2)

人民日報社説「克己復禮」を批判せよ——林彪が愚かしく
も資本主義の復活を圖った反動綱領」(人2・20)
北大、清大批判組「林彪と孔孟の道」(學報112、紅2)

哲學系七〇級學員「『論語』批注選」(學報1)

康立「孔子と儒家の徒は政治ベテナーである」(學211紅3、
光3・9)「光明日報」轉載にあたり「儒家の徒」を「林
彪」と訂正

馮友蘭「個人的體得から批林批孔と知識分子を團結、教育、
改造することの關係を語る」(光2・1)

▼湘劇『三たび桃峰に上る』批判
初瀾「『三たび桃峰に上る』を評す」(光3・1)
李時「秦の六國統一に決定的役割を果たしたのはなにか」(紅
3、光3・11)

現代中國の歴史性

1 『五四らしい反動派、地主ブルジョア學者尊孔復古言論輯録、附ソ修およびアメリカ、日本帝國主義分子の孔子に關係する反動的言論』(人民出版社)

1 中央黨校編寫組編『魯迅が孔孟の道を批判した言論摘録』(人民出版社)
▼『學習と批判』誌名の題字を變更
(111・18)
▼上海で文藝雜誌『朝霞』創刊(1・20
11推定)

2 短篇小説「生命」を發表(文革を否定したものとして批判をくわえて發表)(朝2112・20)

▼上海労働者の批林批孔のルポタージュ
發表
段瑞夏「怒吼——上海労働者批林批孔載闘
巡禮」(朝3113・20)

1・22、28 江青、二度にわたって海軍と西沙島の軍民に手紙をだす

1・24、25 「萬人大會」(黨軍、政府の中央機關の幹部を集めて開催、清華大學・遲群が報告「裏入學」などの問題をとりあげて、周恩來にたいし猛烈な攻撃をくわえた)
1・25 江青の批林批孔指示、中共中央の文件として出る

2 毛澤東、ザンビア大統領夫妻と會見、アルジェリア革命委主席兼首相・ブーメディンと會見

2 江青、王洪文が體育部門にさわざを起こそうとした

3 毛澤東、タンザニア總統・ニエレレと會見

▼柳下跖(盜跖)の評價たかまる

柏參「奴隸蜂起の領袖、孔老二を怒り斥く」(光3・9)

唐曉文「柳下跖、孔老二を痛罵す」(光3・14)

紅宣「克己復禮」は復辟逆行の綱領である」(學3||3・18)

▼陳伯達批判

方海「新人生觀の創造」を評す」(學3)

(資料)「機會主義路線のかしらの尊孔言論輯録」(學3)

▼批判批孔、周恩來にたいする個人攻撃露骨になる

北大、清大批判組「孔丘そのひと」(紅4、人4・1)

上海時計部品廠拍槽下小組「『ゴータ綱領批判』を學習し、

「克己復禮」を深く批判する」(學4||4・20)

復旦大哲學系大批判組「林彪の「天才論」と孔子の「天命

論」(學4)

羅思鼎「『呂氏春秋』を評す」(光4・6)

木卯「どのように宋江を評價するか——『水滸』評論における若干の異なる觀點を綜述する」(學4)

梁效「『鹽鐵論』を読む——西漢中期の儒法兩家の一場の大論戰」(紅5)

餘凡「林彪の反革命策略の破産——黒いノートを批判する」(紅5)

孔凡倫「孔老二の「人を愛せよ」とは人を食うことである」(文5)

史衆「五四時期批孔鬭爭の歴史的經驗」(紅5)

康立「林彪はなぜ董仲舒をほめそやしたか」(學5||5・20)

石一歌「再び孔家店をたたく——『魯迅傳』選載」(學5)(連載開始)

▼マルクス主義理論隊伍の強化よびかけ

(短評)「マルクス主義の理論隊伍を強化せよ」(紅6)

▼『學習と批判』ふたたび題字變更、海外にたいする定期購讀開始(4||4・20)

6・20~7・23 『光明日報』に法家著作の譯注掲載『商君書』更法、李斯『逐客を諫むる書』、曹操『屯田令』、『賢

4 毛澤東、カンボジア代表團と會見

▼周恩來入院説つたわる

6 江青、天津におもむき畫策、儒法鬭爭史報告會をひらき講話をおこなう

▼法家著作の研究よびかけ

人民日報社説「儒家の書物を批判し、法家の著作を研究せよ」
(人6・18)

北大谷滋「法家代表人物紹介」(人6・16、光・17)〔少正

卯、李悝、吳起、商鞅、荀況、韓非をとりあげる〕

北大、清大大批判組「法家代表人物紹介」(學報6、人6・

19)〔秦始皇嬴政、李斯、馮高祖劉邦、漢文帝劉恒、景帝劉

啓、賈誼、晁錯をとりあげる〕

史鋒「抗日戰爭時期、尊孔と反孔、二つの路線の闘争」(學

6・16・20)

龔杰「戴季陶主義と孔孟の道」(學6)

▼荀子の評價たかまる

吉林大大批判組「人定まりて天に勝つは荀子の革命哲學であ
る」(光6・21)

▼革命模範劇、江青の評價たかまる

初瀾「京劇革命十年」(紅7、人7・5)〔江青「京劇革命を語
る」(64・7)は修正主義文藝路線に宣戦した檄文である〕

廖井飛「『呂氏春秋』を評す」(光7・10)

趙家驥「荀況が孟軻にたいし教育路線上すすめた闘争」(光
7・13)

方海「聲勢さかんな大衆的批林運動——『湖南農民運動觀察報
告』における批孔論述を學習する」(學7・17・18)

▼『三字經』など舊中國の兒童用の教科書を批判

翟青 焦平「『三字經』——孔孟の道を宣揚する黒い標本、孫
玉瀾「『二十四孝圖』から孔學の虚偽性をみる」(學7)王國
學はか「歷代反孔笑話十五則——古代の笑話から孔丘およびそ
の門徒の醜惡な形象をみる」(學7)

哈濱師範學院歷史系「黃克昌「曹操の尊法反儒を論ず」(學
7)

張王安「三國時期法家思想の實踐者——曹操」(光7・17)
北大哲學系七二級勞農兵學員集團編著「儒法闘争資料」(二)

現代中國の歴史性

を舉ぐるに品行に拘わる勿れの令、

『韓非子』孤憤篇——以上、南開大學南
鍾。「封建論」を讀む——北京自動車
製造工場勞働者理論組。

7・75・8

北京大學哲學系工農兵學編
『法家の著作をいくらかは讀め』(歴
史叢書)一、二四、出版

7

周恩來、病院でジャクソン・
アメリカ議員と會見

2(21) (光7・18・22・23)

▼『光明日報』回收事件發生

南開大學南鍾「韓非子・孤憤」譯注 (光・27)

▼湘劇『園丁の歌』批判おこる (華國鋒にたいする攻撃)

湘暉「湘劇『園丁の歌』を評す」 (光8・3)

初瀾「どの教育路線のために賛歌を唱うのか?——湘劇『園丁の歌』を評す」 (光8・11)

▼秦の失敗と呂后の功績をたたえた論文出現

羅思鼎「秦漢のさいの階級闘争を論ず」 (紅8・光8・6)

翟平「儒法闘争は、犬が犬をかむ」であるか? (紅8)

▼武則天讚美の論文、出現

清大幼稚園労働者理論小組「武則天にたいするいくつかの見方を語る」 (學報118・20)

梁效「なすところある女政治家武則天」 (學報4)

▼林彪の軍事路線批判

沈思「林彪の『六つの戦術原則』を深く批判せよ」 (紅8)

餘子道「抗戦初期の戦略轉換から林彪の右傾軍事路線をみる」 (學8118・20)

康立 史鍼「商鞅の歴史觀を論ず」 (學8118・20)

王少普 李長春「李斯を論ず」 (學8)

王榮剛ほか「『史綱評要』から李贄の尊法反儒思想をみる」 (學8)

申越「魯迅小説の反孔思想を論ず」 (學8)

嚴己「『三國演義』の尊孔反法思想」 (學8)

楊榮國「先秦儒法兩家の思想は根本的に對立していたのである」 (光8・24)

▼批林批孔のゆきすぎを戒める論文出現

齊力「革命的團結を堅持し、批林批孔を深めよ」 (紅9)

梁凌益「先秦法家思想の集大成者、『韓非子』を評す」 (紅9・光9・11)

8 北京魯迅博物館「魯迅手稿選集四編」 (文物出版社)

▼呂后の玉璽について報道

劉乃物「西漢呂后とその玉璽」 (光8・6)

劉仙州「儒法闘争のわが國科學技術發展にたいする影響」

(學報4、光9・9)

薛慶松「人民大衆は歴史を創造する動力である——勞働人民と

儒法闘争の關係を試論する」(學9Ⅱ9・20)

史尙輝「韓非——戰國末期の反孔主將」(學9)

翟青「三國志」郭嘉傳を讀む」(學9)

餘學軍「東北解放戦争における二つの軍事路線の闘争——東北解放戦争における林彪の右傾軍事路線を批判する」(學9)

▼「儒法闘争に學べ」運動はじまる

梁效「儒法闘争の歴史的經驗を研究せよ」(紅10、光10・13)

俞彤「億萬人民の反修防修の偉大な實踐」(紅10・19)

▼老子の再評價

翟青「『老子』は兵書である」(學10・20)

方海「思想發展の源と流を略談する——階級闘争の關係を試論する」(學10)

衛今「鐵器の發展と戰國秦漢の階級闘争」(學10)

翁俊雄「『聖人』か、偽君子か」(人10・31)

高亨「孔子が少正卯を殺したことを論ず」(光10・31)

北大儒法闘争史編著小組「儒法闘争史概況(初稿)」(學報5Ⅱ10月26Ⅱ12月)

▼周恩來批判と支持の論文、それぞれ出現

黎新「團結と闘争の關係を正しく處理せよ」(紅11)

武振軒「客觀情況を正しく評價せよ——毛澤東軍事著作を學習したさやかな理解」(紅11)

羅思鼎「北宋時期の愛國主義と賣國主義の闘争を論ず」(紅11)

▼法家指導集團の形成を評價し、呂后を賞讃した論文出現

翟青「西漢初期の政治と黃老の學」(學11Ⅱ11・20)

施丁「韓信批判」(學11)

郭志「西漢前期、復辟の主要な危險」(學11)

現代中國の歴史性

唐曉文『勞働人民反孔闘争史話』
(人民出版社)

秋・江青、『中國攝影』編集部に寫眞と自作の詩をおくりとどける

11 廣州市内に李一哲と署名の大字報出現、「社會主義の民主主義と法制にかんして——毛主席と四期人代に獻ず」(11・10)、「七三年九月から貼りだされたものの決定版」

11 北京大學社會科學代表團來日

<p>1</p> <p>胡申生ほか「女皇帝武则天」『儒法闘争史話』連載の一」(學11・1・10)</p>	<p>12</p> <p>▼『三字經』をさらに批判 合肥市杏花村公社王玉榮 李敬「『三字經』は反動支配階級のために奉仕したものである」(紅11)</p> <p>上鋼五廠八車間黨總支委員會「眞剣に讀書學習し、批林批孔を深めよう―われわれはどのように『鹽鐵論』を研究したか」(學12・12・14)</p> <p>李興斌「泥水の戦を論ず」(學12)</p> <p>江西省婺源縣文化站「道學家朱熹の眞面目」(學12)</p> <p>曉宛 翟海「沈括と王安石變法」(學12)</p> <p>▼康熙帝、曹操を評價した論文出現 梁效「康熙の國家統一擁護とツァーロシア侵略に抗爭する闘争について論ず」(學報12)</p> <p>安徽師大中文系著作組「曹操の法治路線を論ず」(歴1・12・20)</p> <p>田餘慶「曹袁闘争と世家大族」(歴1)</p> <p>梁效「農民戦争の偉大な歴史的役割―『中國革命と中國共產黨』を學習しての會得」(歴1)</p> <p>天津市實坻縣小靳莊大隊理論小組「農民反孔闘争史話」(歴1、續11・12・20)</p> <p>▼張春橋を張良になぞらえた論文出現 康立「張良の政治的立場の轉換を論ず」(歴1)</p> <p>楊榮國「桑弘羊の哲學思想」(歴1)</p> <p>周一良「諸葛亮と法家路線」(歴1)</p> <p>▼儒法闘争を文藝史へ 江天「文藝史における 儒法闘争のいくつかの問題を研究せよ」(人12・5)</p>
<p>1</p> <p>▼映畫『創業』全國で上映 法家詩文選讀はじまる</p>	<p>12</p> <p>天津市實坻縣小靳莊大隊理論小組 『我國農民反孔闘争史話』(人民出版社)</p> <p>12・16 映畫『創業』完成、審査を求めて上層部に送る</p> <p>▼『歴史研究』復刊(七四年第一期)12・20</p> <p>▼安作璋『劉邦と呂雉』(山東人民出版社)</p>
<p>1</p> <p>中共十期二中全会(鄧小平、副主席、政治局常務委に昇格)</p>	<p>12</p> <p>解放軍、一級軍區の司令員、政治委員大異動(七五年一月一日、あきらかにされる)</p> <p>12・26 毛澤東、理論問題にかんする指示を發す「レーニンはずなブルジョア階級にたいして獨裁をせよといったのか、この問題ははっきりさせなければならぬ。……」</p>

申越「歴史人物にたいしては分析をしなければならない——三國時代の法家人物を略論する」(學1)
孫樂英、陸麗芳「歴史上の儒家の婦人にたいする迫害を論ず」(學1)
上海焦化廠 勞初「名家は法家の同盟軍である——公孫龍の『白馬は馬に非ず』説を議論する」(學1)

▼唐太宗をとりあげる
紅宣「唐太宗の民族政策試論」(學2 11・2・10)

▼法家の軍事路線を評價
羅思鼎「淮西の捷を評す——『舊唐書』李愬傳を読む」(學2)

▼毛澤東の理論問題にかんする指示を公表
プロレタリア獨裁にかんする理論學習運動、開始
「マルクス・エンゲルス・レーニンプロレタリア獨裁を論ず」・人民日報、紅旗編者按語」(人、光2・22、紅3)

▼曹操評價論文

唐長孺「曹操法家路線の形成を論ず」(歴1)
北京市總工會労働者理論小組 劉光「曹操法家路線形成の歴史的條件」(歴1)
首都機械廠労働者歴史研究小組・北京師範學院 商軍「曹操の屯田にたいするいくつかの考察」(歴1)
梁效「陳勝、吳廣農民大蜂起の歴史的功勳」(歴1)
吉林大學劉雲才「荀況は儒家であるとの説を駁す」(歴1 11・20)

「マルクス・エンゲルス・レーニン、プロレタリア獨裁を論ず」(人、紅、編者まえがき)

▼ブルジョアの權利について批判強化
姚文元「林彪反黨集團の社會的基礎を論ず」(紅3、人3・1)

翟青「古い新聞を読んで感あり」(學3 11・3・16) 〔三反、五反運動をとりあげる〕
張春橋「ブルジョア階級にたいする全面的獨裁を論ず」(紅

現代中國の歴史性

文曉恩「青年詩人李賀」(朝1・10)

2・11 映畫『創業』上映中止
2 文物出版社「魯迅批判孔孟之道手稿選編」(文藝出版社)

▼ソビエト文藝批判
ソ連の短篇小説「低い聲で話すひと」を批判(朝3 11・3・20)

四期全國人民代表大會(周恩來「政治報告」、張春橋「憲法改正報告」、新憲法採擇)
1 王洪文、張春橋、江青、オーストラリア共產黨議長と會見
1・10 江青、北京某部隊へゆき歴史を語り、呂后をほめ、李商隱「賈生」の詩をくちづさむ

3 江青、北京香山招待所で外國駐在の外交官に講話
▼毛澤東、「四人組」に批判的となる

4、人4・1)

翟青「都市社會主義教育運動にたいする回顧」(學4||4・16)

紅宣「レーニンが十月革命後にブルジョアの權力を制限した闘争」(歷2||4・20)

▼李商隱の法家的傾向を評價

梁效 聞軍「李商隱の『無題』詩を論ず」(歷2)

詹立波「孫臏兵法」初探」(歷2)

楊寬「戰國時代・齊國復辟の歴史的教訓」(歷2)

史家「西漢王朝の劉濞ら復辟勢力との闘争」(歷2)

▼毛澤東、經驗主義だけに反對するのはよくないと指示

「いいかたとしては、修正主義に反對する、經驗主義と教條主義に反對することを含めて、というべきであるようだ」

▼「四人組」經驗主義を批判

紅旗短評「理論と實踐の結合からしっかりと學び、通じるようにせよ」(紅4)

▼三反、五反を回顧

翟青「三反」「五反」運動を回顧する」(紅4)

方海「ブルジョア階級の精神的な鎖うちくだけー『共產黨宣言』を學習してえたこと」(學5||5・18)

▼労働者の理論學習

本誌通信員、記者「理論が大眾によって掌握されたときー上鋼五廠でプロ獨裁理論を學習するのをみて」(學6||6・18)

上海汽船機廠「ヘーゲルの孔學にたいする批判を評す」(學9)

9)

梁效「等級制度と林彪の資本主義復辟の陰謀」(歷3||6・20)

▼張春橋、姚文元(3||4月)

毛澤東、周恩來に不満をいだく。(人民文學71・5)「ルブルグ」から出る」張春橋が提案して書かせたもの」などを雑誌に掲載

4・2 董必武死去

4・23 毛澤東、新華社の文件に批示、經驗主義にたいしてのみ反對することを批判

5・3 政治局會議。毛澤東出席し、四人組の處理について指示

5 中國文字改革委「第二次漢字簡化方案(草案)」を國務院に提出

▼毛澤東、傳言により國家體育委の某に指示、いちいち江青、王洪文にうかがいをたてなくてもよい、という。

守綱 李石叔「秦と漢初の地主階級と封建所有制」(歴3)

中共天津市委黨校理論組「ホンモノとニセのマルクス主義の試金石—國際共產主義運動におけるプロレタリア獨裁問題をめぐる闘争」(一) 歴36・20、(二) 歴48・20

任志高「労働者階級の歴史的使命を銘記せよ」(學77・18)

▼毛澤東、江青らの『創業』批判に反對の批示(7・25)、「對外公表は人76・11・5任平論文」

▼毛澤東、『水滸傳』批判を指示(8・14、公表89・4) 解放軍某部 劉禎祥 聶敬華『水滸』は投降主義宣揚の反面教材である」(光8・23《文學欄》創刊號)

竺方明『水滸』を評す」(人8・31)・「魯迅『水滸』を論ず」(ク)

上海ハミガキ粉廠青年労働者 郭成蘭「文學史上における尊儒反法思潮を批判する—唐代の古文運動を試論する」(學88・8・18)

劉大杰「唐代社會と文學的發展—『中國文學發展史』第二册第一章」(學8)

肖斌 金力「ふたたび『清官』論を批判する」(光8・15)

齊亮曉「法家路線と漢初の安定局面」(歴48・20)

雲南大學 馬曜「諸葛亮が南中を安定したことを論ず」(歴4)

李思延「游侠批判」(歴4)

洪城「先秦法家の戦争準備思想を試論する」(歴4)

莊寧「王陽明の反革命の兩手とその『心』學—王陽明が廣西瑤・壯族人民蜂起を鎮壓した罪惡の相貌をあばく」(歴4)

紅旗短評『水滸』にたいする評論を重視せよ」(紅9、光8・31)

▼『水滸傳』宋江の投降主義批判さかんになる
方岩梁「人民に投降派であると知らしめよ—魯迅の『水滸』の論述を學習する」(光9・2)

現代中國の歴史性

7 映畫『海霞』、黨中央により上映を許可される。四人組これを妨害

8 映畫『春苗』上映開始「はだしの醫者を主人公とする—趙安亭これを批判 11月18日」

9 馮友蘭『孔丘を論ず』(人民出版社)

▼鄧小平、活躍
527 鄧小平、「三項指示」を「一時期の綱」とする

▼「右翼まきかえし風」さかんになる(7、8、9月とつづく)

8 鄧小平「三項の指示」を「一切の工作の綱」とする

829 鄧小平、「三項の指示」を「全黨、全軍、全國各項の工作の綱」とする

8 鄧小平、訪中の日本新聞記者に國際情勢を語り、第三次世界大戰は不可避であると力説

▼華國鋒抬頭
9210 農業は大寨に學べ全國會議(10・華國鋒報告公表810・21。鄧小平、江青の報告

四三三

人民日報社説『『水滸』にたいする評論を展開せよ』（人、光9・4）

北大、清大批判組「投降主義路線の賛歌——『水滸』の農民蜂起にたいする歪曲を批判する」（人9・5）

雅林「まぎれもない投降派」（人9・5）

翟青「『水滸』の投降主義を評す」（學9・9・9）

魏永征「ただ貪官に反し、皇帝に反せず」を評す」（學9）

陳大康「阮氏三兄弟を論ず」（學9）

杜恂誠「晁蓋を論ず」（學9）

徐震「『水滸』改名の啓發」（學9）

復旦大農學員 仲富蘭「宋江の反詩」（學9）

山東利津縣回鄉知識青年 趙安亭「叛徒の頌歌」（光9・11）

柏青「投降派宋江を評す」（光9・17）

安徽勞動大學 江南「宋江はどのように投降主義をやったか」（人9・24）

安群「投降派宋江を評す」（光10・6）

楊榮國「『水滸』と宋代の階級闘争」（光10・10）

羅思鼎「三百年來のひとつの公案——金聖歎が『水滸』を腰斬したことおよびそれが惹起した論争」（學10・10・14）

翟青「宋江と高俅の闘争を論ず」（學10）

餘秋雨「胡適の『水滸』考證を評す」（學10）

徐緝熙「なにを賞賛し、なにに反對するか——『水滸』の投降主義本質を評す」（學10）

章智明 完紹元「吳用試論」（學10）

石川「宋江「山に上る」を評す」（學10）

「魯迅の『水滸』にたいする評論」（歷5・10・10・20）

洪廣思「『水滸』を利用して投降派を識別せよ」（歷5）

柏青「『水滸』はなぜこのように宋江を塑造したか」（歷5）

石言「貪官に反し皇帝に反さず、ただ投降す」（歷5）

復旦大學歷史系學員ほか「『天に替りて道を行う』は農民革命にたいする反動である」（歷5）

聞軍「仕途捷徑」析」（歷5）

▼毛澤東、魯迅の著作について指示（11・1）（周海嬰の手紙に同意したもの。魯迅著作の出版、研究の偏向を正す。人習・5・21人民文學出版社魯迅著作編集論文により公表）

はいずれも公表されず」

10・7 鄧小平の指導のもとに、
「全黨各項工作の總綱定稿」
できる

▼周恩來に攻撃
10・25 上海『文匯報』、周恩來攻撃の文章を掲載

▼教育革命について「大辨論」はじまる（各大学で大字報さん、清華大、劉平が毛澤東にてがみをおくり、毛澤東はこのてがみを大学におくりかえした）

羅思鼎『『水滸』二十世紀三十年代にあり』（學11Ⅱ11・14）
康立『『水滸』の明末農民戦争における反動作用を論ず』（學11）

洪延春 杜恂誠「宋江と武訓」（學11）
劉大杰「儒俠合一の投降派宋江」（人11・26）

▼社會主義の新生事物、支持を強調

俞彤「熱情的に社會主義の新生事物を支持せよ」（紅12）
北大、清大大批判組「教育革命の方向は暴政をゆるさず」（紅12、光12・4）

辛風「階級闘争を堅持し階級調和に反對せよ——『水滸』研究における三つの誤った観点を駁す」（光12・10）

梁效「革命的新生事物はうちかつことができないものである——教育界の『今は昔に如かず』論を評す」（光12・19）
洪立新「文化大革命において湧きでた新生事物を發展せよ」（學12Ⅱ12・14）

翟青『『水滸』のヒューマニズム論を評す』（學12Ⅱ12・14）
紅宣『『水滸』と『國防文學』』（學12）

▼王精衛にたいする論評（じつは周恩来批判）
史鋒「汪精衛賣國記」（學11、中77・1、下Ⅱ2）

林甘泉ほか「農民革命と投降主義路線」（歴6Ⅱ12・20）
中共梁山縣委『『水滸』評論組「農民蜂起のかがやかしい歴史は歪曲を許さず」（歴6）
胡念貽ほか『『水滸』の形成およびその社會背景』（歴6）

▼「普通の労働者」になることをめぐる大字報、報道される「社會主義大学は普通の労働者を養成する」（光12・30）

現代中國の歴史性

▼毛澤東、江青を批判（ウイクトに語った内容について批判をくわえた）

12 フォード大統領訪中、毛澤東と會見

12・10 康生死去

〔瀋陽電機學院で2・24「われわれはけっして普通の労働者にならない」との大字報が貼られ、これに反論がくわえられた〕

1976年
1

2

▼人民日報、北京大學、清華大學の大辯論を連續掲載、張鐵生

「白紙答案の青年」活躍

「大辯論は大變化をもたらした」(人、光1・14) (1・13

まで周恩來追悼)

上海師範大教育革命組「開門辦學はよい」(學1・11・14)

復旦天申文系教師陸士清ほか「新しい花がつぎつぎに咲き、

春は園に満ちている——復旦大學教育革命展覽會巡禮」

(學1)

北大、清大大批判組「科學技術界の右傾まきかえしに反擊」

(人1・31)

「張鐵生の新しい「答案」、(人1・6)

揚群「古代投降派から現代投降派をみる」(人1・21)

劉夢溪「『水滸』と『紅樓夢』」(光1・24)

「プロレタリア文化大革命の繼續と深まり——清華大學教育革

命大辯論の浪を破つての前進を喜びみる」(人2・6)

▼周恩來攻撃つづく

高路「孔丘の憂い」(光2・13)

修正主義路線批判

延風「唯生産力論のいわゆる新論點」(學2・12・14)

關良、姚坤「析中主義は必らず批判しなければならぬ」(學

2)

宮欣「二十年代ソ連黨内の大辯論」(學2)

1・1 毛澤東の詞二首を公表

▼『詩刊』復刊(總81期)

▼『人民文學』復刊(三期まで隔月刊)

1 革命現代京劇『磐石灣』(人文1・

1・20)

蔣子龍「機電局長の一日」(小説)(人

文1)「六月に作者自己批判」

2・3 黨中央一九七六年第一號文件を

發す。張春橋「二月三日に感あり」を

書く

2・20 北京外國人記者團、清華大學構

内の壁新聞參觀(「白ネコ、黒ネコ論」

など暗に鄧小平批判)

1・1 三紙誌社説「世上に難

事なし、ただ登攀を肯んずる

ならば」(毛澤東の「安定團

結とは階級闘争不要ではない、

階級闘争は綱であり、そのほ

かはすべて目である」をはじ

めて引用)

1・8 周恩來死去

2 毛澤東、華國鋒を總理代行

に任命

2・22 ニクソン北京を再訪

2・25 批鄧打合せ會議(華國

鋒の講話)

2・26 北京大學に鄧小平を名

ざし批判の壁新聞出現

▼大慶で生産指向

2 大慶黨委擴大會議

北大、清大大批判組「教育革命の方向は纂改をゆるさず」
(歴1Ⅱ2・20)

北大、清大大批判組「科學技術界の右傾まきかえし風に反撃せよ」(歴1)

李成「ひきつづき批孔せよ」(歴1)

▼華國鋒を暗に攻撃した論文、出現

北大、清大大批判組「孔丘そのひとを再論す」(學報、人2・24)

高路「宋江ひとたび山にのぼれば……」(光2・28)

▼「三項の指示を綱とせよ」に批判つよまる

人民日報社説「階級闘争をつかみ春耕生産を促そう」(人2・24)
「毛澤東の——三項指示を綱とせよとはなんだ、安定團結は階級闘争不要ではない、階級闘争は綱で、そのほかは目だ」を引用)

梁效「任明「三項指示を綱とする」を評す」人2・29、光3・1)

池恒「ブルジョア民主派から走資派へ」(紅3、人3・2)

梁效「克己復禮」再批判」(光3・6)

梁效「林彪のたぐいが「知識私有」を鼓吹した下心はなにか」(光3・11)

▼文藝界のまきかえしに反論

初瀾「文藝革命を堅持し、右傾まきかえし風に反撃せよ」
(紅3、人3・4、人文2Ⅱ3・20)

康立「儒家はすべて陰謀詭計をやるものである」(學3Ⅱ3・14)

吳耕畔「趙だんなの辮髪から阿Q小Dの小辮髪を思い、かねて黨内の悔い改めない走資派の大辮髪を論ず」(學3)

史鋒「蔣介石はどのように家を起したか」(學3)

紅宣「文藝革命の偉大な成果は否定できない——「花獨放」論を斥く」(學3)

現代中國の歴史性

▼文革を小説化

周林發「總攻撃のはじまるまえ」(朝3Ⅱ3・20)「一九六七年一月を描く」

▼江青、活躍

223 江青、若干の省市の責任者を集めて會議、武則天、呂后になぞらえられて光榮だと語る

3・10 人民日報社説「まきかえしは人心をえず」

3・28 人民日報社説「まきかえしに反對し、工生産を促そう」

潘凱「『水滸』は反動理學思潮の産物である」(光3・16〈哲學〉9)

江天「鐵案山のごとし、あに顛覆をゆるさんや」(光3・24)
高路「にらみあってやるのと、うけついでやるのと」(光3・27)

北京大學 鄭思「『水滸』が投降主義を宣物するのを批判し、右傾まきかえしに反撃する」(光3・29)
解祥華「ひきつづき『水滸』を評論するのを深めよう」(人3・28)

▼「洋奴哲學」批判。鄧小平批判強化される

方海「洋奴哲學を批判する」(紅4)
程越「資本主義を復辟する總綱——全黨全國各項の工作の總綱」を論ず」(紅4、光4・5)
人民日報社説「偉大な勝利」(人4・10)

▼鄧小平の「工作總綱」批判

翟青「發表にまにあわなかった原稿を読む」(學4・4・20)
康立「延風『滙報提綱』が世に出る前々後々」(學4)
「『工業發展の速度をはやめる若干の問題にかんして』選批」(學4)

李思延「孔丘は陰謀家である」(歷2・4・20)

楊憲邦「中庸の道と析中主義」(歷2)

南京師範學院 康民「『文景の治』辨」(歷2)

江蘇清江棉紡織廠織布乙班青年理論小組「太平天國後期の反投降反分裂闘争」(歷2)

辛風「鄧小平の復辟陰謀と天安門廣場の反革命事件」(光4・23)

方潤 聞哨「『聚義廳をいま忠義堂に改む』を評す」(人5・13)

▼「文革派」による古參幹部攻撃つよまる

莊嵐「走資派を論ず」(學5・5・14)
方澤生「プロレタリア階級の走資派にたいする闘争を表現せよ」(學5)

▼『人民文學』、天安門事件をとりあげる

5 陶喜善 高興烈「前進せよ、英雄的な首都民兵」(『人民文學』3・5・20)
〔ルポタージュ〕
▼『人民文學』四期以後月刊となる

▼天安門事件、鄧小平失脚、華國鋒擡頭

4・5 天安門事件

4・華國鋒、黨第一主席兼首相に任命さる

4・7 「中共中央の、華國鋒同志が中共中央第一副主席、國務院總理に任じたことの決議」——中共中央の、鄧小平の内外一切の職務を撤廢することの決議

4・26 中共中央の指導者同志、華國鋒、王洪文、張春橋、江青、姚文元、陳錫聯、紀登奎、汪東興、吳德ら、天安門廣場反革命政治事件に活躍した首都勞働者民兵、人民警察、北京部隊、公安部、人民大會堂工作人員代表と會見

▼華國鋒を（名ざしせず）非難
康立「司馬光、舞臺にあがって一年」（學5）

▼文革記念

三紙社説「文化大革命は永く光芒を放つ——中共中央一九六六年五月十六日『通知』十周年を記念する」（人5・15ほか）

北京二七機關車車輛廠文藝評論組・北大・清大著作組「文藝革命とプロレタリア獨裁」（人5・27）

劉先照 韋世明「階級投降派から民族投降派へ」（人6・3）
秀揚「同流共流 一脈相承——『水滸』と『宋史』を語る」（光6・3〈史學〉31）

宮效聞「鄧小平と『二十條』」（學6Ⅱ6・14）

齊永紅「どの階級の自由を必要とするのか——兼ねて鄧小平の世界觀を評す」（學6Ⅱ6・14）

紅宣「鄧小平の反革命與論攻勢を評す」（學6）

昆駿「文化大革命は階級闘争である」（歷3Ⅱ6・20）

張琢「魯迅世界觀の偉大な轉換を論ず」（歷3）

曹永年 孟磨耀「秦始皇時期の社會經濟」（歷3）

石言「南郡守騰文書」と秦の法治路線」（歷3）

洪善思「歷代の商鞅變法にかんする兩派の論争」（歷3）

曹貴林ほか「明末李自成蜂起軍における二つの路線の闘争」（歷3）

▼『水滸』批判は鄧小平批判であることがあきらかにされる
（報道）「現代投降派鄧小平の反動的面目をあばく——北京部隊某部一砲中隊、ひきつづき『水滸』を論評、批鄧を深める」（人6・23）

上綱 五廠労働者著作組「古今の投降派の共通の本質をはつきり知れ」（人6・24）
〔上海第五鋼鐵廠の『水滸』評論の展開は光2・13に紹介〕

▼黨の擴大を指向

三紙誌共同社説「闘争のなかで黨を建設せよ」（人7・1、

現代中國の歴史性

紅7、學7)

康立「社會主義時期ブルジョア階級」(學7117・14)
石命「十月革命後、階級關係問題における一場の論戰」(學7)
均夫「張之洞の工場經營から洋奴哲學の破産をみる」(光7・22「史學」36)

▼周恩來へのあてこすりつづく
威承樓「革命と資本」『汪精衛賣國記』を讀みて感あり」(學7)

▼小説作者の自己批判
蔣子龍「プロレタリア階級の走資派にたいする鬭争を反映するよう努力しよう」(人文4117・20)
『人民文學』1期掲載の小説「機電局長の一日」を自己批判

▼解放軍にたいするあてこすり
高路「『尙方寶劍』から語る」(光7・23)

吉林大學大批判組「孔丘唯心史觀再批判」(光・12)
翟青「人と人の本質的關係は階級關係である」(學8118・14)

高路「心を同じくしてやる、不周山下紅旗亂る」(8・15)
文學研究所近代文學組「第二次國內革命戰爭期、魯迅の文化戰線における鬭争」(歷4118・20)

北京第二機床廠労働者理論組・法學研究所 華志石 黎光
「第二インターの投降主義」(歷4)
丁賢俟 聞小華「投降派の典型」汪精衛」(歷4)

鍾鐸「中露『璦琿條約』とソ連修正主義の覇權の論理」(歷4)

紀平「鄧小平がかさねて、ひとつひとつの獨裁」をやった反動的本質」(紅9)

7 伍兵「きびしい日」(人文4117・20、原載「北京文藝」6月號)
門事件を描いたもの、主人公は、天安門警備の婦人民兵
魏樹海「女共產黨員」(人文4)

▼「對着幹」(にらみあいながらやりとおす)が流行語にある
「鄧小平の、一條一條の獨裁」にたいして「對着幹」をやる」(學8)
の批部經驗交流會の共同發言
▼「人民文學」(5118・20)

8 黃虹堅「大風、大浪のなかで——プロレタリア文化大革命に参加した紅衛兵小將に獻ず」(人民文學)5118・20
「原載『廣東文藝』七六年五期」
「一九六六年八月、文革のときの大學の様子を描く」

上海魯迅紀念館『魯迅詩稿』(文物出版社)
于水「前線」(小説、應募作品(朝8118・20))

▼『朝霞』停刊(8118・20)
▼『人民文學』(6118・20)
魯迅記念特集、周建人、茅盾ら。「抗震

7 大慶で學習運動
7・6 朱德死去

▼江青、活躍
8・9 江青「わたしが女皇になるのに反對するのは、婦人解放と共產主義に反對するものだ」と語る
8・18 松潘、平武地區に地震

▼毛澤東死去(9・9)
9・9 黨中央ほか、「全黨全

柏青「毛主席の『水滸』評論にかなする指示を學習し、批部をあくまでもやれ」(光9・5)

方海「どのように形勢をみるか」『全黨全國各項工作の總綱を論ず』を評す(學9・9・14)

石「歌」たえず革命隊列のなかの「きくい虫」をとりのぞけ(學9)

任「憤」怒りて刃叢に向い小詩を寫む——魯迅後期詩歌の戰鬥性(學9)

「毛主席の既定方針どおりやれ——上海一千人民の戰爭の誓言」(10・9・30)〔本誌記者と注記〕

▼「四人組」による華國鋒批判

梁效「永遠に毛主席の既定方針どおりやれ」(人、光10・4)

梁效「總綱を論ず」と古「復讐」(人10・7)

梁效「赤旗をかついで赤旗に反對する黒い標本」(光10・7)

▼「四人組」逮捕、「四人組」にたいする批判はじまる

中央樂團 李德倫「われわれの黨は大いに希望がある」(光10・10)

洪廣思「四人組」が『創業』を拒殺したのはなにを説明しているか?」(紅11)

任平「まぎれもない投降派」(紅11)

張國輝「洋務派と洋奴哲學を論ず」(歴5・10・20)

嚴敦杰「わが國古代の地震にたいする認識と地震史上の二つの路線の闘争」(歴5)

瀚若「魯迅、廣州にたたかう」(歴5)

▼映画『創業』復活

任平「輝かしい歴史的文獻」(人11・5)〔映画『創業』について毛澤東の批示(78・7・25)があったと公表〕

中共長春映畫制作廠委員會「四人組」が氣狂いじみて毛主席に反對した鐵證」(人11・5)

現代中國の歴史性

詩畫」十五名の作品。

10

『人民文學』7期・毛澤東追悼特集(10・20發行)「全黨、全軍、全國各民族人民に告ぐる書」、黨中央の二つの決定など掲載。解放軍八三四一部隊、浩然、謝冰心、李准などの文章掲載。

▼『人民文學』(8・11・20)

華國鋒、天安門廣場の慶祝大會の特集。

▼シナリオ『創業』發表(大慶油田、長春映畫制作所『創業』創作組集團創作、張天民執筆)(人文8)

▼湘劇『園丁の歌』(長沙市碧湘衛完小「完全小學校」原作、長沙市文藝工作團改編、柳仲甫執筆)(人文8)

9・16 三紙誌社説「毛主席は永遠にわれわれの心のなかに生きている」

10・8 中共中央委員會ほか「偉大な領袖である導師毛澤東記念堂を建設する決定」

「中共中央の『毛澤東選集』出版と『毛澤東全集』出版を準備することについての決定」

10・10 三紙誌共同社説「億萬人民の共通の願い」

10・12 「四人組」逮捕の報道つたわる。上海で民兵約五萬人に銃を支給

10・19 人民日報社説「魯迅に學び永遠に進撃せよ」

10・22・24 北京で祝賀大會

10・25 三紙誌社説「偉大な歴史的勝利」

11・30・12・3 四期人民代表大會常任委員會第三次會議

〔鄧穎超を副委員長に任命〕

杜書瀛 楊志杰 朱兵「映畫『創業』をめぐる展開した重大な闘争」(光11・14)

▼批林批孔再評價はじまる

「歴史を嘲弄した」四人組は歴史の懲罰を受けた―北京の勞働者・史學工作者の一部は「四人組」が歴史を歪曲し黨奪権のために反革命世論を製造した滔天の罪行を憤怒聲討した」(光11・13)
石言「江青の皇帝の夢を粉碎せよ」(人11・14)

▼文藝遺産・外國文藝の全面否定に反論

中國科學院外國文學研究所 柳鳴九「四人組」の「徹底的批判」論は批判しなければならぬ」(光11・20)
徐遜「江青と呂后」(人11・20)

▼文革文藝路線再評價はじまる

人民文學出版社批判組「江青は世を欺き名を盗む政治スリである」(人11・22)

▼湘劇『園丁の歌』復活

洪廣思「黒と白を逆轉し、野心あらわる」四人組が『園丁の歌』を扼殺した反黨的罪行をあばく」(人文8・11・20)
湖南省湘劇團「四人組」を憤怒聲討し『園丁の歌』を心ゆくまで唱う」(光11・22)
高宇「四人組」が『園丁の歌』をしめ殺した罪行は必らず清算せよ」(光11・27)
中共湖南省委宣傳部「『園丁の歌』を扼殺したのも黨奪権のためである」(人11・29)

▼「四人組」にたいする歴史學の批判

武漢師範學院中文系 古平「霍光を論ず」(光12・2(史學)44)
「一九七四年末、『光明日報』におくられてきたが、姚文元のために發表をとめられていたもの。梁效『鹽鐵論』を讀む」を批判」

國家計委大批判組「四人組」は社會主義の四つの現代化を

12・12 北京で『萬水千山』再公演
12・11 上海評彈「蝶戀花」上海、北京で復
活公演

劉白羽「赤い太陽頌」(人12・25)

12・10 第二回農業は大業に學

べ全國會議開催、(第一日に「十大關係論配布」、20華國鋒、葉劍英ら出席・25華國鋒、講話(人12・28公表)
12・26 毛澤東「十大關係を論ず」(56・4・25)公表

破壊した罪禍の首魁である」(紅12)
『中國撮影』編集部批判「篡奪權の野心の自供書—江青が
寫眞に配した黒い詩を評す」(光12・4)

▼「四人組」に反對した反潮流人物を賞讃

「四人組」を討伐した檄文—中央五七藝術大學音樂學院青
年教師李春光の大字報の前後を記す」(光12・5)

▼江青の武則天でっちあげを批判

陳崧(哲學社會學部近代史研究所)「江青の野心と殺機—梁
敏」がでっちあげた武則天にかんする毒文を評す」(人12
・6)

北京師範大學哲學系理論組「四人組」は徹底的にわれわれの
黨の一貫した思想原則に背いた—『永遠に既定方針どおり
にやれ』の反黨大毒草を批判する」(光12・8)

北京部隊政治部理論組「反經驗主義はニセ、反黨反社會主義
は眞」(人12・11)

「文化大革命のなかで成長した反潮流戰士……上海越劇團朱
錦多の反「四人組」の闘争」(光12・15) (人12・14)

▼『水滸傳』批判にたいする批判はじまる

中共中央黨校文史室「四人組」は眞正銘の投降派である

—毛主席の『水滸』にかんする指示を再讀する」(人12・12)

魏華 湯嘯「篡奪權を陰謀したひとつの鐵證—張春橋—」

九七六年二月三日感あり」を評す」(人12・13)

張春波「批孔はニセ、篡權が眞—四人組」の「批孔先鋒」
のバケの皮をはぐ」(光12・14)

「毛主席『水滸』を評した指示を篡改したのは、篡奪權のた
めである—南京の勞働者、解放軍、高等院校の教師學生は

「四人組」が『水滸』評論を破壊した罪行を憤怒聲討」

(光12・16) (光2・28 高路の論文を批判している)

▼周勃を讚美した論文出現

解放軍某部 李延明、北京市建委 隋喜文「劉氏を安んず
る者は、必ずや勃なり」(光12・16)

于翔「江青の百八十度」(光12・16)

寒木「醜劇の舞臺と舞臺裏—四人組」が演出した「京劇革
命十年」(光12・18)

▼周恩來追悼のうごきはじまる

南京市博物館、同文管會「敬愛する周總理、梅園新村にあり」(人12・13、原載江蘇『新華日報』12・8)〔周恩來死去のときに執筆されたもの〕

▼「四人組」逮捕前後について詳報

人民日報編集部「滅亡まえの狂気の跳びあがり——「四人組」が「臨終のいいつけ」を偽造した大陰謀をあばく」(人12・17)

人民文學出版社批判組「走資派を描け」の旗をかかげて資本主義復辟の道をひらいた——「四人組」が走資派を描けと鼓吹した陰謀をあばく」(人文9・12・20)

天津日報編集部「江青が天津に八回やってきた滔天の罪行を徹底的に清算する」(人12・24)

歴史研究編集部「『歴史研究』の遭遇と「四人組」が歴史を利用して反黨をやった陰謀」(歴6 12・20人71・11)

歴史研究編集部「水に落ちた狗、梁效、羅思鼎を痛打せよ」(歴6 12・20)

歴史研究所「中國史稿」編著組「史學領域における階級闘争と「四人組」の反革命復辟の野心」(歴6 12・20)

▼毒草映畫『反擊』批判

中國科學院哲學社會學部、劉再復、劉士杰「「四人組」が黨奪權を陰謀した鐵證——反黨映畫『反擊』を徹底的に批判せよ」(光12・25)

尙占桂「黨奪權をつよめる大陰謀——「四人組」の「既定方針どおりやれ」を評す」(光12・24)

吳江「法家學說の歴史的變遷」(歴6 12・20)

李祖德ほか「「四人組」が秦漢さいの階級闘争の歴史を歪曲した奇談怪論を評す」(歴6 12・20)

▼『人民文學』(6 12・20)

華國鋒にささげる作品七篇、劉白羽ほか、ほかに草明など。「陳毅同志詩詞選」(二十首)

<p>1977年 1</p>	
<p>▼鄧小平は人民内部矛盾である旨、あきらかにする 公安部大批判組「プロレタリア獨裁の矛さを轉倒することは絶対に許さない―『十大關係を論ず』を學習し、『四人組』が敵と我の關係を顛倒した罪行を批判する」(人1・3)「死んでも悔い改めない走資派はいる、たとえば劉少奇、林彪、および王張江姚のたぐいだ、だがこれはきわめて少數であると指摘したもの」</p> <p>「四人組」に逆轉された歴史を逆轉せよ」(特集(光1・5) 歴史研究編集部「『歴史研究』の遭遇と『四人組』が歴史を利用して反黨した陰謀」(人1・11 歴6 76・12)</p> <p>吳江「法家學說の歴史的變遷」(歴76・1 77・出版) 區梅「江青と『君側を清む』」(人1・12) 周培源「『四人組』が基礎理論研究を破壊した本音はどこに</p>	<p>何其芳「狄克から『四人組』の狗頭軍師になるまで」(歴6 12・20) 新岱同「李贄と『水滸』」(歴6 12・20)</p> <p>嚴實「江青が印を」とりあげた」とことと衰術の璽を「うばった」こと」(光12・23(史學)46) 北京師範大 施達青「武則天を宣揚したのは篡黨奪權のためである―梁效のいわゆる『一つの儒法大鬭争』」(光12・23) 詹立波「一枕の黄梁、女皇を語る」(光12・23) 總參謀部大批判組「『民兵を改造する』は篡黨奪權を陰謀したものである―『四人組』が民兵建設の罪行を批判する」(人12・30)</p>
<p>1・1 映畫『東方紅』『洪湖赤衛隊』『天山の赤い花』『秘密の圖面』『小兵、張嘎』『平原遊擊隊』など上映(いづれも『四人組』により上映禁止とされたもの) ▼新聞、周恩來記念論文を連載、錢之光「敬愛する周總理、重慶にたたかう」(光1・5)ほか。</p>	
<p>▼三紙誌元旦共同社説「勝利に乘じて前進しよう」</p> <p>1・5 華國鋒、モンカラ(孟加拉)軍法管理首席執行官と會見</p>	<p>▼山東省で「四人組」批判展開(人、光12・30)</p>

あるか」(人、光1・13)

新華社記者「篡黨奪權の重大な段どり―『四人組』が外國貿易事業で氣狂いじみて毛主席、黨中央に反對し、惡辣にも周總理を攻撃した滔天の罪行をあばく」(人1・14)

▼魯迅の著作出版をめぐる「四人組」の妨害批判

人民文學出版社批判組、魯迅研究室批判組「魯迅の著作は永光に光芒を放つ」(人1・15)

國家出版局批判組「魯迅著作出版問題をめぐる一場の格闘―『四人組』が魯迅の著作出版工作进行を破壊した罪行をあばく」(光1・18)

教育部大批判組「自然科學基礎理論問題をめぐる政治鬭争」(光1・16)

石中英「北大を訪れ『梁效』を語る」(香港・新晚報1・16)

交通部大批判組「反革命ドタバタ劇的一幕」(人・1・17)

哲學社會科學部哲學研究所自然辯證法組「『理論無用論』の反動性」(人1・18)

鐵道部大批判組「篡黨奪權の自供書―『四人組』のなかまが鐵道運輸を破壊した反革命奪權計畫を解剖分析する」(人1・19)

▼「四人組」をトロツキーとする論旨出現

中共中央馬恩列斯著作編譯局 谷山「トロツキーの故き伎重ねて演ず―『四人組』が新舊幹部を對立させた陰謀を批判する」(人1・20)

陳鳴樹 王德厚「その反革命二面派の本相へかえす―姚文元の『魯迅―中國文化革命の巨人』を解剖分析する」(光1・22)

解正「反革命の老調新唱―『四人組』が『軍内ブルジョア階級』をひきずりだすとの陰謀をあばく」(人1・27、原載『解放軍報1・22』)

鍾連「四人組」とトロツキー派」(人1・27)

中國京劇團「偽装をはいで素顔にかえす」四人組」がみだりに文藝革命の成果を獨占した罪行をあばき批判する」(光1・27)

總參謀部通信部大批判組「三本の矢をいっせいに放つ」の

ところは黨奪権にあり」(1・27)

劉元彦、蕭遠強「階級斗争を綱とするか、それとも儒法斗争を綱とするか?」四人組「およびその樂隊が歴史を利用して反黨した若干の謬論を批判する」(文・1111、(ただし日本には五月に到着))

▼毛澤東の決めた後繼者の資格を強調し華國鋒の立場の強調

中共中央組織部 大批判組「四人組」が後繼者(接班人)

五カ條を篡改したのは、組を結んで黨を篡るためである」(光1・30)「指導者がよく知っている、大衆が擁護している、感情的なつながりがある」といったことで選んではならない

新華社「清大、北大から四人組の篡黨奪権の罪行をみる」(人1・30)

中央工藝美術學院大批判組「江青服」のなかにつつまれた國をぬすむ野心」(光1・31)

中央放送事業局批判組「四人組」が殘酷に文藝放送を包圍攻撃した罪責は逃れ難い」(人2・2)

周介人「政治ゴロツキとゴロツキ政治」(人2・3)

▼江青批判

陳高華、田人隆(歴史研究所)「江青は搾取階級の代言人である——いわゆる『法家は農民の代言人である』という反動謬論を斥ける」(光2・3)

王保慶(軍政大學學員)「下心あつてのウソ——江青が『法家は人民を愛した』という反動謬論を駁す」(光2・3)

陳毓熊「反黨の黒い心の暴露——江青が大いに『水龍吟』をうたった罪惡の心をあばく」(光2・5(文學)58)

任竹「ニセの左派、眞の右派」(人2・6)

▼『人民文學』(111・20)毛澤東、

周恩來記念特集「特集と名づけず」毛澤東については、陳其通、徐建春、周恩來については、楊先讓(木刻)、茅盾、趙樸初、王炳南、光未然、張穎、謝冰心、吳英ほか。郭小川遺作の詩「登と九山」も掲載。

北京師範大 中文系批判組「姚文元は老右派である」(人2・7)

北京師範學院解放組「梁效筆下の武則天を評す」(人2・8)
徐遜「勸進表」と『勸進書』(人2・8)

賈山谷「搗鬼術」(人2・8)

鄭翼「四人組」はなぜ『萬水千山』を敵視したか(人2・10)

文化部批判組「歴史に本来の面目をかせせ—江青が革命模範劇の成果を掠奪した罪行をあばく」(光2・8、人2・13)
喬山 俞起「三突出」は反マルクス主義の文藝主張である」(光2・15)

▼エンゲルス論文「權威を論ず」を再掲載

『人民日報』エンゲルス「權威を論ず」(拔萃)を掲載、王澈「四人組」が「管・卡・壓」に反対したのは無政府主義を煽動したのである」を掲載、姚文元がこの論文に批判をくわえていたことを紹介(人2・17)
任竹「高く毛主席の偉大な旗をかかげて、天下大治の新しい勝利をたたかいとれ」(人2・18)

▼外國文學研究に復活のきざし

外國文學研究所批判組「四人組」が外國文藝に對處した修正主義論を批判する」(人文2)

▼周恩來を賞讃、記念する

顏太龍「偉大な戦士、火のような闘争—周恩來總理の西安事變から抗戰勝利にいたる期間、國共闘争の數回の重大事件における輝やかしい事跡を回憶する」(歴112・20)
丁江海ほか「周恩來同志の初期の革命活動」(歴1)
陳中「四人組」雜誌『學習と批判』を裁きの臺へひきたてよ—『學習と批判』が周總理を攻撃した罪行を清算する」(歴1)

▼「四人組」の論文にたいする裁判

谷斯「四人組」反革命醜史の恥すべき辯護—康立の『張良

2・15 春節にあたり、歌劇「白毛女」があらためて上演

李行簡、張歩「你辦事、我放心」(光2・18)

2・19 「魯迅書信集」補遺(光)掲載、十五通

▼『人民文學』(212・20)華國鋒賞

讀の作品六篇掲載。ほかに、楊沫、峻青、曹禺、郭紹虞。「四人組」批判を四篇。

2・5~10 鄧穎超全人代委員長、ビルマ訪問

2・18 政治協商會議全國委員會、春節聯歡會をひらく、沈雁冰副主席があいさつをのべる

2・25 解放軍報社説「硬骨六中隊」に學ぶ大衆運動を展開せよ」(相2・25、人26)

2・28 二・二八蜂起三十周年の記念集會。黨國家領導人葉劍英、陳錫聯、吳德

の政治的立場の轉換を論ず」を評す」(歴1)
諸葛計「四人組」の農民戦争問題における反マルクス主義
の謬論を駁す」(歴1)

劉斯奮「『黔首』を論ず」を評す」(歴1)

樊百川「辛亥革命は儒法闘争であるか」(歴1)

孔繁「荀況の儒家思想にたいする批判的繼承を論ず」(歴1)

劉澤華「四人組」の評法批儒における階級調和論を批判す
る」(光2・21)

任平「組八股を打倒せよ」(人2・21)

南京部隊某部戰士 馬騏「江青はなぜ軍帽が氣にいらなかつ
たか」(光2・22)

▼羅思鼎を批判

海軍某部 邵景均「羅思鼎は人びとをどこへひっぱってこ
うとしたか」『秦王相の建立過程における復辟と反復辟の
斗争』かねて儒法闘争の社會的基礎を講ず」を評す」(人
2・22)「IIもともと一九七四年三月に執筆したもの」

▼江青「四人組」批判

教育部 袁丁「江青が『師道尊嚴』を『批判』した陰謀をあ
ばく」(光2・23)

戴芬「江青史を講ず」(光2・25)

萬水「調整はニセ、反撃は眞の記録」『四人組』が意を授けて
炮制した『若干のいいかたにかんする修正意見』(同上)

中國科學院文學研究所批判組「『四人組』の『晁蓋を空に架
する』論の反動的實質」(人2・26)

新華社記者述評「『鬧きて優れば仕う』を打倒せよ」(光2・
27、人2・27「人は省略あり」)

國家體育委大批判組「江青は『書童』か、『きくい虫』か」
(光3・2)

中國科學院歷史研究所批判組「江青の天津講話を評す」(光
3・3)

中央放送事業局批判組「江青が二枚の圖面『湖南花鼓戲』を
扼殺した罪行は必らず清算せよ」(光3・4)

中央放事業局批判組「姚文元が華主席に反対した罪行は必らず清算せよ」(人3・3)

新華社記者述評「四人組」が「經驗主義」反対のみにくい劇を上演する前々後々」(光3・3)

▼雷鋒學習運動はじまる

三紙誌社説「雷鋒同志に學べ」(人3・5)〔63・3・5、毛の題字が發表され、周恩來も題詞を書いた。76・3、周の題字は發表されなかった〕

▼毛澤東の權威を強調

「紅旗」評論員「毛主席の旗のもと、華主席にびったりついて勝利前進しよう」(紅、人・3・4)

耿正「四人組」が武則天をもちあげたのは漏洞百出」(新3・6)

中國科學院理論組「科學技術界に發生した一場の觸目驚心の斗争」(3・9)

鄭克魯「江青と『モンテ・クリスト伯』(中譯『基度山思仇記』)」(光3・12)

昭岷 易劍 征明(武漢師範學院)「功臣宿將を謀殺した呂后」(新3・13)

文化部文學藝術研究所批判組「野心家のウソ—江青『京劇革命』を駁す」(光3・13)

中山大學大批判組「英雄史觀の大暴露」(光3・15)〔張良についての言及を駁している〕

▼「四人組」にたいする理論的批判

向群「敵と我の關係の根本的顛倒—「四人組」の毛主席のブルジョア階級は「共產黨内にあり」の指示にかんするゆゆしい歪曲を批判する」(人3・14)

▼詩報告『西沙の戦』(光74・3・15) 批判

▼『人民文學』(3113・20) 雷鋒に學べの題字、作品。大慶、大寨にちなむ作品。「四人組」批判。徐光耀(小説)。

3・22 「毛主席の鞍鋼憲法にかんする批示」再掲載

▼雷鋒に學べ、の題字を掲載

(人3・5) 毛澤東、華國鋒の題字〔第一ページ〕、周恩來(日付なし)、葉劍英

(77・3・3)、朱德(63・3・1)の題字〔第二ページ〕

海南軍區批判組、廣州部隊理論組「江青が意を授けて『西沙の戦』をでっちあげた罪惡の陰謀」(人3・17)

新華社通信員、記者「自ら墓を掘り、自ら墓碑をつくる——“四人組”が組の刊行物『學習と批判』をつうじて反革命輿論をつくった罪行」(光3・17)
中華書局大批判組「史綱評要」出版と“四人組”の險惡な心づかい」(光3・17)

袁學凱、高銳、李榮生「偉大な軍事思想、英明な戰略戰術——毛主席が陝北戰爭を指揮したことを回憶する」(人3・18)
劉征「武昌中央農民運動講習所にて——毛主席が中央農民運動講習所を創立した五十週年を記念する」(光3・18)

谷山「組を結び權力を篡奪したトロツキー派」(人3・19)

文化部批判組「文藝作品の“多”と“少”問題における激烈な斗争」(光3・19)
魯迅研究室「魯迅に反對した急先鋒張春橋——魯迅を包圍攻撃した黒い會から語る」(光3・19《文學》64)

▼江青の呂后讚美を批判
中共廣東省委寫作組歷史組「呂后的幽靈と江青の女皇の夢」(光3・20)

「江青が武則天の亡靈をよびよせたのは現代の女皇によるためである」『中山大學學報(哲學社會科學報)』77・1期
出版月日未詳、(光4・7にみえる)

▼江青の文藝理論批判
解勝文「“三突出”は修正主義文藝の創作原則である」(人文3)

江蘇省著作會議大批判組「“四人組”篡黨奪權の反革命の黒い“將棋”の一手」(光3・24)

▼『盛大な祭日』批判

上海市戲曲學校「“四人組”が映畫を利用して反黨をやった

現代中國の歴史性

また一つの罪證——「四人組」が反動映畫『盛大な祭日』でをっちあげた罪惡の心」(人3・23)

▼『紅旗』の内情をあばく

紅旗雜誌大批判組「攪亂、失敗、滅亡の記録——姚文元が『紅旗』を利用して反革命世論をでっちあげた罪行を暴露批判する」(紅3、光3・25)

北京部隊政治部理論組「貪功篡權のばけものの技倆——詩報告『西沙の戦い』を評す」(光3・26〈文學〉65)

新華社記者述評「『四人組』が新聞寫眞を利用した反黨の滔天の罪行を清算せよ」(人3・25)

文化部文學藝術研究所美研室批判組「『四人組』が美術を利用して篡黨奪權したひとつの陰謀——王張江姚が『走資派と闘う』美術作品をでっちあげた前々後々」(人3・26)

▼鄧小平問題に關連する(?)論文出現

廣州部隊理論組「黨にむかって官をくれと手を伸ばしてはならない」(人3・28)

▼「尊師愛生」運動はじまる

教育部袁丁「尊師愛生を提唱する」(人3・27)

內蒙古自治區黨委批判組「いったい誰が復辟をやったか——『四人組』が『王亞卓事件』をでっちあげた陰謀をあばく」(人3・29)

光明日報記者「反黨的『小評論』の奪權の大陰謀——『四人組』の御用道具『光明日報』が第一面にほうりだした毒草」(光3・29)

林基洲「レーニン重病期間のトロツキー派の反動活動」(人3・30)

姚文元批判
上海人民出版社批判組「反革命二面派姚文元を評す」(人3・31、光4・1)

▼姚文元批判

端木國貞 朱兵「書いた皮をはぎとり、その素顔にかえす——黒い組の文筆ボス、姚文元の反革命の道」(光4・2)

鍾廣屏「何ぞそれあい似ることかくのごとき——トロツキールと“四人組”を評す」(光4・4)

▼映畫『千秋業』批判

八映畫製作廠理論組「だれか千秋の浮沈をつかさどる——反黨亂軍の大毒草『千秋業』を批判する」(人4・7)、『千秋業』のシナリオは70・4上海の文藝雜誌に掲載された。八月一日に上演できるようにしろと“四人組”が命令、かつ新劇として五月上演をめざした。

宋家鈺 方積六 唐耕耦「歴史上の武則天と“四人組”の復辟術——『法家の女皇武則天』一文の反革命實質を評す」(光4・7)

關林「梁效の“斷字演義”」(人4・8)

▼新生事物にたいする全面的肯定を否定
潘陽部隊後勤部理論組「新生事物をめぐる尖鋭な闘争」(人4・9)

▼王亞卓事件の真相

「卑劣な陰謀——“四人組”が“王亞卓事件”を製造した真相をあばく」(光4・9) 新華社記者

林田「張春橋のわが國社會主義經濟の土臺と上部構造にたいする惡毒なる詆毀を斥ける」(光4・10)

林田「張春橋の反革命策略を斥ける」(光4・11)

張文煥「“四人組”とバクーニン匪賊」(人4・14)

中共湖北省委大批判組「“四人組”と孔孟の道」(光4・14)

(史學) 59)

▼『毛澤東選集』第五卷發刊

三紙誌社説「毛主席著作を學習する新高潮をまき起せ」(人、現代中國の歴史性

4・2 董必武の詩を發表、また董必武を回想した文章發表(人4・2、光4・3)

▼楊開慧記念

毛澤東と楊開慧の油繪、「戰友」そのの評論發表(人4・5)

4・6 毛澤東の肉筆による葉劍英の詩「遠望」を發表。毛岸青、邵宇の記念の文章も發表(人、光)

・「全國美術展」(批評は人4・13)

▼「人民文學」(4・14・20)、毛澤東選集五卷を慶祝の作品、郭沫若(沁園春)、茅盾(沁園春)ほか計八篇、大慶詩歌選、姚雪垠「李白成」の創作を語る

▼「自然科學爭鳴」正式に出版(一九七五年九月から試刊)

・中國科學院 北京で一連の學術會議と座談會をひらく(光4・20)

4・2 華國鋒、李先念、日本經團連會長土光敏夫と會見

4・4 愛國衛生運動展開

4・9 華國鋒、英國保守黨々首、サッチャーと會見

4・9 華、モリタニアイスラム共和國ダホ大統領夫妻と會見

4・11 人民日報社論「抓綱治國の戰略決策を全面落实せよ」(八項目の目標をかかげる)

「大慶油田の政治工作要點」

4・14 華國鋒、金日成の六十五歳に祝電

光4・16)「毛澤東選集第五卷紹介」(同上)

中共中央の『毛澤東選集』第五卷を學習することにかんする決定(一九七七年四月七日)(人、光4・15)

「人民日報は毛のカラー肖像、全國で二億冊、さしあたり一千五百萬冊、十日間に二千八百萬冊發行(4・30光)」

▼胡風と「四人組」

上海人民出版社批判組「四人組」と胡風集團の異同論」(人4・20、光4・21)

文化部批判組「百花齊放、百家爭鳴」の方針を守れ!「四人組」の文化專制主義を評す」(4・22)

蕭殷「革命英雄」か、内奸の典型か」(人文4・20)

▼『毛澤東選集』第五卷發刊記念

蘇星「社會主義のみが中國を救うことができる——『毛澤東選集』第五卷の農業協同化問題にたいする輝やかない論述」(歴24・21)

▼歴史學の立場から「四人組」を批判

黎澍「四人組の中國歴史學にたいする大破壊——いわゆる儒法闘爭史のペテンを評す」(歴2、人6・23)

劉澤華 王連升「四人組」が史學の領域でふりまわした一面の旗——羅思鼎の『秦漢のさいの階級闘爭を論ず』(歴2)

北京大哲學系 中國哲學史組「歷史觀念論の標本——『儒法闘爭史概況』を評す」(歴2)

北京市財貿幹部校理論組「復辟狂がうたった「反復辟」の高い調子——梁效、康立が西漢の歴史を歪曲した謬論」(歴2)

▼「四人組」の李商隱評價に反論

謝宏「覆滅まえの哀鳴——梁效『李商隱の「無題」詩を論ず』を評す」(歴2)

▼鄔蒙「盜跖」考辨」(歴2)

▼「四人組」に斷定を下す

三紙誌評論員「新舊反革命が結成した黒い組」(人4・27、

蕭育軒「心聲」(人文44・20)〔發

電所の黨書記梅雪玉が「四人組」の手先

き防害に屈せず發送電をつづけ科學家

驗を成功させる。夫の趙輝は事故で死

んだが、四人組の手先が喜んでい

のを知って、梅雪玉はいちどは職場を

離れたが、もどってきたのであった〕

胡萬春「序幕」(人文4)

4・20と5・13 工業は大慶に

學べ全國會議大慶で開催、北

京で閉會(人、光4・23)新

聞名題字、華國鋒の題字は赤

刷)〔北京では4・27から〕

大慶油田黨書記、革命委主任、

宋振明の發言(人4・25)

4・21と25 華國鋒、東北三省を視察(人5・6)

4・26 華國鋒、唐山を視察

華國鋒の論文再掲載

「貴きは意氣」みにあり」(一九六三、四、二)(人光4・26)

紅5)

▼張春橋批判

中共山東省荷澤地委大批判組「張春橋は地主階級の孝子賢孫である」(光4・28)

上海圖書館葛正慧「必らず『四人組』の罪惡の歴史を大衆に示せ」(光4・28)

國家文物局理論組「三十年代の張春橋」(人・49)

▼江青批判

中共山東省昌濰地區大批判組「叛徒江青の罪惡の家世」(光4・28)

▼華國鋒論文發表

「プロレタリア獨裁のもとにおける繼續革命をあくまでやりとげよう」『毛澤東選集』第五卷を學習する」(紅5・人5・1)

中共上海市委大批判組「歴史反革命から現行反革命へ—張春橋の反革命の道を評す」(紅5)

教育部大批判組「毛主席のさしめす方向を遵守してひきつづき教育革命を展開しよう—『四人組』が『五・七指示』を破壊した罪行を批判する」(光5・7)

赤楓「いわゆる『黨内にブルジョア階級を形成』を駁す」(光5・9)

▼楊開慧を記念

長沙警備區 辛文兵「英雄の活氣 霄漢を凌ぐ—毛主席の輝やかしい詞章『蝶戀花・李淑一』に答える」著作二十周年を記念する」(光5・11)

上海師範大批判組「衣鉢相傳、同じく一源より出づ—姚文元と姚蓬子の反革命的な父子關係からかれの反革命のつらがまえをみる」(人5・11)

現代中國の歴史性

5

ラッサで寫眞展「華主席チベットにあり」開催(一九七五年九月に華國鋒が中央代表團を率いてチベットへきた)

4・29

華國鋒、葉劍英、ビルマ共和國總統、ウー・ナオンと會見

▼「光明日報」華國鋒を強調光・編集部「華主席のあとにつづき勝利前進しよう」(光4・30)「備辦事、我放心」を記念)

5・4

工業は大慶に學べ全國會議で國務院餘秋里、報告(5・13閉會)

5・6

華國鋒、オランダ王女夫妻と會見

5・9

工業は大慶に學べ全國會議で華國鋒講話(紅6・人5・9、全文11人、光5・13)

四五五

上海自動化計器一廠ほか「理論隊伍の建設のなかの激烈な闘争」(人5・12)

中共山東省委宣傳部大批判組「古くからの反革命張春橋の本來の面目」(光5・17)

人民文學出版社魯迅著作編纂室「一つの光を投げ群魔ついに現わる―毛主席の重要な批示を學習し、四人組が魯迅の著作出版研究工作を破壊した罪行をあばき批判する」(人5・21) (一九七五年十一月一日、毛澤東が魯迅著作について批示をだした旨のべる)

▼周恩来は『文藝講話』の革命文藝を推進した文化部理論組「周總理の輝やかしい手本を學び、毛主席の革命文藝路線に沿って奮勇前進しよう!」(人5・24)

軍事科學院理論組「江の流れはとめられず、多くの水は東へむかう―四人組がマルクス・エンゲルス・スターリン軍事著作出版をしめ殺した罪行をあばき批判する」(人5・26)

周叔蓮「科學・技術・生産力―四人組が『滙報提綱』を誣蔑し攻撃した謬論を斥ける」(光5・30) (政治經濟學學5)

廣州部隊理論組「江青の『謙虛』とホラふき」(人5・31)

▼「儒法闘争に學べ」運動の「批儒評法」を總括的に批判した論文を發表

吳江「現代復辟派と古代變革史―四人組はどのように批儒評法を利用して反黨陰謀活動をすすめたか」(紅6)

▼「四人組」は『毛澤東選集』第五卷の刊行を妨害したと批判「罪惡的な心くぼり、恥すべき失敗!」四人組が『毛選』五卷の出版を破壊した罪行を批判する」(紅6)

公安部批判組「おおいにかくせない醜史、ぬぐいきれない罪證

5・14 華國鋒、全國工業會議代表七千餘名を接見(人5・15)

▼『人民文學』(5・15・20)、〈毛主席の旗を高くかかげ、華主席のあとについて勝利前進しよう〉と題し、王子野、唐毅、陳登科、葉聖陶らの作品。ほかに、祁章競、周立波、李瑛など。

克西 南丁「英雄のすがた―反潮流戰士、劉東洲の物語」(人文5・15・20) (鄭州の鐵道職員食堂の仕入係が、張春橋を告發する手紙を黨中央にだし迫害をうけるが、四人組「逮捕をむかえた」

▼『文藝講話』記念

人民日報社説「より高く毛主席革命文藝路線の偉大な旗をあげよう!」『文藝講話』發表三十五周年記念」(人5・23) 光明日報社説「より多くのよい作品が世にでることを希望する!」『文藝講話』發表三十五周年記念」(光5・23)

北京の專業、業餘文藝工作者座談會(光5・23)

草明「路をしめす明るい燈」(人5・22)

草明「試金石」『文藝講話』發表三十五周年を記念する」(光5・22)

5・23 北京で文藝士大會(光5・24)・新劇「のぼりはじめた太陽」を上演

5・25 天安門廣場の「毛主席記念堂」完成寫眞公表

瀋陽で「華主席遼寧にあり」寫眞展ひらく

5・28 華國鋒、ボルトガル共產黨總書記、エドイ・ウイラールと會見

6・1 長沙で美術作品展「華主席湖南にあり」ひらく

6・3 華國鋒、コンゴ軍事委員會代表團と會見

「四人組」がたがいにかばいあい、反革命歴史材料を破棄し、人を殺して口を封じた罪惡の陰謀」(人6・5)

蘇述「太平天國革命の歴史篡改をゆるさず」『太平天國內部の尊孔と反亂の鬭争』を評す(光6・9)

陳其通「毛主席の『講話』は永遠に光芒を放つ」『四人組の文藝上の謬論を駁す』(人6・11)
胡可「眞剣に『講話』を學び、きびしく『四人組』を批判しよう」(人6・11)

文化部批判組「幾聲か凄厲しく幾聲か抽泣く——初瀾の『文藝革命を堅持し、右傾まきかえし風を反撃せよ』を評す」(光6・12)

▼レーニン、スターリンを賞讃

中央編譯局理論組「レーニンはマルクス主義の偉大な旗をかがけたかがやかしい典範である」(人6・12)

前同「スターリンはどのようにレーニンの偉大な旗をかがけたか」(人6・13)

前同「偉大な領袖にして導師、毛主席の指導下に、レーニン、スターリンの二つの『刃』をわれわれ中國は棄てなかった」(人6・14)

上海人民出版社批判組「階級異分子姚文元」(光6・18)

上海映畫製作廠大批判組「この貸しはかならず清算してもらおう」反黨映畫『春苗』の誕生と「四人組」篡黨權の罪惡の陰謀」(6・25)

江蘇省著作會議批判組「人民教師の役割を正しく認識し、十分に發揮せよ」(人6・28)

中國科學院理論組「松の高潔なるを知らんとせば雪とくるときを待て」『四人組の『匯報提綱』にたいする誣陷をひっくりかえす』(人6・30)

6・10 文化部藝術局で孫維世の死をもたらしした「四人組」を聲討する大會ひらく「孫維世は九年前、「四人組」のために死去。彼女はスタニスラフスキ・システムを中國にいれるのに力があった」

6・5 解放軍で、華國鋒、葉劍英が「硬骨六中隊に學べ」の題字を書いたのを慶祝する集會ひらく

6・6 スーダン共和国總統、ニマ北京着、華國鋒これを歡迎

6・8 華國鋒、ベトナム總理ファン・ウエンドと會見

6・10 毛澤東の體育獎勵の題字二十五週年を記念。華國鋒、前メキシコ總統、アチエウエリアと會見

6・16 コンゴ軍事委第二副主席、總理ゴーマ北京着、華國鋒歡迎

6・19 華國鋒、ラオス代表團と會見

6・22 華國鋒、『毛澤東選集』五卷の翻譯、出版者ほかと會見

6・28 華國鋒、チンパツプウエイ、アフリカ民族連盟總書記、ムカベと會見

6・29 華國鋒、パレストイン革命代表團と會見

詹立波「儒法闘争はけつして階級闘争にかえることはできない」(光6・30)